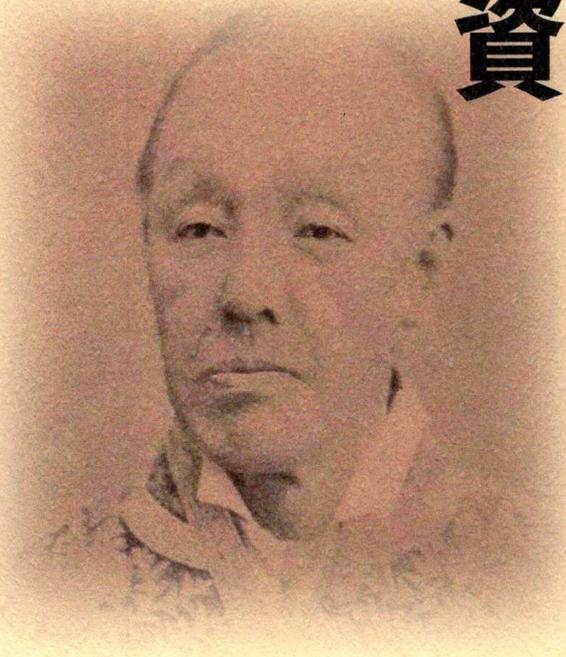
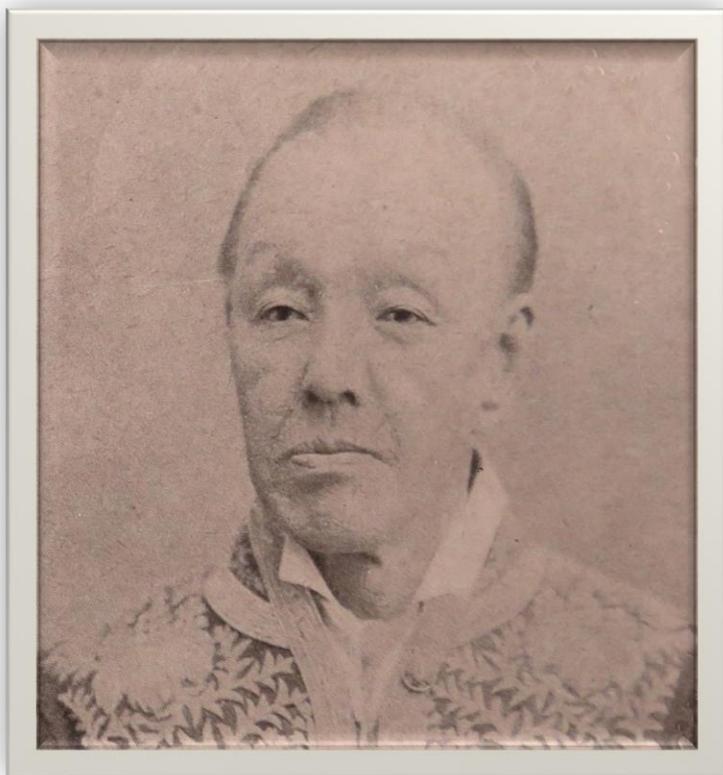


渋沢栄一を大蔵省に推薦した郷純造
を継いだ経済会世話役の郷誠之助

明治・大正・昭和の岐阜黒野の偉人

郷純造・誠之助父子
資料集

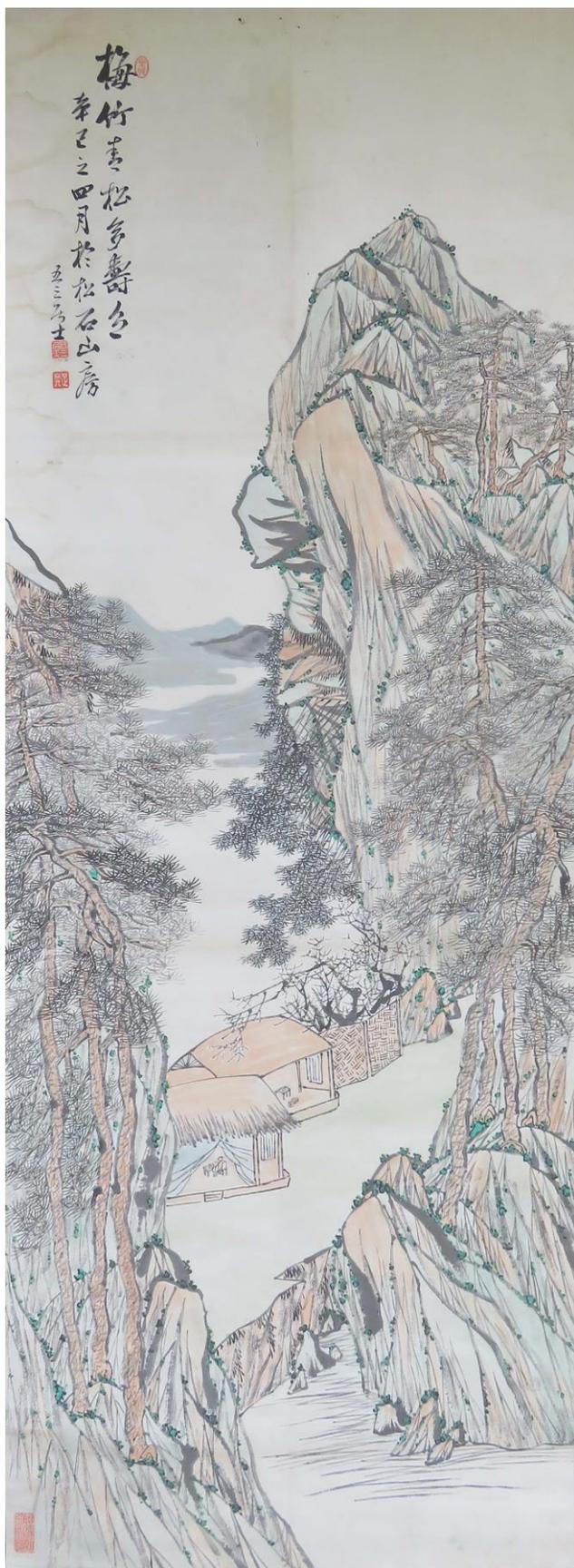




郷 純造 翁



郷 誠之助 翁



郷純造(五三居士) 水墨画
1881年(明治14年)4月 大きき675×1800

「郷純造・誠之助父子 資料集」発刊によせて

「郷純造・誠之助父子 資料集」の刊行、誠におめでとうございませう。

また、貴研究会の皆さまのふるさとへの誇りと偉人の遺徳継承への熱意に、心から敬意を表します。

本書では、令和3年のNHK大河ドラマ「青天を衝け」の主人公である渋沢栄一が、明治2年に新政府の官僚として招聘されるにあたり、郷純造からの推薦が功を奏した事情や、郷誠之助が渋沢没後の財界の世話役として活躍した事績等、渋沢栄一と岐阜市黒野出身の郷純造・誠之助との知られざる接点が明らかにされています。

研究会の皆さまには、これからも地域の宝として顕彰いただくとともに、次代を担う子どもたちにも、本書が広く活用され、偉人の生誕地として知られるきっかけになれば幸いに思っています。

最後となりましたが、貴研究会の益々のご発展を祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

令和3年8月吉日

岐阜市長 柴橋 正直

郷誠之助と同時代の岐阜出身の人たち

黒野出身で戦前の財界で活躍した郷誠之助の名は知っていたが、手に入れていた分厚い「伝」を読んだのは最近である。伝記というと、その人の個性や、家族、友人との関係といったことになりがちだが、これは明治から昭和初期にかけての本格的な企業再建や東京株式取引所の運営、さらには戦争に向かう総動員体制や日米の経済交流で果たした役割まで論じた経営史もしくは経済史ともいうべきものである。戦前の日本は渋沢たちがつくろうとしたように、米にならった株式会社主義（合本主義）であり、創業でも投資利益や高配当を期待させたもので、戦後の日本的経営とは異なると経済史では論じている。今の投機的で短期利潤を追求するグローバル資本主義を考えると、論語から経済倫理を説いた渋沢や、自らは投機を嫌い、公平な経営や制度を目指した誠之助を見直す意義があるだろう。

その他にも同時代の岐阜出身の企業人の資料を、岐阜大の地域資料・情報センターで集めている。平生夙三郎は加納出身で、事業を退いたあとに甲南大学の前身を設立したということで、同大も協力して加納で展示会が行なわれたことがあった。さらに、東京海上日動と大学、十六銀行、商工会議所、県などで、岐阜の企業の中堅社員や学生たちで「岐阜県創生研鑽会」を続けているので、もう一人、安食出身の各務謙吉にも手を広げていた。東京海上の人は、この二人の名を挙げて同社にとって「岐阜は聖地」と語っていた。

この二人は、渋沢栄一が関わった東京商業学校（現・一橋大学）で会計学や英語を学び、これも渋沢が創業に関与したTokio Marineに入社してすぐに、当時まだ10人くらいしかいなかった社員の中で、20代でロンドン支店に派遣されて経営を立て直し、各務は保険のアンダーテイカーとしてその名を世界に知られ、TIME誌にも登場している。各務は戦前の経済政策に誠之助とともに関わっているし、「伝」にも二人は登場する。

誠之助はドイツに留学し、ミルなどのイギリス哲学とともに、ロッシヤー、クニースという歴史学派に学んでいる。もう少し残っていれば、クニースの跡を襲ったマックス・ヴェーバー（プロテスタンティズムと資本主義の精神）に最初に学んだ日本人となったかもしれない。

渋沢は数多くの株式会社の創業や再建（十六銀行も含む）に携わっただけではなく、東京株式取引所を始めとした兜町の金融街と洋風の建物群も作りあげた。晩年は田園調布の新しい郊外住宅地をつくったというように「まちづくり」でも大きな役割を果たした。誠之助は麴町区の二番町に邸宅を構えており、その辺りでアルバイトをしていたことがあるので懐かしい。

当時の財界人は自らの学びだけでなく、一橋大や甲南大のように教育や人づくりにも熱意を注いでいた。郷父子や各務、平生のように出生地の岐阜を離れて、東京やさらには世界で活躍した人たちのことをこの浩瀚な資料集で学ぶとともに、彼らがまちづくりや人づくりで果たした役割についても、グローバルとローカル、経済と社会や倫理から、今の時代にとっての意味を考えてみてはどうだろうか。

ご挨拶

この度は郷純造・誠之助父子の資料集を発刊いただき誠にありがとうございます。多くの資料を精査し網羅して下さり感謝に堪えません。

さて、渋沢栄一の大河ドラマ・「青天を衝け」が好評放送中であります。渋沢と純造は、幕末ほぼ同じ時期に幕臣となりましたが、渋沢は水戸学に傾倒し、やがて倒幕の志士として京都で活動をします。(後、佐幕派に転ずる)この時、栄一は父・市郎右衛門に勘当をみずから乞い、餞別として百両を貰っています。また、生後間もない長女・宇多子に再会出来たのは5年余、パリ帰国後のことで栄一28歳であった。

一方純造は二十歳で江戸へ出て大垣藩・戸田家の草履取りが始まりで、給金は年三両だった。その後、長崎奉行所での勤め、榎本武揚らと樺太の漁場調査、そして、大坂町奉行の家老となった。この時、純造は10日程お暇を貰い20年振りに故郷・黒野村に帰っています。それは25歳の時亡くした父・政方の墓参りと、間もなく生まれる“誠之助”の見舞いであった。「母は我が手を取り涙を流して喜んでくれた」と純造は『自記』で述懐しています。

1868年9月、江戸が明治と改元された事を、渋沢と徳川昭武が知ったのは、帰朝命令を受けパリ留学から帰国途上の船中であった。同年8月、純造は新政府の招聘により、会計局組頭として出仕をしています。

誠之助は3歳のとき維新を迎えた。放蕩息子と揶揄され父純造を随分と困らせた。しかし、悲恋を味わい、無銭旅行で勘当されてからは徐々に改心していった。特に二十歳から約8年のドイツ留学で人生観が変わり、その後の実業界・世話役としての素地が出来たのではないかと思います。また、変わったところでは渋沢の推薦で、大正15年(1926)嘉納治五郎・講道館の初代後援会長に就任したことです。

以上さわりの一部分を記述しましたが、本編では詳しく編集されています。どうか本資料集を座右の友として、時に紐解いてご覧いただければ幸甚に存じます。

笈真理子様には純造と誠之助の和歌短冊や、純造から五代友厚への書翰を解説頂き、また服部高信様には純造の『藩債処分』を調査され、資料のご提供を頂きました。紙面をお借りして厚く御礼を申し上げます。

末尾になりましたが、黒野まちづくり協議会や地域事業者様。黒野城と加藤貞泰公研究会の皆様、同会長の河口耕三様には格別のご尽力を賜り重ねてお礼申し上げます。

令和3年(2021)8月吉日

第11代当主 岐阜市黒野384番地 郷 和彦

郷土の偉人を誇りに

当研究会では黒野城や城主などを中心に郷土の歴史文化を調査研究して 11 年目になりました。この間、調査・研究の成果を地域の住民に知っていただくために各種の市民活動を行っております。

35 年ほど前に私の父（「黒野史誌」編纂に微力ながら協力）から黒野には明治・大正・昭和の初めに大変偉大な人物が出ていたと聞かされてきました。その名は郷純造翁と郷誠之助翁です。しかし地域でも殆ど無名であります。また黒野には純造が学んだ漢学の郷余斎や剣術道場の太野理忠太なども輩出していました。

その郷家の本家を継ぐ郷和彦氏は、以前研究会の副会長で活躍されていましたが、純造や誠之助を調査したいからと会を離れて郷家のブログを立ち上げられ、渋沢栄一関係などの資料を Web 配信しています。

そんな折に 2021 年の NHK 大河ドラマ「青天を衝け」が開始になりました。主人公が渋沢栄一で、郷純造は大蔵省に渋沢栄一や前島密らの登用を大隈重信に推薦した人物であることを、このまま見過ごすわけにはいかないと思い、昨年秋、和彦氏に両名の功績を紹介する案内看板を生誕地に設置したいとお願いをした次第です。案内板は黒野まちづくり協議会や地域の事業者様の助成を賜り、本年 3 月末に設置、4 月 4 日に除幕式を開催して多くの市民に周知することができました。

また案内板設置に続いて、両名の事績を紹介することを目的に、郷家の史料や和彦氏が収集した資料を抜粋・編集し、印刷して資料集の書籍を発刊することにしました。多くの研究文献類は「男爵 郷誠之助君傳」（昭和 18 年発行）から引用されていることも分かりました。本書では一般に出回っていない書籍「財界随想・郷誠之助」や初公開の史料及び編集集中に見つかった資料も含めています。

編集にあたり純造や誠之助の和歌短冊などを解読していただいた寛真理子様や、「藩債処分」を調査されていた服部高信様の資料提供には感謝を申し上げます。尚、郷純造の大隈重信宛書翰などが大学図書館などに多数保管されていますが、本書では割愛させていただきました。

編集するにあたり、郷純造と郷誠之助は明治・大正・昭和初期の日本の政治経済界の役割を担った功績があり、大変偉大な人物であったことを再認識することができました。

3 年後の 2024 年から新 1 万円札が渋沢栄一の顔になりますが、2025 年には郷純造が生誕 200 年、同年に誠之助が生誕 160 年を迎えます。

本書の印刷・製本は、地域の事業者様の寄付金及び令和 3 年度岐阜市市民活動支援事業の採択事業に選ばれて、印刷・製本・発刊することができました。本書は図書館や学校、黒野会館などに寄贈し、多くの人々の目に留まることを願っています。この時代を生き抜いた郷土岐阜出身の偉人を後世に PR できる資料になればと願います。

2021 年 令和 3 年 8 月 吉日

黒野城と加藤貞泰公研究会 会長 河口 耕三

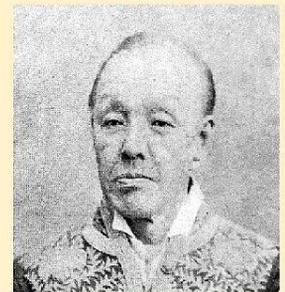
NHK大河ドラマ「青天を衝け」 主人公の渋沢栄一 出世の立役者は岐阜(黒野)出身・郷純造

渋沢 栄一とは

幕臣から明治政府の大蔵官僚を経て実業家に転身。
生涯で500余りもの会社を設立。
「日本資本主義の父」・「銀行の神様」とも呼ばれる。
2024年から新一万円札の顔になる人。



日経ビジネス電子版より



郷 純造とは

郷純造（黒野村生まれ・現仲之町）は、明治新政府で全国大名諸藩の「藩債処分」などに心血を注ぎ、初代大蔵次官（現財務省）を勤めた郷土岐阜の偉人。

明治新政府の大蔵官僚のとき、パリ万博・洋行帰りの渋沢栄一や前島密らの登用を大隈重信に薦めた。

大隈重信は後に「大蔵省で人材を求めていると、郷純造君が洋行帰りの渋沢君を推薦してきた。郷氏はなかなか人物を見る眼があった。氏の薦めできた人物は皆よかった」と語る。（明治42年「実業の日本」より）

郷 誠之助とは

郷誠之助は純造の次男（黒野村生まれ）で、実業界に身を置き、王子製紙など30数社に及び企業再建や日本商工会議所会頭など70を越す要職に就く。

渋沢栄一が「自分の亡き後は郷君（誠之助）によるしくお頼みしたい」という遺言を伝えている。
渋沢栄一を継ぎ、日本経済界世話役の重鎮となった。



郷純造・誠之助父子資料集

目次

資料名称	発行者・著者	出版年月	頁
「郷純造・誠之助父子資料集」発刊によせて	柴橋正直		6
郷誠之助と同時代の岐阜出身の人たち	富樫幸一		7
ご挨拶	郷和彦		9
郷土の偉人を誇りに	河口耕三		8
大河ドラマ「青天を衝け」主人公の渋沢栄一	研究会		10
郷純造・誠之助と関係人物 生没年一覧	研究会		11
目次			12
郷純造・誠之助プロフィール			14
郷純造ー幕末から明治に生きた政治家ー	郷和彦		16
郷誠之助ー財界の大御所・再建王ー	郷和彦		12
郷純造	フリー百科事典ウィキペディア		19
郷誠之助	フリー百科事典ウィキペディア		22
川崎八右衛門(2代目)	フリー百科事典ウィキペディア		24
刊本など			25
大久保利通文書四 岩倉具視宛て	東京大学出版会	1929年(昭和3年)5月	25
「独逸日記/小倉日記 森鷗外全集13」	筑摩書房	1885年(明治18年)12月	27
「随意荘雑集録 上・下」	郷純造	1889年(明治22年)	28
渋沢男が初めて世に出でし當時の大元氣	実業之日本社	1909年(明治42年)7月	32
「濃飛偉人伝 全」 郷純造	岐阜県教育会	1933年(昭和8年)3月	33
「財界随想 郷誠之助」	帆足計編 慶應書房	1939年(昭和14年)4月	35
「人間・郷誠之助」	野田禮史著 今日の問題社	1939年(昭和14年)5月	38
「男爵 郷誠之助君傳」	郷男爵記念会 共同印刷	1943年(昭和18年)11月	41
「極道」郷誠之助の華麗な人生	小島直記著 毎日新聞社	1971年(昭和46年)11月	44
「五代友厚関係文書目録」郷純造書翰	大阪商工会議所	1973年(昭和48年)12月	48
五代友厚宛 郷純造書翰の一部	大阪商工会議所所蔵		49
「大東京繁昌記 山手篇」郷家屋敷	有島生馬記・画 講談社	1976年(昭和51年)10月	50
「郷土 歴史人物事典岐阜」郷純造・郷誠之助	第一法規出版 吉岡勲他	1980年(昭和55年)12月	51
「日本経済のパイオニア⑩」財界世話役 郷誠之助	板橋守邦記 シグネチャー9月号	1984年(昭和59年)9月	52
「黒野史誌」郷純造	黒野史誌	1987年(昭和62年)8月	53
「黒野村の歌」	黒野史誌	1987年(昭和62年)8月	54
「ぎふの偉人たち」郷誠之助	岐阜新聞・岐阜放送	1988年(昭和63年)6月	55
「ふるさと黒野」郷誠之助	岐阜市立黒野小学校	1996年(平成8年)12月	60
「東京の[地霊]」	鈴木博之著 文芸春秋	1998年3月	61
「財界の政治経済史」郷誠之助	松浦正孝著 東京大学出版会	2002年10月	62
「便生録」前島密 郵便創業談	日本郵政公社	2003年(平成15年)4月	64
シンポジウム特集「日本文明の一代恩人」	郵政博物館研究紀要第11号		
前島密の思想的背景と文明開化	井上 卓朗 著	2020年3月	65
「史料を読み解く」秩禄処分 大隈重信宛純造書翰	鈴木淳著他 山川出版社	2009年6月	66
郷純造が仕えていた長崎奉行牧志摩守義制	織本重道記 大宮の郷土史	2010年6月	70
牧志摩守義制漢詩の解説	郷家ブログ 郷和彦記		72
明治天皇東京行幸・大洲藩が担う	東京名勝呉服橋之図		73
郷純造・江戸城無血開城に寄与	郷和彦記		74
「渋沢栄一を知る事典」改正掛と実業界入り	渋沢栄一財団 東京堂出版	2012年10月	75
郷純造 黒野小学校に土地寄贈	黒野小学校男子同窓会	1928年(昭和3年)8月	76
谷汲山華厳寺・本堂前大石燈は郷純造寄付	谷汲山華厳寺	1905年(明治38年)	76
郷純造 葬儀案内状	郷清三郎宛	1910年(明治43年)12月	76

「日本の血脈」哀しき父への鎮魂歌 中島みゆき	石井妙子著 文芸春秋	2013年12月	77
中島みゆき祖父中島武市の故郷岐阜	岐阜新聞 分水嶺	2012年(平成24年)4月	79
「大志を抱いた人びと」岐阜県人の北海道開拓物語	岐阜県歴史資料保存協会編	1998年	79
純造と原三溪の接点 「図録 原三溪と日本美術」	原三溪展実行委員会	2014年	80
「中山道加納宿66号」黒野村の銀行	中山道加納宿文化保存会	2015年(平成27年)10月	81
「中山道加納宿67号」財界の世話役郷誠之助	中山道加納宿文化保存会	2016年(平成28年)4月	83
各務鎌吉と平生釰三郎	郷和彦		85
文献・調査			87
郷純造・誠之助の書翰・著書	国立国会図書館サーチ		87
藩債処分・・・幕末大名の借金顛末記	服部高信 記	2020年(令和2年)7月	88
「明治前期財政経済史料集成 第九巻」	明治文献資料刊行会	1963年(昭和38年)9月	92
郷誠之助 講道館の後援会会長	渋沢栄一記念財団デジタル版	2020年12月	94
新聞記事			97
郷誠之助男の足跡 報知新聞	神戸大学付属図書館	1936年(昭和11年)12月	97
伝説と歴史の谷間 甥が語る男爵 郷純造	郷浩記 中日岐阜ホームニュース	1985年(昭和60年)12月	99
土魂商才 渋沢栄一	電気新聞 北 康利 作	2020年3月	99
50年の証言 財界の巨峰・郷誠之助	岐阜日日新聞	1975年(昭和50年)6月	100
百年百人 郷純造・誠之助父子	中日新聞	1988年(昭和63年)2月	102
犬飼元首相のわび状	中日新聞	2012年(平成24年)5月	103
渋沢栄一に恩人 明治政府官僚の郷純造	岐阜新聞	2021年(令和3年)1月	104
生誕地に案内板設置除幕式	中日新聞・岐阜新聞・CCNTV	2021年(令和3年)4月	105
WEB・データベース			106
渋沢栄一を推薦したという郷純造について資料	埼玉県立久喜図書館	2013年8月	106
第7回講演 渋沢栄一の事業・経営理念	渋沢史料館館長 井上 潤	2019年11月	107
「大河ドラマを10倍面白く見る方法」	ブログ管理者「pansars」	2020年7月	108
渋沢栄一を推薦したのは誰？			
麴町界限 わがまち人物館 郷誠之助	千代田区麴町地区連合町会	2020年12月	109
文芸・趣向			110
純造の剣術巻物 大野理忠太道場	目録三巻 郷和彦蔵	1844年(天保15年)4月	110
編者郷純造が収集の印譜	松石山房印譜ほか		111
郷純造が一軸180円で買った藝阿弥が32万円に	読売新聞	1919年(大正8年)11月	112
郷純造の書・水墨画	郷純造		114
郷純造の和歌短冊	郷純造の書		115
郷誠之助の和歌短冊	郷誠之助の書		117
郷誠之助・根付を収集	フリー百科事典ウィキペディア・東京国立博物館WEB付		118
別冊太陽 骨董をたのしむ 印籠と根付	平凡社	1995年1月	119
郷純造の徳行 小野正法寺		2021年(令和3年)1月	120
郷家写真・系図			121
郷純造翁・郷誠之助翁			121
昭和時代初期の黒野 米軍撮影航空写真	国土地理院HP	1948年(昭和23年)	124
郷家家系表			125
黒野村本家家系表			126
生誕地に案内板設置			127
案内板設置除幕式			128
引用文献			129

郷純造・誠之助プロフィール

一．明治に生きた政治家

＝立身出世＝

郷 純造

二．財界の世話役・再建王

郷 誠之助

- ・ 悲恋
- ・ 番町会
- ・ 帝人事件

郷純造

・ 幕末から明治に生きた政治家

文政八年（一八二五）〜明治四十三年（一九一〇）美濃国方懸郡黒野村（現・岐阜市黒野）に農家の三男として生まれる。幼名嘉助のち策一を名乗る。号を五三居士と称す。幼少より読み書き算術は抜群で、野良仕事は免除される。漢学を御望の郷余斎に学び、剣術は大垣藩直轄道場、黒野・下鵜飼の大野理忠太に学ぶ。

その目録三巻は次の通りである。

- ・ 一刀流剣術（表五段、裏五重）
- ・ 一刀流剣術中極（五位）
- ・ 先意流薙刀中極。以上、何れも天保二五年（一八四四）皆伝。

弘化元年（一八四五）二十歳のとき、笠松代官になる夢を抱き江戸へ上る。始め大垣藩主・戸田采女正の用人・正木喜左衛門の若党の草履とりとなる。次いで仕えた、旗本・牧志摩守が長崎奉行となり給人格で随伴す。

嘉永四年（一八五二）長崎奉行所でジョン万次郎の取り調べを行い、寛大

な処置で故郷土佐へ帰す。

又、同五年「オランダ別段風説書」でペリー来航を予知する。それらの親書等は全て時の老中・阿部正弘に逐一報知された。

文久元年（一八六一）～慶応元年（一八六五）大阪町奉行・鳥居越前守と松平勘太郎の家老を務める。慶応二年、家老を辞して江戸に帰り御家人・園弥平の株を譲り受け、念願の幕臣となり番台並びに撤兵隊（さつぺいたい）となる。江戸城無血開城に寄与する。

明治元年新政府に出仕、会計局組頭。以下同二年大蔵少丞、同三年大蔵権大丞、同五年負債取調係、同七年大蔵大丞、同一〇年国債局長兼大蔵卿出張中代理、同十七年主税局長、同十九年初代大蔵次官、同二十一年退官。

※特に幕末、各藩の負債状況を調査し、大隈重信らに具申をした。その処分に心血を注ぐ。

その間、駿府に下野していた渋沢栄一、前島密らの登用を大隈重信に薦めた。後の渋沢らの活躍を見ると特筆すべき事だ。（実業之日本社明治四十二年七月発行参照）。

又、明治三年十月二十五日付大久保利通から岩倉真視への書翰には、「郷権大丞ヲ断然免職カ転勤ニナラス候」と名指しで叱責している。（大久保利通文書四・五三五、九十一頁）。

尚、純造の四男・昌作は二歳のとき三菱の創始者・岩崎弥太郎のたつでの願いで養子となり、岩崎豊弥と名乗る。

又、長女の幸子は二代目・川崎八右衛門へ嫁す。

隠居して「随意荘雜集録上・下」を著わし、森春涛（しゅんとう）、森槐南（かいはん）、原善三郎（三溪の養祖父）らと交わる。宮中、特別に杖を許される。

正二位 勲一等瑞宝章 男爵 貴族院議員。

※郷純造は、黒野小学校に約二千坪・黒野多賀神社に約千五百坪・黒野墓地に約五百坪・小野正法寺に約四千坪等寄付する。

又、多賀神社に拝殿を、正法寺には、宅間良賀の涅槃図の大幅並びに、十三仏の画幅も寄付している。同寺観音堂の寄付も純造である。

明治三八年二月谷汲山・華嚴寺の本堂前に大石灯籠二対を寄贈している。

《二〇一七（平成二九）》年十月の台風二二号で周りの大木が燈籠を直撃し倒壊した。（その後撤去された。）

郷誠之助 明治から昭和初期に活躍

純造の二男として、美濃国方懸郡黒野村に生まれる。大阪町奉行家老の父・純造のもとへ届けられる。東京麹町に住み明治三年番町小学校へ通う。生まれつき負けず嫌いで両親を随分困らせた。明治一〇年、十三歳の時仙台に赴き、仙台中学に学ぶが二年で帰京する。

中島行孝の塾などで、英語、漢学を学ぶ。明治十三年、十六歳の時生まれ故郷、美濃黒野へ無銭旅行をなすが父より勘当を受ける。（途中静岡知事に金を無心の為）

明治十六年、十九歳の時東京帝国大学法科専科に入学する。翌年二月には伊藤博文の紹介状（青木大使宛て）を携えてドイツ留学のため横浜から渡欧の途に就いた。（大山巖の欧州視察船と同船）

ドイツでは哲学・経済学を学び経済学博士の学位を取得する。明治二十四年十二月帰国。留学中、森鷗外と出会う。

「独逸日記」明治十八年十二月二十四日の記事で三歳年少の郷について

「郷誠之助と相見る。誠之助はハルレに在りて経済学を修む。かつて津城とハイデルベルトに同居したりしことある故、此祭日にも亦津城を訪へるなり。

快瀧の少年にて、好みて撞球技を為す」と書いている。

註：津城は宮崎道三郎の号。宮崎は伊勢・津の生まれのため、津城と名乗った。法学博士で日本大学の創設者。

帰国後一転して実業界に身を置くことになり、明治二十八年、日本運輸の社長を始めとして、日本メリヤス、日本鉛管、日活、東電灯、入山探炭（後の常盤炭鉱）らの整理・改革に携わる。特に入山探炭では業績を伸ばした。大正六年、退職手当として三〇万円を貰うが、自分は二万円のみで残りは社員ほかに分け与える。

その他、王子製紙の再建（苫小牧工場の建設）に成功を治めた。三十社に及ぶ企業、七十を越す要職に顔を連ねた。主な要職は、

- ・「東京株式取引所理事長」・「日本商工会議所会頭」
- ・「東京商工会議所会頭」・「日本工業倶楽部専務理事」等。

東京国立博物館に誠之助が寄贈した「郷コレクション（根付）」がある。海外流出を防ぐためにと収集し、全てを箱に収め寄付した。それらは内外から大変高い評価を得ている。

又、父・純造の収集品は大正八年、東京美術倶楽部で売り立てがあり、百万円を越した。確かその内の藝阿弥の「滝の山水」は、三二万九千円の値を付けその後、根津美術館に収納された。

因みに、当時売上額が百万円を超えたのは、鴻池家、伊達家に次いで史上三位を占めたと言われた。

■**悲恋** 誠之助十九歳の時、大蔵省銀行課長・岩崎小二郎の姪、中村のぶ子（一八歳）と恋仲に落ち、将来を誓い合った。（拙稿「黒野村の銀行」参照）岩崎課長は、上司の郷純造（主税局長）の倅・誠之助と、姪・のぶ子との交際は不味いと考え、家元の佐賀へ帰した。

二人の間を引き裂かれたのぶ子は悲恋を憂い、誠之助に最後の手紙を認めた

のち、自ら服薬により命を落とした。誠之助は最晩年知人に彼女の墓を探して貰い、墓参りの案内をその知人に頼むが叶わなかった。誠之助は生涯独身を通したのは、この一件からではないかと云われている。

■**番町会** 郷誠之助の徳望を慕う財界の後輩らが廻町番町にある私邸で月に一度食事をし乍ら世情や経済のことを話し合う言わば若手の勉強会である（大正十年頃）。

メンバー・正力松太郎・中野金次郎・河合良成・伊藤忠兵衛・岩倉具光・永野謙
・渋沢正雄・松岡潤吉・春田茂躬・後藤国彦・中島久万吉・金子喜代太ほか
（・小林二三・根津嘉一郎・五島慶太・堤康次郎ら準会員）

河合良成：郷の秘書的役割、戦後第一次吉田内閣・厚生大臣

小松製作所の社長となり再建に成功。

後藤国彦：新聞記者。郷の書生、側近として二十数年仕える。虎の門事件で免職の正力松太郎を郷に推薦し読売の社長に。京成電鉄社長。男爵郷誠之助君伝の発行者。

■**帝人事件** 事の起ころは昭和二年、世界大恐慌のあおりで、鈴木商店が倒産した事からである。その系列にあつた帝人（帝国人組）の株式・二十二万株は台湾銀行に担保になつた。帝人の業績が良くなり株価も上がった故、元鈴木商店の大番頭・金子直吉が株を買い戻すため、鳩山一郎や番町会に頼み十万株を買い戻した。その後、帝人が増資したため一層株価が上昇した。

時事通報（代表・武藤山治 岐阜出身）が番町会が関与したと記事にした。

政財界十数名が逮捕され、時の斎藤内閣が崩壊した。然し全員無罪放免となつた。

これは倒閣のための陰謀であつた。昭和九年に起きた疑獄事件である。

【参考文献】

- ・「財界随想 郷誠之助」編者：帆足計・「人間 郷誠之助」著者：野田禮史
- ・「男爵 郷誠之助君伝」代表者：後藤国彦

岐阜市黒野 郷 和彦 記

郷純造

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

郷 純造（ごう じゅんぞう、文政8年4月26日（1825年6月12日） - 明治43年（1910年）12月2日）は、**日本の武士・幕臣、大蔵官僚、政治家である。男爵。**

目次

- 人物**
- 略歴**
- 栄典**
- 家族・親族**
- 系譜**
- 脚注**
- 参考文献**
- 関連項目**
- 外部リンク**

人物

美濃国黒野（現在の岐阜市黒野）の豪農の三男として生まれる。弘化元年（1845年）江戸に出て大垣藩用人に武家奉公した後に旗本など奉公先を転々とするが、長崎奉行牧義制の納戸役として嘉永5年（1853年）のオランダ使節来訪問題に対応し、続いて箱館奉行堀利熙の用人としてその樺太・蝦夷地巡回に随行するなど対外問題に遭遇、更にその経験を大坂町奉行鳥居忠善に買われて貿易問題を担当して同家の家老として抜擢された。鳥羽・伏見の戦い直前に撤兵隊に属する御家人の株を買って幕臣となり、程なく差図役（士官）に登用され、最終的には撤兵隊差図役頭取、旗本となる。江戸開城前後、同隊の新政府に対する徹底抗戦路線には従わずに江戸開城後は新政府軍に従った。明治維新後は新政府に入り大蔵官僚として活躍する。特に渋沢栄一や前島密、杉浦愛蔵ら旧幕臣の登用を大隈重信や伊藤博文らに薦めた功績は特筆すべきである。だが、それが原因で幕臣嫌いの大久保利通から憎まれていた（明治3年10月25日の大久保から岩倉具視あての書簡には郷を「断然免職か転勤ニならず」と名指しで明記されているほどである）。そのため、大久保が大蔵卿に就任して政権の中枢を担った時代には重要ポストから外されて干されることになった。大久保の没後、大隈や伊藤が政権の中枢に立つようになると漸く再評価されて大蔵大輔（後に初代大蔵次官と改称）を務めたが、実務官僚の地位に留まった背景には大久保政権下の不遇時代が尾を引いたからと言われている。退官後は貴族院議員となった。

略歴

- 1868年（慶応4年） - 5月、工兵差図役頭取。8月、鎮将府会計局組頭
- 1869年（明治2年） - 大蔵少丞
- 1870年（明治3年） - 大蔵大丞
- 1872年（明治5年） - 負債取調掛
- 1874年（明治7年） - 国債頭

- 日本の政治家
郷 純造



生年月日 文政8年4月26日（1825年6月12日）

出生地 ● 日本・美濃国黒野

没年月日 明治43年（1910年）12月2日）

親族 次男：郷誠之助

- **貴族院議員**

在任期間 1891年4月15日 - 1910年12月2日

- 1877年（明治10年） - 国債局長
- 1882年（明治15年） - 大蔵少輔心得
- 1884年（明治17年） - 大蔵少輔兼主税局長
- 1886年（明治19年） - 大蔵次官
- 1888年（明治21年） - 退官
- 1891年（明治24年） 4月15日 - 貴族院勅選議員^[1]
- 1899年（明治32年） 8月14日 - 錦鶏間祇候^[2]
- 1900年（明治33年） 5月9日 - 勳功特授 男爵^{[3][4]}。

栄典

位階

- 1886年（明治19年） 7月8日 - 従四位^[5]
- 1886年（明治19年） 10月20日 - 従三位^[6]
- 1888年（明治21年） 11月28日 - 正三位^[7]
- 1900年（明治33年） 6月20日 - 従二位^{[3][8]}
- 1910年（明治43年） 12月2日 - 正二位^[9]

勲章等

- 1887年（明治20年） 9月29日 - 銀製黄綬褒章^[10]
- 1888年（明治21年） 11月28日 - 勲二等瑞宝章^[7]
- 1900年（明治33年） 5月9日 - 男爵^[4]
- 1906年（明治39年） 4月1日 - 旭日重光章^{[11][12]}
- 1910年（明治43年） 12月2日 - 勲一等瑞宝章^[13]

家族・親族

実業家の郷誠之助は次男。四男・昌作は数え2歳で三菱財閥の創業者・岩崎弥太郎の養子となると同時に岩崎 豊弥（いわさき とよや）と改名、実兄の誠之助同様実業界で活動した。昭和天皇の侍従長を務めた入江相政は岩崎豊弥の娘婿（すなわち郷純造及び岩崎弥太郎の義理の孫）であり、実業家の岩崎勝太郎は豊弥の長男（従って純造及び弥太郎の孫）である。九男の翔雄は兄・誠之助の養子となって男爵を継ぎ、稲葉正繩の娘を妻とした。

長女の幸子は東京川崎財閥の2代目当主・2代目川崎八右衛門（東京川崎財閥創業者・初代川崎八右衛門の三男）に嫁いでおり、東京川崎財閥の3代目当主・川崎守之助（2代目八右衛門の長男）は純造の孫にあたる。また茶道宗徧流四方庵8代家元の石原恵香も純造の孫にあたる。次女の英子は学習院女学部卒業後、大東海上火災保険（のち東京海上に吸収）社長・北田彦三郎に嫁いだ^[14]。

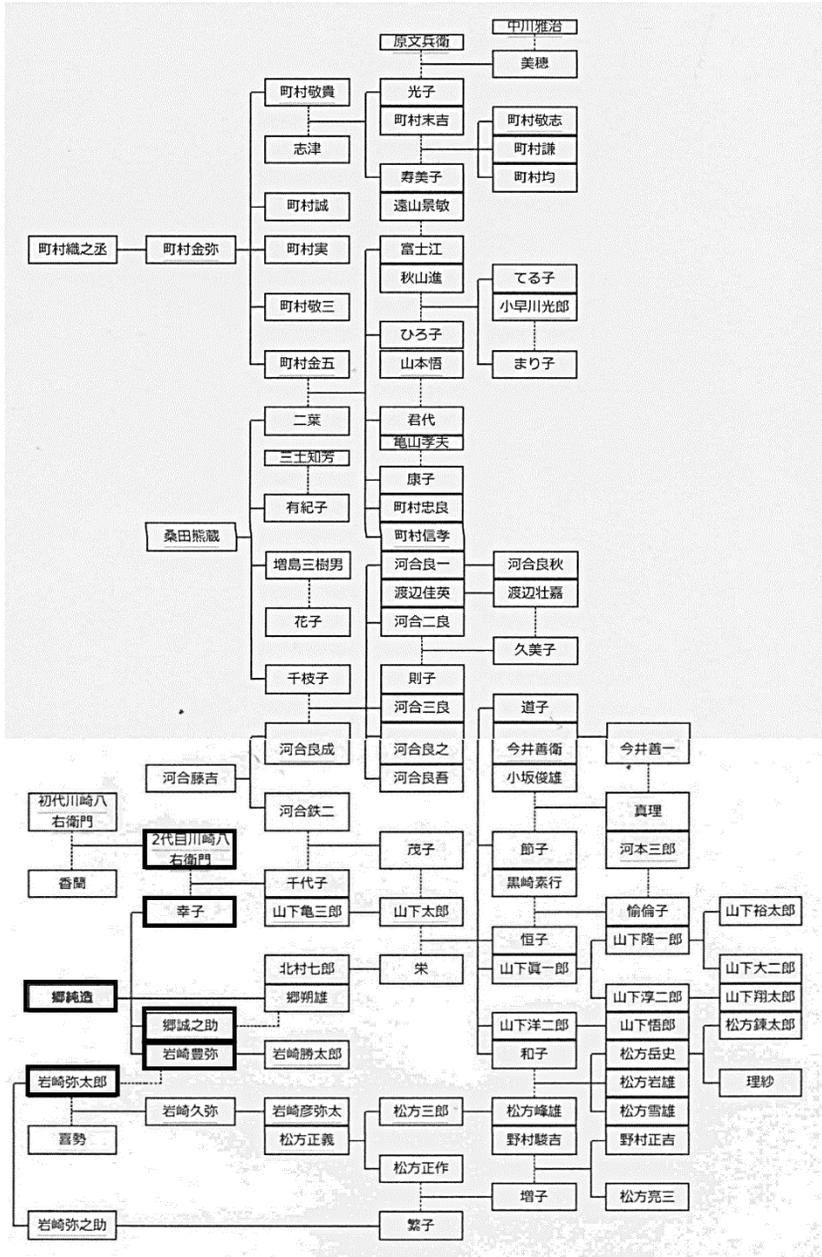
甥（妹の子）に十勝経済界の重鎮となった中島武市（シンガーソングライター・中島みゆきの祖父）がいる。

系譜

- 郷氏 大江広元の後裔を称し、先祖がまず出羽国左沢（あてらざわ、現山形県大江町）に居住し、後に室町末期に美濃国方縣郡（現岐阜市）に遷住し、江（ごう）氏を名乗ったという^[15]。



長男の郷温



参考文献

- 郷男爵記念会編『男爵 郷誠之助君伝』1943年発行、1988年復刻・大空社。
- 佐藤朝泰『豪閥 地方豪族のネットワーク』2001年、406-407頁。

関連項目

- 岩崎家 - 三菱の創業者一族。純造の四男・昌作（岩崎豊弥）の養父の一族でもある。
- 東京川崎財閥 - 純造の娘・幸子の嫁ぎ先がオーナーの金融財閥。

外部リンク

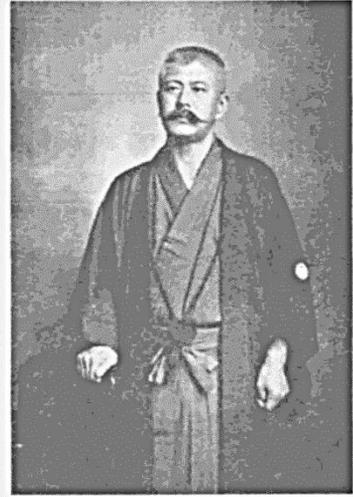
- 郷純造書簡 (http://cork.wul.waseda.ac.jp/kosho/i14/i14_b0283_6/)
- 黒野村郷家家系図 (<https://www.goke.jp/>)

公職		
先代： 吉原重俊（→次員）	● 大蔵少輔 1884年 - 1886年	次代： （廃止）
日本の爵位		
先代： 叙爵	男爵 郷（純造）家初代 1900年 - 1910年	次代： 郷誠之助

郷誠之助

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

郷 誠之助（ごう せいのおすけ、元治2年1月8日（1865年2月3日） - 昭和17年（1942年）1月19日）は、日本の実業家。日本商工会議所会頭、日本経済連盟会会長、東京電燈会長、東京株式取引所理事長などを歴任。貴族院議員。



郷誠之助

目次

来歴・人物

親族

番町会

栄典

系譜

来歴・人物

元治2年（1865年）1月8日、大蔵官僚郷純造の次男として美濃国岐阜（現在の岐阜県岐阜市）で生まれる。

平河小学校（現・千代田区立麹町小学校）卒業後^[1]、官立東京英語学校（のちの一高）、さらに尺振八が塾長であった浜町河岸の共立学舎に通い、明治10年（1877年）から12年（79年）まで県立仙台中学（1886年廃止）にて学ぶ。帰京した明治13年（1880年）には中島行孝の塾通いと共に家庭教師が就き英語・漢学を学ぶ。明治14年（1881年）同志社英学校に入るも行商をする同級生らに影響されこの年限りでやめ、明治15年（1882年）の私塾通いなどを経て、明治16年（1883年）東京大学（のち帝国大学、東京帝大）選科入学。明治17年（1884年2月）ドイツに留学し、ハイデルベルク大学で7年間に渡ってヘーゲル、ジョン・スチュアート・ミルなどを研究し、哲学博士号を授与される。明治24年（1891年）12月に帰朝し、農商務省に嘱託で勤務する。



郷誠之助

明治28年（1895年）に日本運送社長となり会社の再建に当たった。その後は、財界に一貫して身を置き、日本メリヤス、日本鋼管、入山採炭、王子製紙の社長や取締役を歴任して各会社の再建を成功させ、特に王子製紙では、新聞のための紙の国産に成功したことが特筆される。明治43年（1910年）日本醤油醸造の再建は、失敗したが、明治44年（1911年）東京株式取引所（現在の東京証券取引所の前身）理事長に就任した。同じ年に貴族院議員になり、終生務めた。大正2年（1913年）東京商業会議所特別議員。大正6年（1917年）日本工業倶楽部の設立に参加し自ら専務理事となった。大正11年（1922年）日本経済連盟会常務理事に、昭和5年（1930年）には日本商工会議所会頭に就任し、こうして郷は、第一次世界大戦後から昭和戦前にかけて、日本財界のリーダー的存在となっていた。このほか、東京電燈の再建や、内閣参議、大蔵省顧問にも郷の手腕が見込まれての起用となった。

しかし、郷が世話役となって主宰していた若手財界人の勉強会であった「番町会」が昭和9年（1934年）帝人事件に巻き込まれ、番町会会員は検挙された。結局、帝人事件は斎藤実内閣を倒す陰謀で検挙者全員が無罪となった。

親族

父・純造は大蔵官僚で、退官後貴族院議員に勅選された。弟の昌作は数え2歳で三菱財閥の創始者・岩崎弥太郎の養子となると同時に豊弥と改名し、兄・誠之助と同じく実業界で活躍した。元岩崎勝商事社長・岩崎勝太郎は誠之助の甥（岩崎豊弥の長男）で、随筆家・入江相政は誠之助の義理の甥（岩崎豊弥の娘婿）にあたる。なお誠之助は生涯独身で末弟・朔雄（純造の九男）を養嗣子としたが、朔雄は肥前国平戸藩第12代藩主・松浦詮の三男で山城国淀藩12代目藩主・稲葉正邦の養嗣子となった稲葉正繩の三女・英子と結婚した。松浦詮の四男で出羽国秋田藩主佐竹氏の分家・佐竹東家の養嗣子となった佐竹義準の三女・操子が弥太郎の嫡孫で三菱地所の取締役を務めた岩崎彦弥太（三菱3代目総帥・岩崎久弥の長男）に嫁いだため、郷家は三菱の創業者一族・岩崎家と二重の姻戚関係にあり、岩崎彦弥太の妻と郷誠之助及び岩崎豊弥の弟の妻が従姉妹同士ということになる。また姉の幸子は東京川崎財閥の2代目当主・2代目川崎八右衛門（東京川崎財閥創業者・初代川崎八右衛門の三男）に嫁いでおり、東京川崎財閥の3代目当主・川崎守之助（2代目八右衛門の長男）は誠之助の甥にあたる。なお、東洋大学および岡山大学教授で考古学者の和島誠一は誠之助の庶子とされる^[2]。

番町会

郷誠之助を中心として、財界の斡旋・調停などで活躍した若手実業家のグループ^[3]。元部下の岩倉具光、河合良成、後藤罔彦により設立された^{[4][5]}。東京・番町の郷の邸宅で毎月1回会食したところから番町会と呼ばれ、1923年ころから1934年ころまで続いた^[3]。設立者に加えてメンバーとされる人物は、永野護、河合良成、長崎英造、正力松太郎、小林中、中島久万吉、中野金次郎（のちに日通社長）、伊藤忠兵衛、金子喜代太（のちに浅野セメント社長）、春田茂躬（日中合弁「中日実業」専務取締役）、渋沢正雄（渋沢栄一三男）、松岡潤吉（松岡修造（実業家）の娘婿）ら^{[3][6]}（河合良成は小林中と長崎英造は関係がなかったと後年の著書で述べている^[7]）。1933年に会のメンバーらが帝人株10万株を入手したことに対し、1934年に武藤山治（元鐘紡社長）経営の『時事新報』が「番町会を暴く」と題した糾弾記事を連載し、政治家と財界人の癒着による不正であると攻撃した^{[3][8]}。連載中に武藤が暴漢に射殺されたことから番町会の疑惑が拡大し、また、帝人事件に絡んでメンバーが検挙されたことから会の名前が広く知られるようになった^[3]。

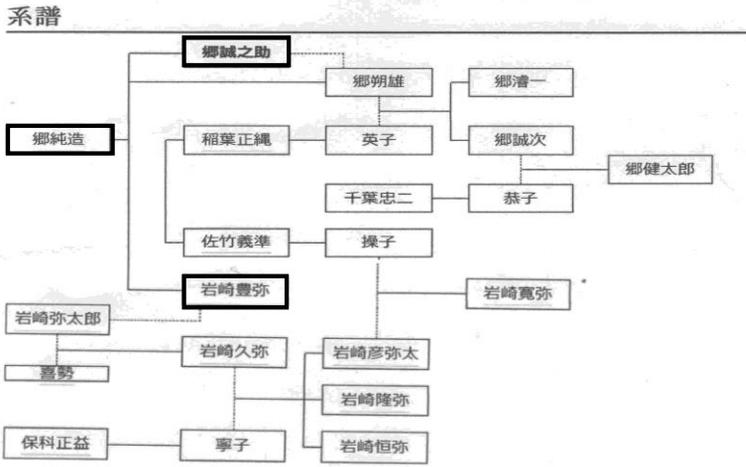
栄典

位階

- 1900年（明治33年）9月10日 - 従五位^[9]
- 1926年（大正15年）12月1日 - 正四位^[10]

勲章等

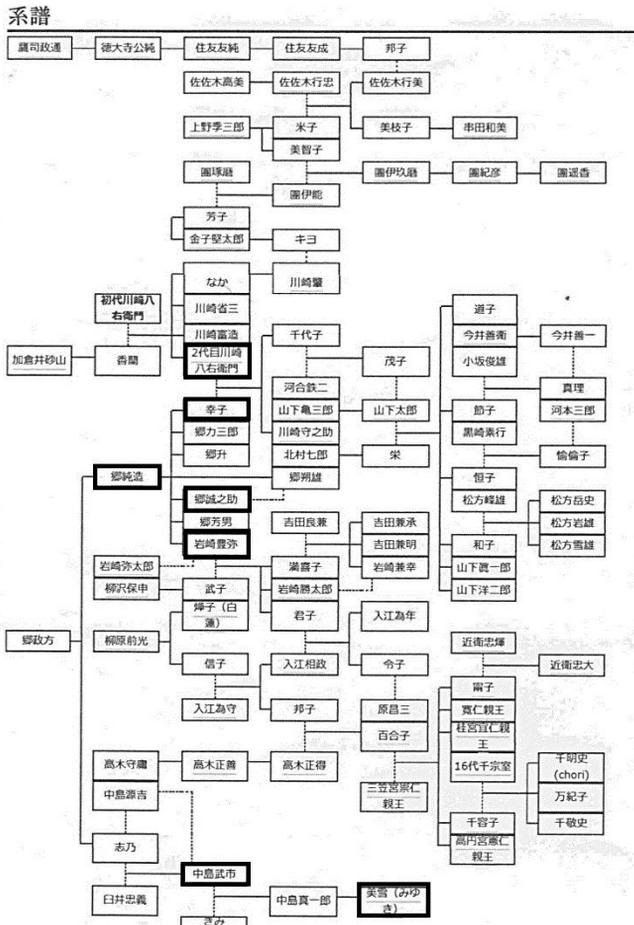
- 1924年（大正13年）
 - 2月11日 - 旭日小綬章^[11]
 - 5月31日 - 勲三等瑞宝章^[12]
- 1929年（昭和4年）3月4日 - 勲二等瑞宝章
- 1940年（昭和15年）8月15日 - 紀元二千六百年祝典記念章^[13]



川崎八右衛門 (2代目)

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

2代目川崎 八右衛門 (かわさきはちえもん、[慶応2年4月5日](#)^[3] (1866年5月19日) - 昭和22年 (1947年)) は、日本の実業家。初代川崎八右衛門、世舞子夫妻の次男^[3]。金三郎^[3]とも名乗った。川崎守之助の父。妻、幸子 (こうこ) は、郷純造の娘。東京川崎財閥第2代目当主



刊本など

日本史籍協會編

大久保利通文書 四

東京大學出版會發行

大久保利通文書 四

日本史籍協會叢書 31

昭和三年五月二十五日 初版
昭和四十三年三月十日 覆刻

第二期頒價 全巻 七二〇〇圓
各巻 三〇〇〇圓

編者 日本史籍協會
代表者 森谷秀亮
東京都三鷹市大連二丁目十五番十六號
發行者 財團法人 東京大學出版會
代表者 堀武重
東京都文京區本郷七丁目三番一丁
TEL 東京五九九九 電話 八二二八八四
印刷 株式会社 平文社
本文用紙 北越製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 株式会社 光尚機器製作所
製本 株式会社 新栄社

九〇三

五三五 岩倉公への書翰 明治三年十月廿五日

(岩倉家文巻)

【接】大隈ト懇談ノ結果ヲ具申シ耶蘇教徒復歸ノコトニ及ヒシモノナリ

拜啓仕候益

御機嫌克被爲遊御坐奉大慶候然ま今日大隈に而會此内を全旨趣及懇談候

處凡る間然もる處無之悉皆同論と申事ニ御坐候尤於大藏省も凡當年中之
出納を計畫之不足も相立只今之儘よてと目的も立兼候付大評議を奉願と
之趣意よて先以省中を大變革し官員も其半を減し手元之變革相調候上ニ
御裁決を乞与言處ニ粗内談も有之折柄よて於政府を地位御改革有之候
得ハ誠ニ好機會とも可申与返る先を被懇候位よて少も異存無御坐候就
ま明日と外同僚に談合可仕候間明後日ハ一同之御評議よ相成候可然奉
存候其外之事も段々厚ク談試候處何事も同意よ出候間必ス此上變改もる
様之事と有之ましく与愚考丈と安心仕候郷權大丞邊之處今此節と斷然免
職の轉勤ニから候候ま大藏省それ丈之憤發證よ立ましく与之事も申候處
其邊ハ如何様共可致郷坂本と轉勤ニあるも可然と申居候位ニ御坐候と不
此度と機會ニ打合セ候与存申候間兼る再三申上候通何卒右府公殿下確乎
不抜之御斷決相居候處吳々奉祈望候貨幣一條ニ付坂行之事も少々相後を
候も宜ク第一外國引合貨幣談判之事結局相付候上からてハ坂行も無益

卷十七 (明治三年十月)

九十一

卷十七 (明治三年十月)

九十二

あるへし与申事ニ希宇和島公御出ニ候ハ、追テ政府ヲ出張ニ希可相濟云々承候仍希是も御せ爰被成候ハ不及与奉存候自ら拜謁巨細可申上候へ共爲御安心大略以寸楮早々如此御坐候恐惶

十月廿五日

利 通

岩 公 閣 下

尙々耶蘇一條も談候處同人ニハ初發よ改心之者ハ復土被仰付候方御至當与相考候付薩之三十人も御返相成候希無子細事ニ候渡邊ニ少々議論有之同僚ニも何とり論も有之候へ共同人見込ハ斷然被差返其末改心之者ハ此通与言御基則相立候得希可然与之事ニ御坐候間薩之事を頻々申立ハ不致候へ共内情も云々有之其爲此節兩人出京致候者も甚致因却候付其通御見込ニ候得ハとうそ申立通相運候様奉願候旨申入委曲心得候与之事ニ御坐候此上以 思食宜舖奉願候也

【解説】政府ノ大改革ヲ斷行スルニハ大藏省ト最モ關係アルヲ

以テ利通ハ大隈參議カ大藏省ニ猶ホ勢力ヲ有シ居ルヲ以テ懇談スルトコロアリタルナリ書中郷ハ純造坂行云々ハ造幣寮ノコトニ付キ岩倉公將サニ大坂ニ出張セントセシヲ以テ大藏卿伊達宗城ノ西行ノミニ止ムヘシトセルナリ又尙々書ノ渡邊ハ大村藩士昇ナリ

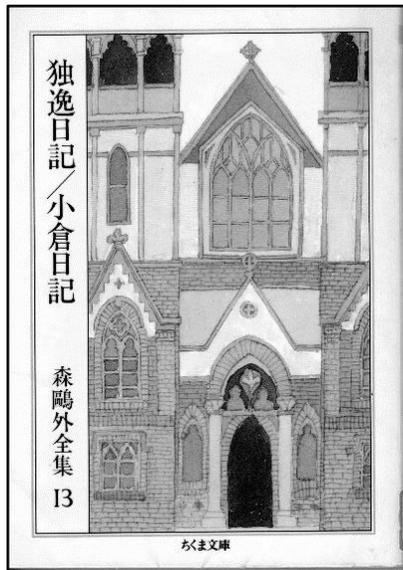
純造は大久保利通に憎まれ重要ポストから外される

郷純造は、明治維新後は新政府に入り大藏官僚として活躍する。特に渋沢栄一や前島密、杉浦愛蔵ら旧幕臣の登用を大隈重信や伊藤博文らに薦めた功績は特筆すべきである。だが、それが原因で幕臣嫌いの久保利通から憎まれていた。(明治三年十月二五日の大久保から岩倉具視あての書簡には郷を「斷然免職か転勤ニならず」と名指しで明記されているほどである。)そのため、大久保が大藏卿に就任して政権の中樞を担った時代には重要ポストから外されて干されることになった。大久保の没後、大隈や伊藤が政権の中樞に立つようになると漸く再評価されて大藏大輔(後に初代大藏次官と改称)を務めたが、実務官僚の地位に留まった背景には大久保政権下の不遇時代が尾を引いたからと言われている。

ドイツ
「独逸日記/小倉日記 森鷗外全集13」

1885年(明治18年)12月24日の日記

1996年 森鷗外著 筑摩書房発行



郷誠之助、ドイツ留学中に森鷗外と交流
森鷗外日記に誠之助の名

P78～P79より転用

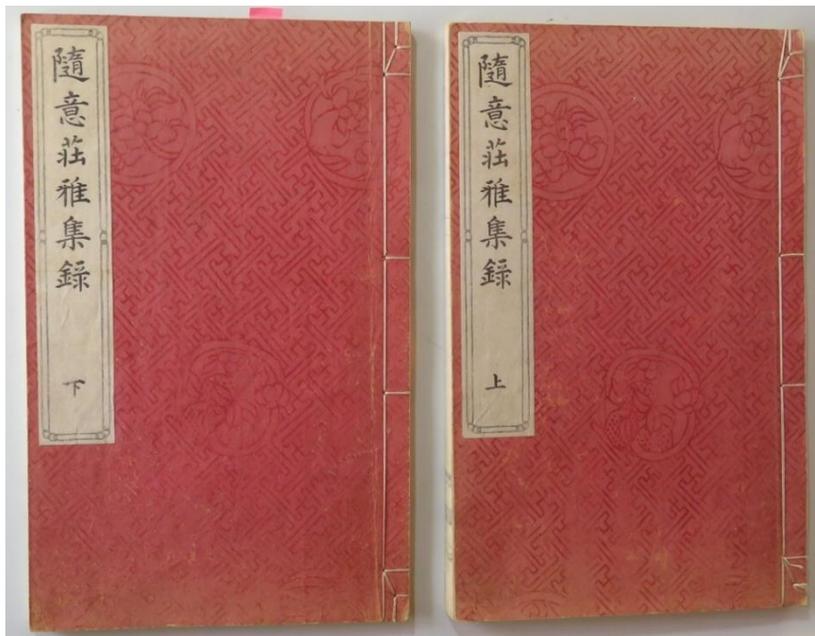
24日。キルケと別る。キルケはその父兄の家に赴けり。先ず匿名してフオオゲルに贈遺し、午後6時自らその扉を叩く。少焉(しばらく)にして扉を開く者あり。嬌声「ドクトル」来ると叫ぶ。即ちリスヘンなり。フオオゲル氏庖厨より出で喜び迎ふ。かつ曰く。今日の贈は人々その何人より来るを知らざりしに、君のかつて愛する所の少年ワルテルWaltherは独り君の筆札を認めたり。ワルテルは方纔(ほうさい)爺嬢(やじょう)の許(もと)に還りぬと。既にして巽軒、津城、ニイデルミュルレル氏、ルチウス氏皆出でて余の約を踐めるを謝す。来責を去るや、隆聖節に至らば再び相見んと云へり。故に此(かく)の如し。ニイデルミュルレル氏の云く。君は何時に此に着し、何処に行李を安頓したまへるか。曰く。昨夕着し、行李は魯国客館に在り。曰く。相見ざること23月。何ぞ吾等を疎んじたまふこと此に至るや。明旦は必ず我家の一室に還りたまへ。昨日以来灑掃(さいそう)して君の来るを待てりと。余同行あるを以て客館に投じたりと謝す。郷誠之助と相見る。誠之助はハルレHalleに在りて経済学を修む。かつて津城とハイデルベルヒに同居したりことある故。この祭日にもまた津城を訪へるなり。快濶の少年にて、好みて撞球戯を為す。己(すで)にして祭日贈遺Bescherungを始む。一室に大卓を置き、貽(おくりもの)をその上に列べ、室の一端には緑樹を建て、飾るに金銀紙、設色糖菓等(せつしよくどうか)を以てし、枝上に許多の燭を燃し、家族を会同して胎を分つ。フリイダ、オットオFrieda、Ottoの二兒並び立ちて降聖詩を誦誦す。贈遺畢(おわる)。晚餐の饗あり。シュワアブ夫人 Schwabもまた在り。トリエストTriestの人。かつて余とシュライデン夫人の家に相識る。

郷誠之助：(1867-1942)。実業家、貴族院議員、日本商工会議所会長などをつとめた。郷は鷗外について、「正力松太郎のような感じのする男だ。井上哲次郎とハイデルベルヒのミュラーという下宿屋に1年ほど一緒に暮らしたが、人をめったに誉めない井上が森を随分誉めていた」(「人間郷誠之助伝」)。

撞球戯：ビリヤード

ずい い そう が しゅうろく
 「随意荘雅集録 上・下」

郷純造編纂 富岡鉄斎・柴田是真・野口小蘋・野口幽谷・森寛齋他画
 1889年(明治22年)郷純造 発刊 郷和彦 蔵



国立国会図書館データベースより

大蔵次官等を務めた郷純造が致仕を記念し、明治22年5月18日に浅草橋場の別業随意荘で催した告老の宴の記録。

上巻は随意荘の絵図や諸家の記文及び書画文房具類の図解。

下巻は諸家より贈られた器物書画の縮図及び諸家の詩集。

国文学研究資料館データベースより

備考(扉等)

- 題簽「随意荘雅集録 *」[* = 上、下]、跋「随意荘雅集録跋」。
- 記載発行元は柱による。
- 明治己丑(22年)夏日梨堂居士(三条実美)題字、明治22年5月郷純造請帖。五三居士純造序、丁亥(明治20年)仲秋錦山矢土勝之「随意荘十二勝小記」、丁亥10月古梅巖谷修題詩。小 = [草冠 + 頻]口絵及び上巻の図、古梅居士巖谷修「随意荘雅集記」。出版年時は序跋による。
- 下巻の口絵7丁は郷純造に献じられたもの。幽谷・貫義・和亭・寛齋・鉄斎・小 = 野口親・是真・正雄・などによる。
- 明治22年5月郷純造跋。
- 表紙縹色(?)に卍崩し?の型押し、題簽表紙白無地飾り枠。

補記

印刷技法：木版 図は濃淡刷り

装丁：袋綴じ四つ目 康熙綴じ

本文は下巻8丁～。海東松方正義・春畝伊藤博文・秦山土方久元・梁川榎本武揚・黄石岡本迪 [及 + 由]・枕山大沼厚・春濤森魯直・敬宇中村正直・成斎重野安繹・甕江川田剛・青山田中光顕・聴雨杉重華・鴨北宮本小一・宜軒西岡 = [愉の扁がしんにょう]・中洲三島毅・梅潭杉浦誠・鳴鶴日下部東作・丹山丁野遠影・秋琴長松幹・金洞金井之恭・無辺渡邊国武・学海依田百川・錦山矢土勝之・即山神波桓・黄村向山栄などの漢文を載せる。

以下抜粹



請帖
 菲才純造際會明時登庸累運承乏大藏次官在朝
 二十餘年會客冬罹疾老衰漸加乃上表乞骸骨
 特旨陞正三位敍勳二等仍賜恩俸顧念平昔之遭
 遇未嘗不日少感激 聖恩隆渥也余之致仕今
 大藏次官及高等官數十人邀余張謙更製金銀馬
 上孟二為贈同曹情誼以出處不渝余之所尤感也
 今也優游林下疾病亦愈茲卜五月十八日無時雨
 將奉邀辱知諸賢於橋場別邸意稿開告老之宴伏
 請移玉惠臨且無論序記詩騷寵貺瓊瑤不啻菟裘

明治乙丑夏日
 梨堂居士題

陸原村

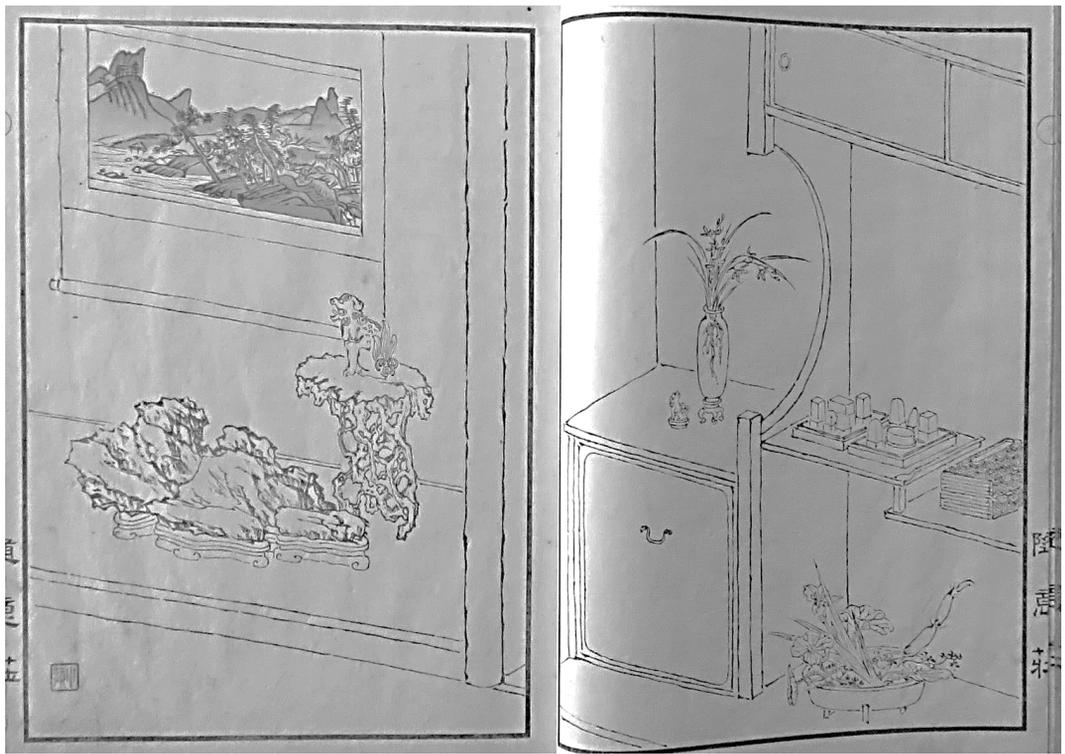
明治乙丑二十二年(1889)夏日
 梨堂りどう 三條実美さねとみの号 第三代総理大臣

隨意莊十二勝小記
 此在墨水西岸為淺草家北之區
 古稱石濱今曰橋場蓋村北耳富
 郊坰之趣大藏次官三位御君游漁
 之暇也君自撰隨意莊記今又命
 十二勝以募名流題詠使主小記
 丁亥中秋 錦山夫士勝之草

新翠如滴涼颼聳三伏欲庭籟則月到
 无此風來水面清波可唵冬雨雪其霏
 乾坤大白鄭驢王舟水陸相逐則四時出
 景亦無不宜余既熙夏之所隨何景不佳
 何時不舒客之來此莊者夫唯適其意也
 所鼻耳百仕之記

五三居士純造識

万菴三葉書



松方正義 四代・六代 內閣總理大臣

隨意莊雅集錄

祝鄉君告老序

海東 松方正義

五三居士鄉純造 纂

余與鄉君相識久矣明治己丑五月十八日君延鉅
 公名士於其隨意莊開告老之宴余亦與焉君夙立
 志少壯出鄉嫻熟吏事最長于經濟維新之初任財
 務之職前後二十年之久勵精如一日明治四年廢
 藩置縣釐革政體國債之事隨起財政處理蓋為最
 難君時為大藏少丞專任其事協贊允當遂能得完

隨意莊

隨意莊

伊藤博文 初代・五代・七代・十代 内閣総理大臣

成其功可謂偉矣及余承乏現職君副余拮据盡瘁
 得財務整理之緒以致今日者君輔翼之功實居多
 焉本冬君以病乞骸骨 天子允其請陞正三位敍
 勳二等蓋異數也抑名境利場人皆所慕而君高蹈
 勇退風流韵事只意所隨可謂行藏兩得者矣酒既
 酣因舉太白屬君并敍平生所竭於國之一二以表
 頌祝之意且捧蘭亭画硯為贈君晚年學並筆力老
 蒼他日一揮見惠幸甚君首肯之耶否

五三居士隨意菴集賦贈

春畝 伊藤博文

漢学者、洋学者、教育者 中村正直

漢詩人 森春濤 しゅんとう

客從履綦集人稱幅中雅先生主齊盟鷗鷺未參社
 或來談風塵非善知我者陽春誰所吟相和未為寡
 裙屐雖聯翩跡寧涉泔門墻堪懸車沙灣好洗馬
 官則所自辭行藏有用捨有似讞宣城匹練斷霞赭
 漁舟杳然歸遠近艣吟啞

鄉君告老宴席上作

敬字 中村正直

墨水擇佳勝槁場隨意莊崇高職曾剝退食意殊長
 勤不遺餘力儉專任大藏富家兼富國呈瑞更呈祥
 欲養兒孫福無如隱逸良上疏乞骸骨優詔被恩光

坡獨樂園詩韵以謝

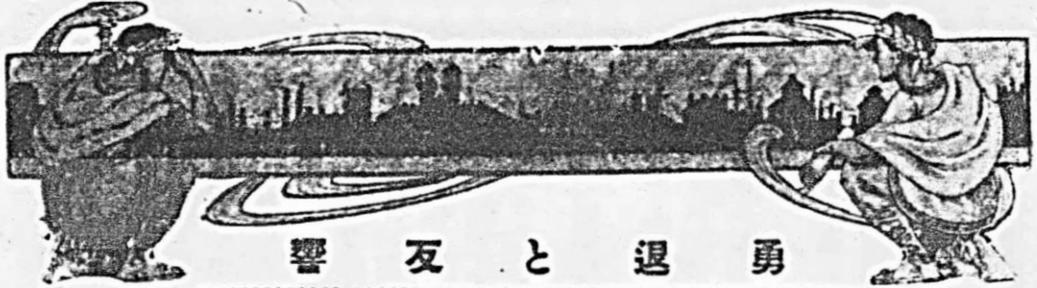
春濤 森 魯直

波山在其上墨水繞其下白鷗之所栖源出毛之野
 可以濯塵纓可以洗瓊瑩花草殊勝春風土最宜夏

参考 漢詩人森春濤は尾張一宮生まれ・妻は女流歌人の森清子(黒野生まれ・旧姓國島)、子に森槐南。郷純造と同郷で晩年交流。

「実業之日本社」明治42年(1909)7月発行
原本「実業の日本.12(14)」国立国会図書館所蔵

(997)



響 友 と 退 勇

澁澤男が初め世に出して當時の大元氣

伯爵 大隈重信

△男を初め世に引出だせ我輩

◎澁澤男爵も今度はよく決断された。

◎決断すると直ぐ我輩の處ろへ遣つて来て、色々

斯く々々だとの話があつ

たから「貴下の英断を祝

す」と言て置いた。

◎そも澁澤君を始め

て世の中に引出した者は

我輩であつた。それで我

輩と澁澤君との關係は特

別である。

△男を余に推

薦せしは郷君

◎當時澁澤君は舊幕臣で、明治政府には出ないと

いつて居つた。我輩が大藏省に入つて人材を求め

て居ると、郷純造君が洋行歸りの澁澤君を推薦し

て來た。

◎郷氏はなか／＼人物を見る眼があつた。氏の薦

めて來た人物は皆よかつた。前島君(密男爵)も其



大隈重信伯爵

一人である。

◎それで郷氏の推薦なら使つて見やうと言つて話
して見ると、澁澤君はなか／＼頑固で容易に出仕
を肯じない。

△余は如斯にして
男を説伏せり

◎今てこそ君は常識圓滿
の大人であるが、當時は
まだ二十歳時代で一見壯
士の如く、元氣當るべか
らざるものがあつた。

◎無論兩刀を帯びて、一

つ間違つたら一本參らうといふ權幕、家に居る時
でも一刀だけは腰より離さないといふ勢で、會ふ
といつても容易に出て來ない。

◎それで説伏するにはなか／＼難しかつたが、我
輩は、八百萬の神が寄合つて新日本を作るのだか
ら、君も一つ神様になつて呉れいといつて遂に承
諾さした。

澁澤男が初めて世に出て、當時の大元氣

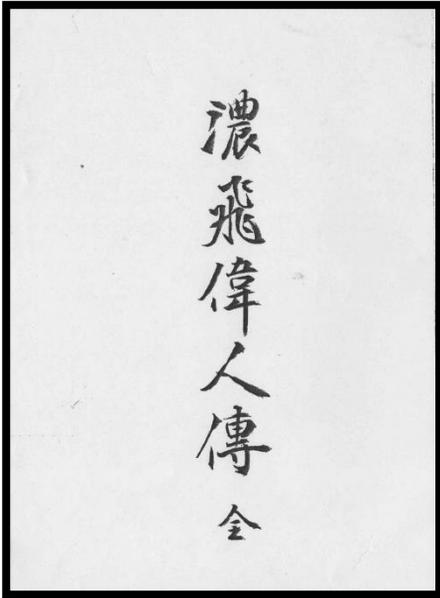
第拾貳卷 第拾四號

(二二)

「濃飛偉人傳 全」

1933年（昭和8年）4月 岐阜県教育会発行

岐阜県図書館蔵



昭和八年三月三十日印刷
昭和八年四月十八日發行
(定價 金參圓)

發行所 岐阜縣教育會
岐阜市美江寺町

印刷者 河田貞次郎
岐阜縣岐阜市七軒町百五十三番戸
西濃印刷株式會社代業者

印刷所 西濃印刷株式會社
岐阜支店
岐阜市七軒町十一番地

發賣所 西濃印刷株式會社岐阜支店
電話 六二番
通稱石七軒二四六〇番

第五篇 現代

六三六

を感謝せざるものあらんや。 本縣調査會

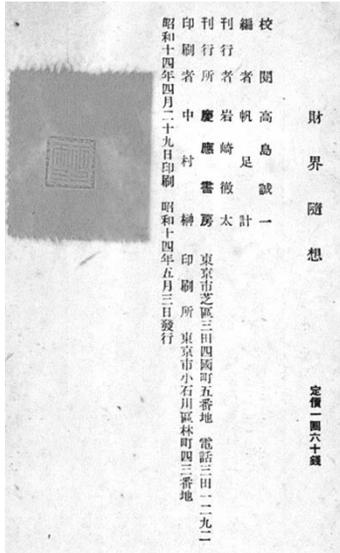
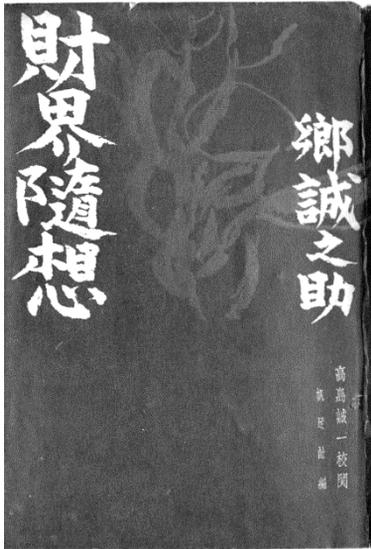
第十六章 文 官

我が岐阜縣より出でて、政府の要路に立ち、或は財政に、或は會計に、或は地方官として、克く獻替の功を奏せるもの郷純造稲葉郡黒野村、神田孝平不破郡、久世喜弘安八郡、安藤就高安八郡、濱弘一大垣市等の諸氏あり。此の他現に官界に雄飛せる偉材尠からず。左に其の事蹟の概要を略叙すべし。

一八六 郷 純 造

男爵郷純造、幼名嘉助字は淑明五三居士と號す。大江廣元の末葉郷市右衛門光成の後にして、歸農して世々稲葉郡黒野村字黒野に住す。父清三郎、四男一女あり。長は金左衛門、次は勝右衛門、季は助十郎、純造は其の三男なり。

純造文政八年四月二十六日を以て生る。幼にして父を喪ひ、兄勝右衛門の家通稱郷に



渋沢翁追悼会に於ける
郷誠之助の式辞筆録
(昭和6年12月11日 日比谷公会堂)

「財界随想 郷誠之助」
1939年(昭和14年)4月

校閲 高島誠一・編者 帆足計
刊行所 慶應書房 全323頁

財界に残した渋沢翁の足跡
130～136頁より転載

財界に残した渋沢翁の足跡

本稿は昭和六年十二月十一日、東京市日比谷公会堂に於いて實業諸團體主催の下に開かれたる
渋沢子爵追悼會席上に於ける郷男爵の式辞筆録である。

閣下並びに諸君。只今主催者に依つて御紹介に相成りましたる五團體が發起致しまして、各位經濟
産業團體を代表せられましたる名士各位の御賛同を得、茲に故渋沢子爵閣下の追悼會を舉行するに當
りまして、甚だ僭越ながら、右五團體を代表致しまして一言御挨拶を申し上げますことは、私の最も
光榮と致す所であります。

一箇月前の今日、即ち十一月十一日は吾々の最も悲しむべき日でありまして、此の日午前一時五十
分子爵は瀕焉として逝かれたのであります。子爵の薨去は我が日本が蒙りたる國家的損失の大なるも
のとして、全國に於ける新聞雑誌は固より、外國に於ける言論諸機關も筆を揃へて哀惜の意を表した

のであります。就中或者は、日本に於ける合本の制、即ち今日の會社組織の制は子爵に依つて創始せ
られ、銀行、取引所、鐵道、海運、製紙、紡績、鑛山、電燈、瓦斯、造船業乃至麥酒、セメント肥料
等、各種新興の事業は固より、養蠶、製絲或は牧畜、綿絲工業に至るまで、苟も我國に於ける産業經
濟に關する百般の事業は、子爵の御指導御幹旋に依つて興らざりしものは殆んど罕であるのでありま
して、子爵の御一代記は我國の産業の發達史なりと論じた者もあります。或者は又、子爵の日米、日
支親善に對する國民的外交の御努力、慈善事業或は教育、社會事業、勞資の協調等に寄與せられたる
所の御功績を思ひ合せますと、子爵の功績は單に産業經濟界に限られずして、九十二歳の御生涯は、
幕末維新を経て明治、大正、昭和に亘る日本の振興史の反面を語るものなりと述べられた者もありま
す。或者は又、子爵が論語と算盤とを合一せられ、即ち經濟道德は離るべからざるものであると云ふ
ことを提唱せられ、躬行實踐、自ら範を垂れ、一世を指導せられたる其の功績を追慕致しまして、活

きたる國寶を失つたと痛恨せられました者もあります。私は此等の繼てのものに對して全く感と同じくする者であります。併しながら未だ何とやら龍を畫いて其の睛を點ぜざる——即ち畫龍點睛を缺くの感を抱いたのであります。然るに畏くも 聖上陛下に於かせられましたは、子爵の御靈前へ優渥なる御沙汰書を賜つたのであります。其の御沙汰書は茲に謹寫して掲げてあります。私は此の御沙汰書を拜誦致すに當りまして、初て子爵の功績の全貌が窺はれると思ふのでありまして、轉た聖慮の畏きに感泣致した次第であります。尙これ以上私が子爵の御行績等に對し彼れ此れ申上げることが、却つて御盛徳を傷ける虞ありと存じまするなれども、此の機會に於て一言私の見る所の一端を申上げることをお許願へまするならば、子爵は空前にして絶後なるお方であると申上げたいのであります。古來英雄は雲の如く起り、我日本は東洋に於ける英雄國なりとの感が致すのであります。而して其の何れもは武力の支持に依るとか、或は官權の背景のあるとか致しまして、それに依つて功を樹て名を揚げたのであります。然るに澁澤子爵は何等是等の支持背景なく、一草莽の臣として空拳彼の大業を樹てられたのであります。子爵は維新の初頭歐洲に漫遊せられて御歸朝になるや、其の翌即ち明治二年、時の大藏卿大隈侯の御推薦もたし難く、時の新政府に仕へられたのであります。而して三等出仕に任せられたのであります。今日御來會の皆様の中には當時の事を御承知の方がおありになると存じますが、三等出仕と申しますると勅任官であります。而して當時薩長土肥、此の薩閥の後援なくして勅任官になると云ふことは殆んど罕の事業であつたのであります。而も當時官尊民卑の最も旺盛なる時代でありまして、此の三等出仕の勅任官たる地位を得られることは容易でなかつたのであります。然るに子爵は一朝其の儀の相容れられざるや、此の容易に得難き光榮ある地位を一弊履の如く棄てられまして民間に下られたのであります。爾來第一銀行をお振出に如何なる文勳武功にも匹敵すべき偉大なる功績を樹てられたのであります。而も子爵は何等名聲を求められることなく、一意國利民福を念とせられ、其の振興に向つて一生を傾倒せられたのであります。何等武力官權の後援なく、而も名利に恬淡なりし子爵の如きは、實に我が有史二千六百年以來、古來の英雄豪傑と其の典型を異にするのでありまして、是れ即ち私が空前のお方であると申上げる所以であります。更に又子爵が産業界に志を立てられました時には、我國の産業經濟は極めて幼稚な時代でありまして、申さば經濟政策の序幕總論とも申すべき時代でありました。子爵は其の總元締として經濟界産業界に於ける部門に對しお世話をなされたのであります。今日は其の各部門が著しく發達を遂げまして、其の部門々々には各代表的の方がおありになるでありませうが、子爵の如き全般を總括して指揮指導せられたる方はないのであります。是は一には子爵の如き不世出なる偉材が容易に現れない故ではありますが、一面には時勢の然らしむる所以であると思ふのであります。従つて今後子爵の如き一代の尊敬と信望を一身に集め得る方に再び現れ得ないと信ずるのでありまして、之が即ち私が子爵の如きは絶後のお方であると申上げる所以であります。澁澤子爵の前に澁澤子爵なく、澁澤子爵の後に澁澤子爵なしと感ずる所以であります。子爵の御臨終は誠に聖者の大往生でありまして、いつもの福徳圓滿なる相貌其儘、安らかに何の御苦痛もなく微笑を湛へつゝ瞑目を遊ばされたのであります。今や子爵と幽明其の境を異に致しまするな

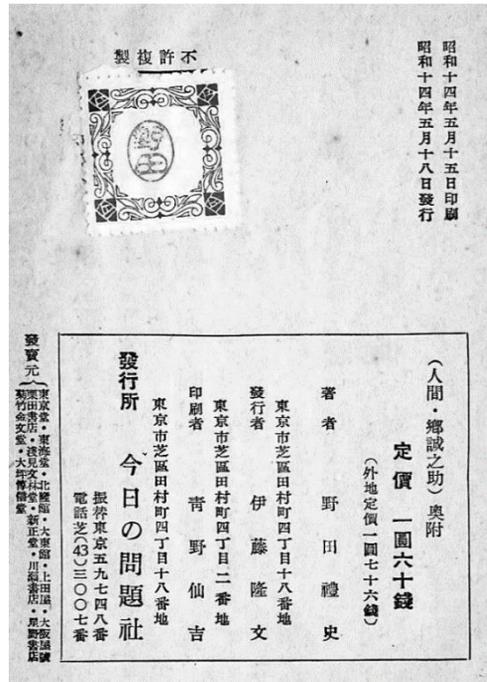
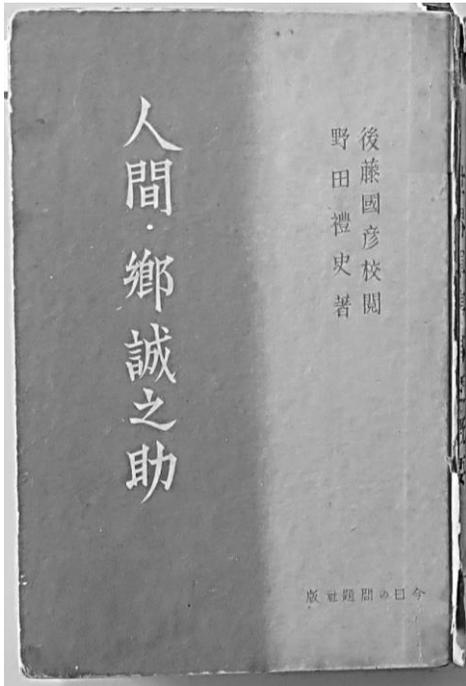
れども、子爵御自身も申遣されて置かれましたる通り、子爵の尊靈は盡未來際不朽不滅で吾々を御指導遊ばされるのであります。吾々は又一國の守護神として仕へることが出来るのであります。

最後に是非皆様に申上げなければならぬ一事があります。それは子爵の薨去三日前、即ち十一月の八日に吾々實業界の後進に向つて遺されたる御遺言であります。私は當時飛鳥山の御屋敷へ御見舞として罷り出ましたのでありますが、後に承りまする所に依りますと、是非郷に會ひたいと仰せられたさうであります。併し行違ひがありまして私はお目に掛かることが出来なかつたのでありますが、若し幸に當日お目に掛かることが出来ましたならば、或は私が直々に此の御遺言を承り得たのかも知れませぬ。幸に御令息の篤二君が御筆記になりましたものがありますから、誤りのないやうに此處で私が朗讀を致します。

「帝國の臣民として又東京市民として永年の間不行届ながら御奉公を致した積りでありますが、尙ほ是れ以上の壽を保ち一層努力を致したいと思つて居りましたけれども、不幸にして病を獲、或は再び起つことが出来ないかと思つて居ります。私の亡い後には刻下財界多事の場合皆様に宜しくお願ひ申上げます。併し私は幽明界を異に致しましても、靈は何時迄も残つて財界の隆盛なること及び皆様の御健康ならんことを祈り、又守護致す積りで居ります。それ故に死んでしまつても、どうか他人行作にして下さらず、濼澤の心は何時迄も生きて皆様と共に働き居るものと思つて頂きたい。其の事を呉々も皆様に申上げるやうに、尙ほお先へ失禮であります、是は私が悪いのではない病氣が悪いんですと申上げてお呉れ。」

後段にあります「それ故死んでも他人行作にして下さらず」とあります。此の行作と申しますのは子爵の御在所の方言ださうでありまして、他人行儀にして呉れるな、私が死んでも佛扱ひにして呉れるな、お前方と一緒に働いて居るのである、斯う云ふ思召に拜承致しました。又お先へ失禮であります、是は私が悪いのではない病氣が悪いんですと斯う申された點を伺ひますと、如何にも死生の間を超越せられた哲人の心境が窺はれるのであります。目下我國の内外時局は頗る重大でありまして、先刻號外に依りますと、幸に國際聯盟の方は大體我が主張が通りまして、茲に一段落を告げたやうではございますが、併しなから之を以て國際政局が安定に至つたとは考へられませぬ。彼れ此れ考へ合はせますると此の難局を打開するが爲めには國民一致協力なる決心、最善なる努力を必要とすると思ふのであります。而してそれが聽て子爵の御遺言に添ひ奉る所以であると信ずるのであります。之を以て御挨拶を終ります。(拍手)

洪沢栄一の遺言「自分の亡い後は郷男によろしくお頼みしたい・・・」
 「人間・郷誠之助」 1939年(昭和14年)5月18日発行
 著者 野田禮史 発行者 今日の問題社
 全376頁



濹澤との最初の接觸

王子製紙に關係してゐる頃、郷と濹澤栄一との接觸が始つた。

王子製紙は今でこそ富士製紙、樺太工業などを併呑し、一億五千萬圓の大會社として獨占的の製紙王國を形成してゐるが、その昔抄紙會社といつた頃は、資本金十五萬圓の小さいものであつた。その後時運に際會して次第に膨脹して來たが、三井系統の經營であるに拘はらず、時に資金難に陥つたり、内部人事の紛紜などがあつて、社業も衰微し、整理の鉈を揮ふ必要に迫られたこともある。

藤原銀次郎がこの王子を引受ける前であつたが、郷は取締役として、この會社に入り、社業の振興のために、各方面と折衝を重ねたことがある。その頃には夙に濹澤が財界の巨頭として、押しも押されぬ地位にあり、苟も實業界に關する事柄は、濹澤の肝煎りによらずして成るものがないといふ状況であつた。

前にも述べた通り、濹澤と郷家との關係は、先考純造を通じて間接な因縁にあつたが、郷が日本運輸などのボロ會社を經營してゐる頃、純造が郷を濹澤に紹介し、『何分宜しく』と頼んだことがある。然るに濹澤は元來公平を旨とした人で、どんな縁故であらうが、頼まれやうが、自分

で認めた者でない限り、情實でどうするといふことをしなかつた。郷が濹澤に會ひに行つた時
も、八時頃に來いといふ約束を二時暇も待たせて置いて漸く會ひ、郷が、

『これまでは随分遺業もしましたが、心を入替へて、これから經濟界で一旗擧げたいと思ひま
す。何分ともお力添を願ひたい』

と懇々頼んだけれども、濹澤は、

『いや、さうですか』

と言つたきり取りつく島もなく、その後も一向な振向いてくれなかつたので、郷は濹澤のお世話
にも、取立てにも與らず、全く獨立獨歩で進んだのである。

だから財界の事に關して、郷と濹澤とが最初に接觸するやうになつたのは、王子製紙の取締役
時代で、同會社の整理に關する用件^{きんけん}の折衝が最初であつた。所が濹澤はこれを動機に郷の手腕を
認め、後に読^よく帝國商業銀行の整理なども、濹澤が、

『郷さんに是非お骨折を願ひたい』

と言つて持つて來た仕事である。

そんな關係で、兩者はそれからは始終會つてをり、一所に仕事もした。濹澤が晩年いよくそ
の生涯を終らうといふ時^{とき}には、枕邊の子息達^{しよきだつ}を顧み、

『自分の亡い後は郷男によろしくお頼みしたい、これが私の遺言である』

と言つて息を引取つたといふことである。これは濹澤の子息の口から直接郷に傳へられた所で
あるから間違ひはない。また事實に於て往年の財界に於ける濹澤の地位は、今日の財界に於ける
郷の地位となつてゐる。

死生を越へた入山探炭の整理

郷は會社の整理を實際にやつてゐるうちに、相當の自信も出來、自分でも『整理引受所』とい
ふやうな氣分で居る所へ、『入山探炭株式會社』が持込まれて來た。明治三十三年のことであ
る。

同會社は日清戦後の企業勃興の機運に乗じ、明治二十九年二月に設立されたもので、福島縣
石城郡下の鐵區に有望な炭坑があり、これを採掘するのが目的であつた。

日清戦後に於ける我國の産業發達は劃期的なもので、明治三十五年現在の我國會社數八千六百
餘のうち、七千二百餘、即ち、その約八割四分が二十八年乃至三十年に設立されたものだとい
ふ。だがこの時期に創立された會社は非常に苦難を嘗めねばならなかつた。それは三十一年の反
動、三十二年の再度の景氣、三十三四年の第二次反動による事業界の整理など、萬丈の波瀾を描

183 郷の歩初財

184 郷の歩初財

いたからである。

入山探炭も、その渦中にあつて業績不振を極め、経営の方法も亦當を得なかつたために、郷が引受けた時は、全く氣息奄々たる状態であつた。

郷が入山探炭に社長として入つて第一に痛感したことは、この会社の経営不振の原因が、何よりも先づ山元の弊風にある。これを刷新するためには、一大英断と改革とが必要であるといふことであつた。それで会社の経営全般について大改革を断行し、特に山元の弊風の一掃に努めた。これがため山元には不穏の空氣が漂ひ、また前社長一派が郷に整理をさして置いて、後に又居直らうといふ魂膽から山元を煽動した形跡もあり、或る時は東京に刺客を送つたといふ噂さへあつた。

負けん氣の強いことにかけては人後に落ちない郷は、そんなことに少しも恐れず、

『やるならやつて見ろ、そんなことに脅かされて堪るものか』

と誰れをも連れず、たゞ一人山元へ行つてブラウくしてゐたこともあつたが、この豪膽に氣を吞まれて、先方では何等の手出しも出来なかつた。

郷が整理に着手してから、いけないくと言はれてゐた業績も持直し、かつ命がけの眞剣な努力が報ひられて、數年後には八分乃至一割の配當が出来るまでになつた。川崎が極力郷に財政的

185 郷の歩初界財

以下割愛

376 論助之誠郷

に現はれた支で座が縮り、芝居が大きくなるのでなければ、座頭とは云はれない。

財界に於ける郷男の存在は、會つての團十郎であり、今日の左團次であり、樂五郎である。芝居の巧さ、拙さを超越した人品と骨格と大きさがある。

これは、學んでも容易に得られないその人に備つた人徳である。この人徳に幾多の條件が加はつて郷男の今日を築き上げてゐるものと思ふ。

そして、財界世話業としての世話振りを見てゆくと、和田さんは胸をたくいて感情的に問題を解決したし、非上さんは力押しにやられたやうであつたが、郷男は理論的に解決するといふ風である。各々特長を持つてゐるが、感情と力で問題を解決したのでは無理が伴ふ、理識で解決したのには無理が残らない。

大體、こらういふ具合に素描してゆくと、郷男の今日あることは決して偶然ではない。私共周囲のものからすれば、この上は、健康第一に、郷男の所謂『華事報國』の成果を結ばれる様に祈念してゐる。

一 人間・郷誠之助 — (終り)

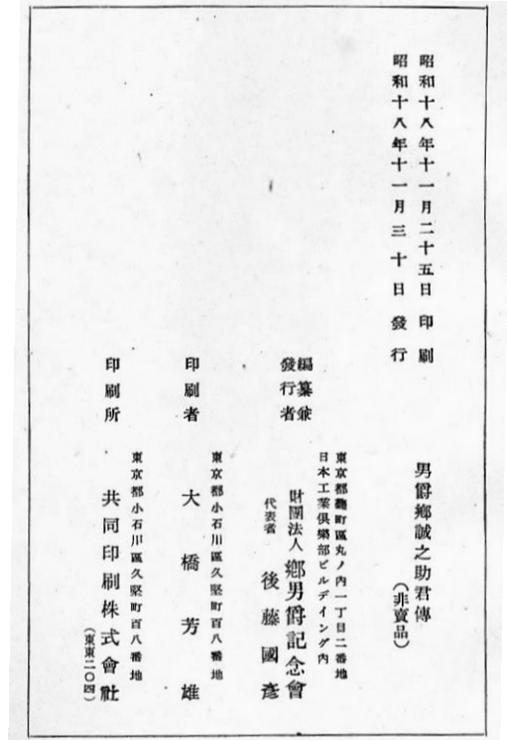
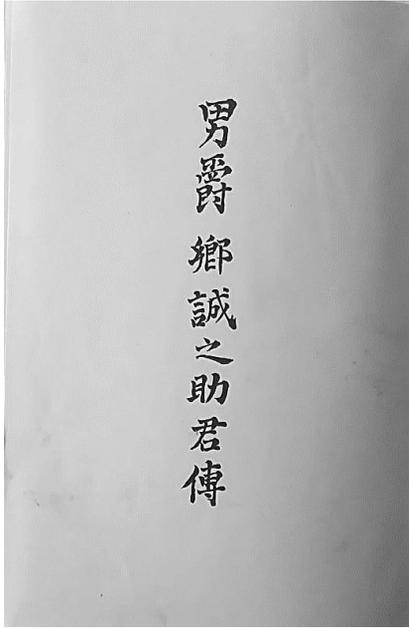
「男爵 郷誠之助君傳」

1943年(昭和18年)11月

財団法人 郷男爵記念会発行

郷和彦 蔵

全840頁



(三)「松方財政」と翁の功績

明治政府に奉仕した翁の事績を詳述する資料の類が比較的少ないのは遺憾

である。大藏省文庫にも松方大藏卿に宛てた翁の手紙二通の外、大藏大丞兼國債頭當時の三井組と英商イ・ビ・ワソン間の米穀取引に関する約定書及び國債局長當時の紙幣銷却に関する伺書等が保存されてゐる位のものである。

松方大藏卿に宛てた手紙二通の文面は次ぎの通りである。

郷純造翁より松方大藏卿に宛てた手紙(寫眞版参照)

▲松方邸訪問後挨拶の手紙

愈々御清適奉欣於候 其後御伺可致心得之處時候當りにて適日來より攝養仕居此程は平常に復候儘今日一寸相伺候處御不在併大藏省に御出勤之趣承り心中大怡仕候 何れ近日猶相伺可申候得共不取敢一書拜呈仕候也

七月五日

郷 純 造

松 方 賢 臺

▲金澤藩藩債に関する手紙

金澤藩ニテ藩債ニ不念ト申分取調候處別紙ノ通ニ御座候 如何共致シ方無之筋ニ御座候 御一覽ニ供シ候也

六月四日

郷 純 造

松方大臣殿

國債局長當時の「紙幣銷却に關する伺書」は、後述する如く、翁の事績を知る上にもことに貴重な資料である。然し、いづれにしても翁の事績に關する資料に乏しい。それについて想起されるのは男爵の次の回想である。

當時の新政府はその要職を悉く薩長土肥で占めて了つて、容易に他からは遣入れなかつたものだ。父は餘程後に三等出仕になつたが、三等出仕から上は勅任官であつた。それから少輔になり、歴代の藏相に任へたが、次官制が出来てからは初代の大藏次官だつた。二代目の次官が渡邊國武だ。當時薩長土肥で天下を取つたが、前に述べたやうに實際の仕事が出来ない。それには大分困つたらしい。アトで大隈に聞いたのだが、大隈は「俺達は何しろ議論ばかりで事務がサツパリ判らぬものだから、君の先代にやつて貰つたのだ」と云つて居た。澁澤や前島密を幕府の方から推薦したのも父がやつたことだ。澁澤は頭もよく腕も達者だつたので間もなく三等出仕になつた。∴松方公の紙幣整理に就ては何んでも横濱の原善三郎や茂木に毎日電報で命じて銀を集めさせたといふことだ。伊藤松方、大隈なんか父の家へよく集つて議論してゐたのは覚えてゐる。伊藤公が憲法取調べに外國へ行く前だつたらう。伊藤は紙幣整理なんか出来ないといふ。父や松方は出来るといふ。伊藤が外國から歸つてくる迄にはきつとやつて見せると云つて頻りに議論してゐたやうだ。

松方公は父の先輩でもあり常に敬愛してゐたが、その人物は所謂後入齋で、ずば抜けて偉い人だとは私は思はなかつた。しかし紙幣整理に就いては初めから説を變へないので餘程やりよかつたと父は云うてゐた。(備考Ⅱ郷誠之助「財界我觀」帆足計編)

これに據ると主として純造翁は、歴代の大藏卿の女房役として財政方針の樹立、政策の遂行に關する技術的、事務的方面に、其の才能と手腕を揮はれたのであつて、翁の事績に關する資料の少ないのは斯うした事情にも由るのであらうと思ふ。(註二) 而して松方大藏卿と純造翁が政策も意氣もピッタリ合致してゐたことは男爵の回想によつても窺はれたが、つて松方財政の成功の背後に翁の竝々ならぬ苦心と貢獻が潜んでゐることは争ひ難い。而かも松方財政の最大の功績と言へば、翁が最も手腕を發揮した不換紙幣の銷却と併せて兌換制度實

者梅三郎子爵から、『父周藏子爵の遺した書類を整理してゐたらこんな手紙が出て来た。これを郷のところに持つて行つたら一晩位御馳走してくれるだらう』といつて渡されたのが即ち伊藤公の添書であつた。それを和田が自分でその謂れ因縁を書いた添状をつけ表装して我輩のところに持つて来たといふわけだ。伊藤公の添書は次のやうなものである。

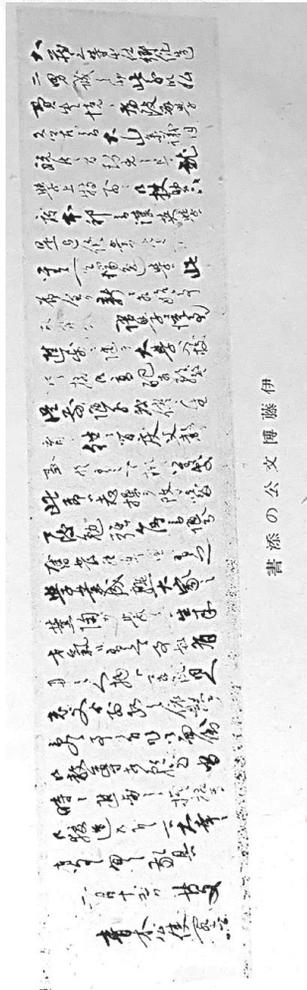
大藏三等出仕郷純造二男誠之助此度私費を以て貴境に留學致させ候筈にて大山參議同航仕り候間到着の上は就學上特別の御扶助下され度本邦にて漢英學は是迄修業仕り候趣に御座候へ共獨逸學は此度全く新に相始候事故當分は語學に従事し進歩に従つて大學へ入校仕り候様御高配相願度候 従前隨分我儘に生育し往々父教に背戾の事の之あり候趣に御座候處此節は志操を改め屹度勉強致す可き心得にて隨分奮發罷在候由に之あり學業成熟大家の薰陶を蒙り候はゞ生來才氣も之あり候事故有用の人物と相成る可く同人老父より別段の依頼を受け候事にて御面倒ながら御教導相願度尙時々進歩の様等御報道被下候はゞ大幸に存じ奉り候 勿々敬具

二月十五日

青木公使閣下

博

文



伊藤博文の添書

伊藤博文公の書状
純造が伊藤博文に誠之助の留學をお世話になりたいと依頼
駐在の青木公使閣下宛て紹介状

「極道」郷誠之助の華麗な人生

小島直記著 毎日新聞社発行

1971年(昭和46年)11月

財界の風雲児言行録！

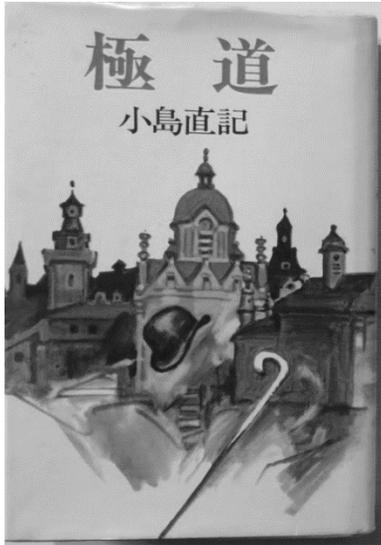
生来の反骨精神から横紙破りの青春放浪をつづけた郷誠之助が、愛する女性の自殺を機にドイツに留学、博士号を得て帰国するや財界で大活躍する波乱に満ちた生涯。

毎日新聞社 ¥850

郷誠之助の華麗な人生

毎日新聞社

注：反社会活動の極道ではありません
「極道」(ごくどう)の奥義を極めた男。



極道

昭和四十六年十一月二十日 第二刷
昭和四十七年四月二十日 第三刷

定価八五〇円

著者 小島直記
編集人 浜田 琉司
発行人 朝居 正彦
印刷所 図書印刷
製本所 大 口 製 本
発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋
大阪市北区堂島上
北九州市小倉区榑屋町
名古屋市中村区須田町

◎小島直記 一九七一

0093-672000-7904

幕末太閤記

一

江戸幕府はなやかりし頃、江戸城に近い麴町一带には直参旗本の屋敷が多かった。

その一つ、上三番町青木ながしの邸宅に郷純造がうつってきたのは、明治元年九月のことであった。「慶応」という年号を「明治」と改め、一世一元の制が定められたちょうどその月である。

翌十月、江戸城は「皇居」となった。

郷純造は、四十三歳。

新政府の会計事務局組頭の地位にあった。二年七月、その役所が大蔵省となると、大蔵少丞となった。そして三年目の五年六月には、四等出仕となっていた。

当時の役人は、一等官から十七等官まであった。

一等官は、太政大臣、左右大臣、参議、大将、卿である。大輔、中将、特命全権公使が二等官であった。

三等官は、少輔、少将、大警視、侍従長、四等官は、大書記官、代理公使、大佐、知事になっている。

中略

「お前たちに今、殿さまだの、御前だのと呼ばれているが、何をかくそう、わしは百姓の出身だ」

「ほうー」

「といつても、いわゆる水呑み百姓というわけではない」

岐阜駅から車に乗ると、北西に向かって約十二キロ、道は低いのぼり坂になる。そこらあたりに、昔、八つの村があった。

「一本道の両側に、バラバラと百姓家のならんだ村」——それが黒野村で、ここには「四姓」といって、一般農家よりも一段位の高い豪農がいた。

河合、大塚、伊藤、郷の四家で、幕府時代は、「長百姓」だった。

村の長は名主だ。これは「村役人」といわれ、法令を村人に伝達したり、税金を割り当て、納入させる責任者である。そして、山林、原野、水流の利用、維持管理から、農業技術、農作物の指導、さらには村民全般の生活について管理、監督する役目をもっている。

その下にあるのが「長百姓」で、「年寄」または「組頭」ともいう。

郷家もその一軒だが、ほかの三家にくらべると、財産、畑が一番少なかった。

そのため、何かといえ見下される。純造は子供心に、涙をのんで無念さをこらえている親の姿を見るのがつらくて仕方がない。

そこで、小さい胸のなかに一つの火が燃えはじめた。

「江戸に出て武家となり、代官となってこの屈辱をそそがねばならぬ」

という野望だ。

「幸いにして身体は強かった。十三歳のとき、肥桶一荷をかついでほめられたことがある。田舎の肥桶は大きくてな、二十歳ぐらいにならねば一荷はかつげぬといわれたものじゃ」

天保十二年、十六歳の三月に江戸に出奔をくわだてた。が、このときは追手につかまって、ひきもどされてしまった。

家の許しを得て江戸に行ったのは弘化元年、十九歳のときだった。このときは剣術も上達し、奥ゆるしを得ていた。

江戸では、大垣城主戸田采女正の用人正木喜左衛門の若党にやとわれた。

「若党とは草履とりのことじゃ」

「すると、殿さまは草履とりをなさったので？」

「さよう」

「へえ。それじゃ、太閤記の木下藤吉郎ではございませぬか」

「そうじゃ。あの太閤秀吉の出世語りでもわかるように、ご主人の草履を自分のふところに入れてあたためるのは普通のことだ。ご主人が玄関におでましになったとき、ふところから草履をとりだして、その足もとにサツとそろえて出す。これがなかなかむずかしい。これができれば一人前の若党とい

うことになっておった」

「一人前におなりになれたわけです？」

「あたり前じゃ。しかし、つくづくと考えた。このままではウダツはあがらぬ。数年間で代官になろうなど、とんでもない夢であった。なにしろ、若党の給金は年に三兩だからな」
純造はしばらく口をとじて、感にたえぬという表情になった。

「……その翌年、旗本松平縫殿頭さまの中小姓になった。若党よりは格は上だ。ご主人が登場のおりは、はかまのもも立ちを高くからげ、裸足に草履をはいて、ご主人の馬の脇についてゆかねばならぬ。厳寒ともなると、ずい分と難渋した。それで給金が年四兩、このほか毎月白米一斗五升とゼニ五百匁をもらう」

タバコ銭という程度のものであったろう。ボーナスというにはほど遠い。

「……その翌年、芝増上寺頭寮定円上人さまにつかわれて寺侍となった。これが年四兩、ほかに余得として六兩あまり、これでは生計が立ちゆかねので、写字、筆耕などの内職をした」

商人たちは、相槌を打つのも忘れて——ではない、打ちようがないので、黙って聞いていた。

「……その翌年、町奉行加役火附盗賊改、牧志摩守さまの中小姓となった。これが年四兩に、若干の余禄があつて、ようやく内職をせずとも生計は立つようになった。が、貯蓄な

ど、おもいもよらぬ」

代官となるためには、幕府直参とならねばならない。その直参となるためには、与力か同心の株をゆずりうけるのが早道だった。ところが、与力の株は金千兩、同心の株は三、四百兩。とてもその資金をつくるあてはなかった。

四

そのとき、耳よりな話を聞かせてくれたのがいた。

「養子になりなさい。それならば、大体十分の一ぐらいで株をゆずりうけることができますよ」

そこで美濃の生家に手紙を書き、終身のわけ前として金二十兩を送ってもらった。これに自分で工面した五兩を加え、これを結納金として、駒込のうなぎ縄手に住んでいた先手同心今村市左衛門という男の養女つねに、婿養子ということになった。

直参になりたい一心で、家のよしあし、娘のよしあしなどを考える余裕はなかった。

「それで大失敗をいたした。その養女なるものの素性がどうも怪しい。だんだんに調べてみると、その同心の妾、同然の女であった。そこで離縁して、改めてもらったのがすなわち今の家内だ」

火事場見廻り寄合席蒔田数馬介の用人内田角右衛門の娘いね。郷家では「しげ」と呼ばれているが、その呼び方の理由

については、純造はいったことがない。

このとき、純造は二十五歳。しげは十三歳。おそるべき早婚のようだが、当時は民法の制約はなかったのである。

引きつづき牧志摩守につかえていたが、そのうち、牧が長崎奉行を命ぜられたので、純造もついていった。

ところが、その年のうちに牧は江戸に呼びもどされ、間もなく死亡したため、純造はまたもや主人を変えた。

めんどうなので、以後つきつきとつかえた主人の役職と名前だけをあげるにとどめる。

小納戸役神田求馬。

目付堀織部正。

堀伊豆守（織部正の父）。

大坂奉行鳥居越前守。

同松平勘太郎。

「大坂に居ること三年、わしは素志をとげんがため、松平家をお暇たまわって江戸にもどった。慶応二年のことだ」

すでに四十一歳となっていた。

郷里を出奔して二十二年、数々の苦勞をなめて得たものは「浪人」の境涯だった。

ただ、爪に火をともしような節儉の暮らしをしたおかげで、幕臣の株を買うだけの金はためていた。

ところが、浪人二年、慶応三年十月になっても幕臣の株の売物がなかった。

「わしはな、この上はもはや、神仏におすがりするほかない

と決心した。そこで千葉の成田山に参籠して三七日の断食を行ない、願いかなわずわがいのちをとりたまえ、と一心不乱に祈願をこめた。するとどうであろう。満願の日、疲れて眠るともなくウトウトしていると、一人の童子があらわれて、願いを聞きとどけてくれる、といった。江戸に帰ってみると、待ちかまえたように撤兵隊の園弥平なるものの株が二百五十両で売りに出ている。さっそく求めて、ようやく念願がかった」

撤兵というのは、毎日訓練をうけ、一日おきに鉄砲を持って江戸城の門番をつとめる役目だ。つまらぬ役のようにだが、ときはすでに幕府倒壊の動揺期。ドサクサのうちに純造はつぎつぎと昇進して、慶応四年五月には工兵差図役頭取、「裏金の陣笠」をかぶって指揮をする地位にのぼったのだ。

この間、さる検校にたのんで、金を運用してもらった。幕府は、盲人に高利貸を許し、とくに手あつい保護を加えていた。純造は、高利貸として増殖したわけだが、それにはあえてふれなかった。

「……それからご一新。わしはいったん禄をはなれたが、新政府の強いご要望によって会計事務局につとめることとなり、そこで求めたのがこの屋敷だ。たとえ五十六円であろうとも、わしはいのちをけずっている」

心地よさそうに笑いはじめたところに、妻のしげが入ってきた。が、その顔を見て純造の表情もサッと変わった。

「あなた、たいへんでございます……」

以下略

ご だい と も あ つ

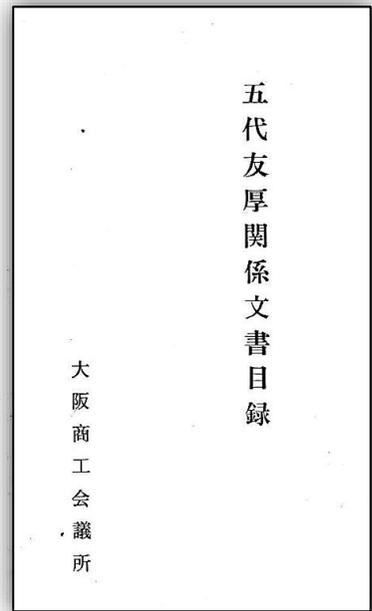
「五代友厚関係文書目録」

1973年(昭和48年)12月

大阪商工会議所発行 岐阜県図書館蔵

江戸時代末期から明治時代中期にかけての日本の武士(薩摩藩士)、実業家。大阪経済会の重鎮の一人。

東の渋沢・西の五代といわれる大御所



五代友厚関係文書目録

昭和48年12月1日 発行

編集発行 大阪商工会議所
大阪市東区内本町橋詰町

印刷/アサヒ印刷株式会社

183

郷純造書翰

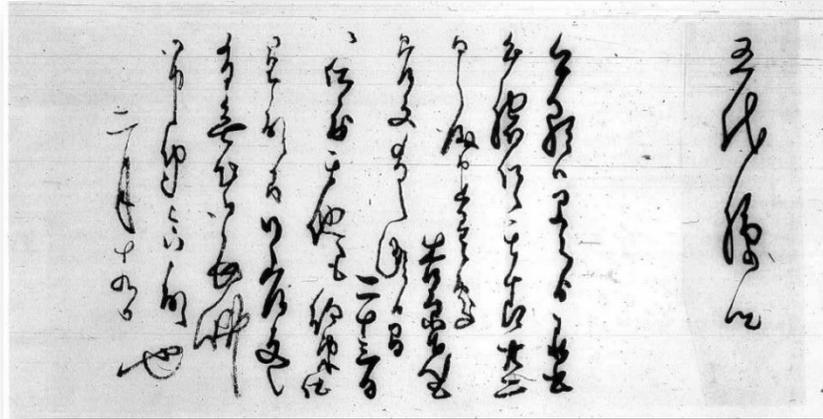
R 9 33	R 9 32	R 9 31	R 9 30	R 1 176	R 2 46	R 9 29	R 9 28	R 9 27	R 1 177	
7	6	5	4	M 43 4	M 54 6	3	2	1	M 43 5	
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	
二月二日	二月二八日	七月十五日	五月一日	五月五日	二月二日	二月九日	二月五日	八月四日	七月二日	
招待の件不都合何れ吉原と相談今日の内申上る	歳末祝儀御届申上る	京都用済一昨日当地着、今日伺いたし	急に付取替依頼のものにて御地売払い凡見込にてよろしく願う	株券売払の件に付御面倒願ひ恐入る、これは近親共分配の分にて金子入用に付売払至	洋銀売払日々相場急報下されたし、三野村方へ日々売払丈の決算は差出す様取計願	明後二四日、申上た刻限に御待ちす、吉原先生の都合もよし	十九日御光臨下されたし、客は吉原、川崎正蔵、岩谷、日下部のつもり	昨日長与先より承に、帰坂以来不快の由折角御手当祈る、御地希有の大洪水一般の困	コレラ病発症嚴重用心、米価騰貴は何故か、又洋銀引下らざるは、糸値段、輸入量の	不調整より、現ドル不足より生ず

目次(部分)

郷純造書翰.....	100	近藤又兵衛書翰.....	
鴻池善右衛門書翰.....	101	西園寺雪江書翰.....	
児島惟謙書翰.....	101	西郷隆盛書翰.....	
児島晴海書翰.....	101	西郷従道書翰.....	
郷純造書翰.....	100	桑原源三書翰.....	
木下武兵衛書翰.....	83	祁答院仲右衛門.....	
木村得太郎書翰.....	85	祁答院信子書翰.....	
肝付直書翰.....	85	神山健石書翰.....	

「五代友厚宛 郷純造書簡」の一部

大阪商工会議所所蔵



五代様江

今朝ハ早々より罷出

恐縮仕候、其節廿二

日之儀申上置候処、吉原先生

差支有之趣候間、二十三日

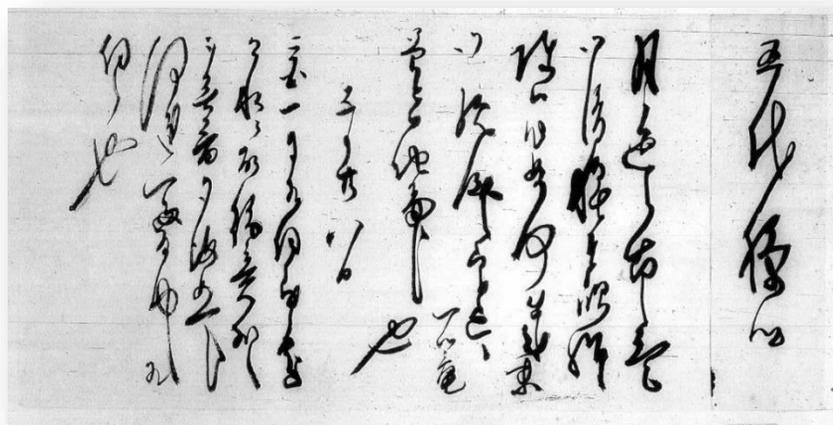
ニ仕度、其他へも約束仕

置度候間、御差支之

有無乍御面倒

御申聞被下度候也

二月十九日



五代様江

月迫之節、益

御清穆奉欣悦候、

陳ハ乍些少歳末

御祝儀之印迄二一筆

呈上、御納嘉可被下候也

十二月廿八日

二白 一寸相同度候処、

公私ニ取紛意外之

御無音、御海如可被下候、

何れ一兩月中か

伺候也

解説 寛 真理子氏

(研究会相談役・犬山城白帝文庫主任学芸員)

「大東京繁昌記 山手篇」 1976年(昭和51年)10月21日

発行 株式会社講談社 山の手麴町 有島生馬記 P58,59より転載



目次

飯倉附近	島崎藤村	西木村莊八
丸の内	高浜虚子 元	
山の手麴町	有島生馬	自画 毛
神保町辺	谷崎精二	西田中咄哉 畫
大学界限	徳田秋声	西木下孝則 画
上野近辺	藤井浩祐	自画 三
小石川	藤森成吉	西中川紀元 画



大東京繁昌記(八山手篇) 〵
 昭和五十一年十月二十八日 第一刷
 著者 島崎藤村ほか
 発行者 野間省一
 発行所 株式会社講談社
 東京都文京区音羽一十二丁目一 郵便番号 一一二
 電話東京〇三〇九四五一一二二(六代番) 振替東京八三三三〇
 印刷所 信毎書籍印刷株式会社
 製本所 藤沢製本株式会社
 落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません
 〇島崎精雄ほか 一九七六年

現東京都千代田区麴町番町 元郷純造・誠之助屋敷

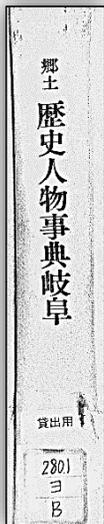


郷純造・誠之助邸

文人町

私の屋敷の隣には兄の住んでいた本家が今空家くわがになっている。この八月まで文芸春秋社の菊池寛君が一年余住んで営業所にしてた。これは二十年ほど前に父が新築した家であるが、それ以前は畑になっていて、茶の木などが植わっていた。その先隣は草茫茫たる空地で、我々がベースボールなどをしてよく遊んだ処だ。その一部は明治とかいった女学校の跡だ。文学界の連中が教えていた学校として、文学史上に記憶さるべき旧跡の一つだ。若い藤村氏とうりん等が教科書を手にして、私の家のこの黒塀の前に佇み繁っていた桜の樹の下で花を見上げたことなどを思っていると中々面白い。当時この家には郷誠之助氏が住すっておられた。氏もまた若かったので殿君の怒りにふれ勘当されていたのだ。その頃この辺は坪二、三十円もしたろう。今では二、三百円になっている。

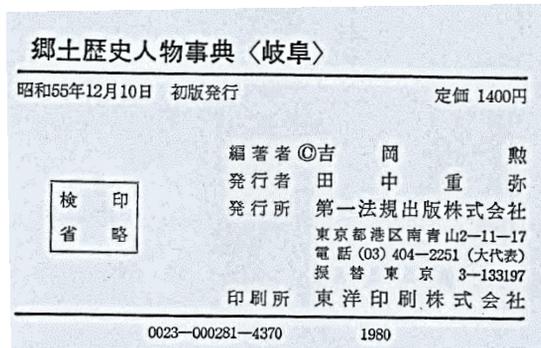
この本家にも旗本三千騎中の一つの長屋門が残っている。この間まで文芸春秋社が、それに小学生全集の恐ろしい色と太さの広告看板を掲げていたが、その時代錯誤が甚だ奇抜な調子だった。往来の人が皆な面白がって見て通った。



「郷土歴史人物事典(岐阜)」

1980年(昭和55年)12月発行

岐阜県図書館蔵



第二部 明治～昭和100頁、
143頁より転載。

郷 純造 (ごうじゅんぞう)

1825～1910。立志伝中の明治政府高官。郷清三郎の三男として方県郡黒野(現、岐阜市黒野)に生まれる。幼名は嘉助、淑明(しゆくめい)と号した。

先祖は鎌倉幕府初代の政所別当大江広元といわれる。幼少に父を失い、飲食店を営んだ次兄勝右衛門の家で育てられたが、不幸にして次兄も病死し、やむなくその経営を引き受けた。店は大変繁昌して多忙であったが、暇をみつけて読書し、夜は隣村御望(現、岐阜市)の郷余齋に漢学を、土地の大野理忠太に剣術を学んだ。天保15年(1844)19才の春、江戸に出て、芝増上寺の仲間(ちゅうげん)となり、清水太郎について学んだ。やがて幕府の外国奉行堀織部正の用人となり、同心株を買い取ってまたたく間に大番格工兵差図役に出世した。

明治維新となるや大蔵省に出仕し、学歴は低いが実力と精励恪勤(かつきん)によって上司の信任を得、書記官から国債局長・主税局長になり、明治19年(1886)には大蔵次官にまで昇進した。同21年勇退。同24年には貴族院議員に勅選され、その後さらに男爵を授けられた。純造は、祖先以来関係の深い正法寺観音堂や黒野多賀神社の社殿を建立したり、黒野小学校には基本財産として多くの土地を寄附して故郷に対する感謝の意を表している。次男誠之助は日本商工会議所や日経連の会長を務めた財界の重鎮である。

郷 誠之助 (ごうせいのすけ)

1865～1942。大正～昭和期の財界の重鎮。方県郡黒野村(現、岐阜市黒野)出身。明治政府の高官で男爵の郷純造の二男として生まれた。幼少時代から風変わりな行動が多く、時には無銭旅行などをして父の勘気を受けたが、明治28年

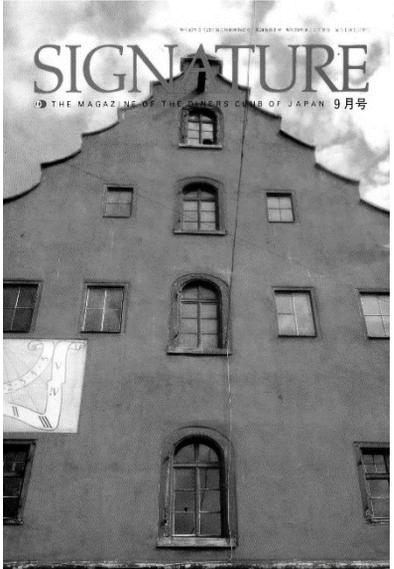
(1895)30才になって心機一転、日本運輸株式会社社長となり、財界への第一歩を踏み出した。

以後の彼の経歴は華々しく、日本メリヤス・日本鉛管・入山採炭・王子製紙・日本酒造火災保険。帝国商業銀行・東京製絨・東洋製鉄などの取締役や社長・会長などを歴任、明治44年には、東京株式取引所理事長、大正6年(1917)には、日本興業倶楽部専務理事、同11年、日本経済連盟会常務理事、昭和5年(1930)には、日本商工会議所会頭、同7年、日本経済連盟会会長になった。一方、昭和初期の不況期には、企業の整理合併に尽力し、「渋沢栄一と並び称せられる財界の世話役的存在となり、帰属院議員にも選ばれた。昭和17年1月19日、彼が病歿するや、著名な財界の後輩が財団法人郷誠之助記念会を設立し、『郷誠之助君傳』を出版するなど、彼の功德を後世に残した。

SIGNATURE (シグネチャー9月号)

P26～29 日本経済のパイオニア⑫
清濁あわせ呑む財界世話役 郷誠之助
板橋守邦 記

昭和59年(1984)9月1日 (株)日本ダイナースクラブ発行



日本経済のパイオニア⑫

清濁あわせ呑む財界世話役

郷誠之助

渋沢栄一や、五代友厚ら武士出身の指導者たちによって、わが国近代経済のエートスは設定されたが、その士魂商才が理念として定着するには、時間が必要だった。放っておけば暴走する企業家を、社会、公共の名の下に歯止めをかける財界世話役の存在は、その過渡期として貴重であった。その代表的な人物が郷誠之助である。ともすれば私利私欲に動

く一匹狼をまとめて行くためには、清濁あわせ呑む度量が何よりも求められる。さまざまな泥水をのみ、酸いも甘いも知り尽くした郷は、まさにうってつけの親分であった。私心なく、おおらかで面倒見がよい。生前「老いた坊ちゃん」といわれた独特の風格は、すさまじい放蕩生活のどん底から蓮の花のように浮かび上がったのであった。

板橋守邦

4 頁分の本文割愛

「黒野史誌」 郷 純造

第十七章 黒野の人物1317頁より
1987年(昭和62年)8月発行

郷 純造

文政八年(一八二五)四月二六日黒野村黒野に郷清三郎の三男として生まれ、幼名は嘉助、字は淑明、次兄勝右衛門に養育された。勝右衛門は飲食店を経営していたので、純造も家業の手伝いをしてきたが、不運にして勝右衛門も病死したので、止むなく純造が代って経営を引き受けたものの、商売人になる気はなく、何とかして文武の道を極めたいと思い、余暇をみては隣村御望の漢学者郷余斎(数馬)について学業を励み、更に下鶴飼の大野理忠太について剣術を修得した。

元来才能に秀でた人物とて、学問も剣武もめきめきと上達し、将来有為の人物として一般から期待されるに至った。そこで意を決して、天保一五年二〇歳の春江戸に赴き、まず伝手を求めて有名な芝増上寺の小使いに住み込んだが、勉学の余裕がないので幕府の外国奉行堀織部正の用人となり、財政経済面を担当し、この間、清水太郎について学ぶ。慶応四年幕府徴兵番台となり、生活も一通りできるようになったので、妻を娶り一家を構えた。

明治維新となるや、大蔵省に出仕する身となり、立身出世の糸口を得たので、精励恪勤を以て上司の信任を得、学歴は浅いが実力に富むため、累進して大蔵大丞、大蔵書記官、明治一〇年国債局長、一七年には大蔵少輔兼主税局長の要職を昇任し、明治一九年一月初代の大蔵次官となり、二一年功成り名遂げて勇退、正三位勲二等に叙せられ、二四年には貴族院議員に勅選され、更に二九年多年の功により特旨を以て華族に列し男爵を授けられ、従二位に陞叙された。

このように純造は栄達したが、生まれ故郷に対する恩義を忘れず、祖先以来関係の深い小野の正法寺観音堂・黒野多賀神社の社殿や堂宇を建立し、黒野村小学校の基本財産として多くの土地を寄付したりして、物心両面より故郷に対する感謝の誠意を尽くしたので、故郷の人々は挙げてこれを誇りとして尊敬した。

純造は又性剛鋭・堅忍、才職あり、最も理財に長ける。安田老山(海津郡高須藩医の出で明治初年の日本画壇の重鎮)につき画を学び、五三と号し、詩歌・書にも秀でた才あり、晩年風流韻を娛し、優遊を事とし、頗る健康、宮中杖を許され、高齢者として金盃も下賜された。明治四三年一月一日八六歳の天寿を以て死去した。特旨を以て正二位勲一等に叙せられた。

純造には八人の子があって、実業界や医学界に夫々大成したが、二男の誠之助が後を嗣ぎ、大正から昭和初期にかけて我国財界の重鎮として日本商工会議所会頭・日本経済連合会々長等の要職にあって、我国の経済界に君臨した。

黒野村の歌

「黒野史誌」第2節 歌と踊り 1. 歌謡 1355、56頁
1987年(昭和62年)8月発行

黒野村の歌

- 一、我が住む里なる黒野村
岐阜を去ること一里半
この地昔は方県の
中心たりしところなり
- 二、東に伊自良南には
板屋の流れゆるやかに
春は桐花紫に
秋は柿の実さらさ染む
- 三、面積およそ八百町
土地よく肥えて農開け
戸数は七百、人口は
三千八百数うなり
- 四、八つの大字その昔
鶉飼に名を得し処にて
西に隣れる小野村と
合わせて九郷と称しける
- 五、黒野の区なる古城址は
加藤左衛門貞泰尉
文禄年間移り来て
築きしところと伝うなり
- 六、いらかも高き西街所
光順・専長・明善と
灯火五重の塔ありて
共にその名を知られたり
- 七、西につづくは下鶉飼
御望の里には満願寺
北にそびゆる御望山は
高さ七百五十尺
- 八、洞の区なる深坂社
古く九郷の鎮めにて
山のふもとの円城寺
於母池清く水澄めり
- 九、東につづくは交人郷
今川越えて古市場
聖武のみかどのその昔
市場開けしところなり
- 一〇、七百余人の学び子が
蛍に雪にいそしみて
朝な夕なに通い来る
学びの庭はここにあり
- 一一、折立区なる超勝寺
法灯長くかがやきて
木立も深き五霊社と
共にその名は高かりき
- 一二、明治維新のその際に
布衣ふいよりおこりし郷男を
幾千代までの鏡とし
奮勵自強国富ませ

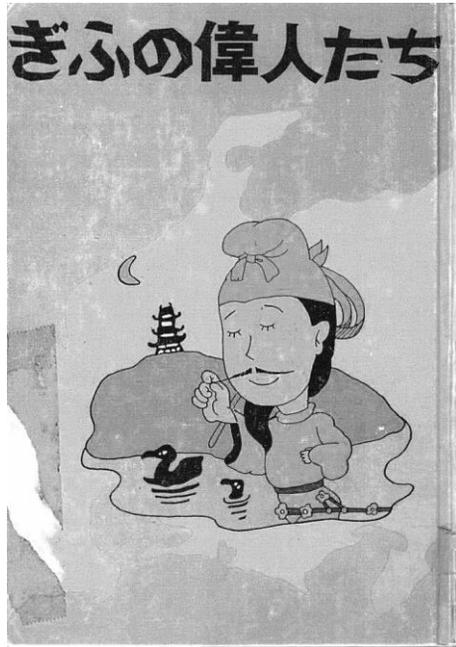
(大正一〇年頃黒野
小高木教頭作詞)

※布衣＝庶民着用の衣類。平服・転じて平民。
※郷男＝郷純造男爵のこと。

「ぎふの偉人たち」

1988年(昭和63年)7月 岐阜新聞発行

岐阜県図書館蔵



『ぎふの偉人たち』編著者一覧 (昭和63年3月31日現在) 五十音順・○印代表者

- 大前 匡昭 (県博物館主任学芸主事)
- 小川 敏雄 (県教育委員会文化課学芸主事)
- 加納 宏幸 (県歴史資料館長)
- 川並 秀賢 (県歴史資料館第二資料課長)
- 後藤 時男 (岐阜市加納小学校校長)
- 清水 進 (県教育委員会文化課主任学芸主事)
- 竹下 修 (県歴史資料館第一資料課長)
- 波多野寿勝 (加茂郡黒川小学校教頭)
- 船戸 政一 (岐阜教育事務所長)
- 松田 淳一 (武儀郡武儀中学校教頭)
- 丸山幸太郎 (本巣郡穂積小学校教頭)
- 渡辺 孝 (県教育委員長)

ぎふの偉人たち

定価 ¥1,800

昭和63年 6月20日 印刷
昭和63年 6月30日 発行 《検印省略》

編・著 ぎふの偉人たち編集部
 発行所 岐 阜 新 聞
 岐 阜 放 送
 〒500 岐阜市今小町9
 電話(0582)64-1151(大代)
 印刷所 興 陽 印 刷 章

誠之助が留学するとき、父純造は大蔵少輔兼主税局長であった。純造はわが子の留学を心配し、伊藤博文に頼んでドイツ公使青木周藏への紹介状を書いてもらった。そのためはじめは青木公使の世話になった。留学中には多くの友人を得、青山、佐藤のほかには井上哲次郎（東京帝大文科大学長）、和田維四郎（農商務省鉱山局長）、斯波淳六郎（内務省宗教局長）、松方巖（十五銀行取締役）、都築馨六（文部次官）、中沢岩太（京都帝大大学長）などとは特に親しく交わった。

心機一転財界へ ドイツから帰国した誠之助は、明治五年、農商務省囑託になったが、二年一月、財界入りを決意し、日本運輸株式会社社長に就任した。そして二年に日本メリヤス株式会社取締役、三年に日本鉛管製造株式会社社長、三年に入山探炭株式会社社長、三五年に王子製紙株式会社取締役となった。いずれも経営不振であったが、再建に努め、業績を立て直すことができた。なかでも入山探炭は業績が不振を極めていたが、経営全般を改革し、数年後には配当金を出せるまでにした。この入山探炭の経営手腕が高く評価され、王子製紙の再建は財界の大御所渋沢栄一から推薦されて引き受けた。誠之助は日露戦争に伴う好況にもめぐまれ、資本金を二〇〇万円から六〇〇万円に増資し、北海道苫小牧に新聞用紙の工場を建設し



ドイツ留学時代の学友（後列向って左より3人目が伊藤誠之助）

伊藤博文 (1841~1909) 明治期の政治家。幼名利助、のち後輔、春敏と号す。明治維新の功勞者。公爵。山口県出身。憲法制定に当たる。首相、樞密院議長、貴族院議長(いずれも初代)に歴任。ハルビンで暗殺された。

一口メモ

て、明治四四年七月に取締役を辞任した。

誠之助はまた、日本醤油醸造株式会社、帝国商業銀行、日本火災保険会社、東京製紙会社、日本活動写真株式会社の経営にも参加したが、財界における地位を確立したのは東京株式取引所理事長になってからである。理事長には明治四四年二月に就任するのであるが、前年二月父純造がなくなり、父の爵位をうけついで男爵となり、四四年七月には貴族院議員となっていた。誠之助は以後大正二三年まで一三年間にわたって理事長の要職にあり、取引所の地位向上に貢献した。

財界の大御所となる 東京株式取引所理事長をやめたあと、誠之助は銀行や会社の整理、合併など財界の世話役として活躍していたが、昭和五年五月、東京商工会議所会頭に就任した。そして、慣例により日本商工会議所会頭も兼務した。会頭は政府や財界に対し威力と威望が必要であるが、その点で誠之助は適任であった。誠之助はまた日本経済連盟会長、全国産業団体連合会長、経済団体連盟会長、日本貿易振興協議会長も勤め、財界の第一線で活躍してきたが、昭和一年一月、両商工会議所会頭、全産連会長などを辞退し、財界から引退しようとした。このとき誠之助は七二歳になっていた。しかし、戦時体制が強まるなかで、新たに内閣参議、大蔵省顧問に任命され、貴族院議員のほかにも多くの公職を兼ね、昭和十七年一月一九日、七七歳でなくなるまで、名実共に財界の大御所として活躍しつづけた。

渋沢栄一 (1840~1931) 明治・大正・昭和期の実業家。青淵と号す。埼玉県出身。初め幕府に仕え、明治維新後大蔵省に出仕。退職後、第一国立銀行を経営し、諸種の産業に関係、財界の大御所として活躍。隠退後は社会事業・教育に尽力。

一口メモ

て、明治四四年七月に取締役を辞任した。

誠之助はまた、日本醤油醸造株式会社、帝国商業銀行、日本火災保険会社、東京製紙会社、日本活動写真株式会社等の経営にも参加したが、財界における地位を確立したのは東京株式取引所理事長になってからである。理事長には明治四四年二月に就任するのであるが、前年一二月父純造がなくなり、父の爵位をうけついで男爵となり、四四年七月には貴族院議員となっていた。誠之助は以後大正一三年まで一三年間にわたって理事長の要職にあり、取引所の地位向上に貢献した。

財界の大御所となる 東京株式取引所理事長をやめたあと、誠之助は銀行や会社の整理、合併など財界の世話役として活躍していたが、昭和五年五月、東京商工会議所会頭に就任した。そして、慣例により日本商工会議所会頭も兼務した。会頭は政府や財界に対し威力と声望が必要であるが、その点で誠之助は適任であった。誠之助はまた日本経済連盟会長、全国産業団体連合会長、経済団体連盟会長、日本貿易振興協議会会長も勤め、財界の第一線で活躍してきたが、昭和一一年一二月、両商工会議所会頭、全産連会長などを辞退し、財界から引退しようとした。このとき誠之助は七二歳になっていた。しかし、戦時体制が強まるなかで、新たに内閣参議、大蔵省顧問に任命され、貴族院議員のほかにも多くの公職を兼ね、昭和一七年一月一九日、七七歳でなくなるまで、名実共に財界の大御所として活躍しつづけた。

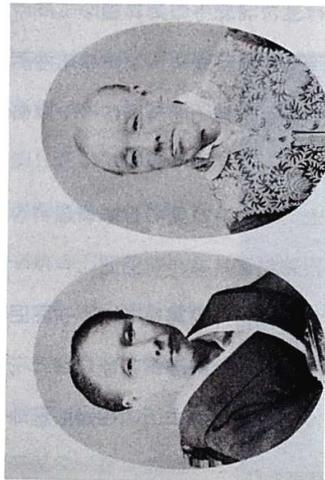
渋沢栄一（1840～1931） 明治・大正・昭和期の実業家。青淵と号す。埼玉県出身。初め幕府に仕え、明治維新後大蔵省に出仕。退職後、第一国立銀行を経営し、諸種の産業に関係、財界の大御所として活躍。隠退後は社会事業・教育に尽力。

一口メモ

郷 純造（一八二五～一九一〇）

郷家は太谷吉盛に仕えた郷市右衛門光成を祖先とし、関ヶ原の戦に敗れてから帰農したと伝えている。純造は農業を営んでいた父漣二郎・母かねの三男として文政八年に生まれた。弘化元年、二〇歳のとき江戸へ上り大垣藩主戸田采女正の用人正木喜左衛門の若党となった。ついで旗本松平縫殿頭や牧志摩守の中小姓、神田求馬や堀織部正の給人を勤め、文久二年、大坂町奉行鳥居越前守の家老となる。慶応二年江戸に出て翌三年一〇月、御家人株を手し念願の幕臣となった。そして同四年六月には工兵差図役頭取まで昇進したが、同年八月五日、明治政府の会計

局組頭となる。以後、明治二年大蔵少丞、七年大蔵大丞、一〇年大蔵大書記官、一五年大蔵省三等出仕、一七年大蔵少輔兼主税局長となり、一九年に初代大蔵次官となった。このように純造は維新後の重大な時期に一貫してわが



郷 純造 夫 妻

国の財政を担当し、蔵相をたすけて活躍した。二二年一月に退官したが、二四年四月、貴族院議員に勅選され、三三年五月、特に勲功により華族に列せられ男爵を授けられた。四三年二月二日に死去した。八五歳。

大坂町奉行

江戸幕府の職名。老中の支配に属する。奉行所は東西に別れ、定員は一人一か月交代で月番と非番に別れた。元和五年（一六一九）久貝正俊、島田直時をはじめて補した。旗本で持高一〇〇石以上三〇〇石以下の者から選任された。属僚として与力三〇騎、同心五〇人がいた。大坂に居住し、一般の民政のほか、地方・川方・寺社方に

関する件、回米・消防・警察に関する件を取扱い、江戸中期以降は摂津・河内・和泉・播磨の幕府領の租税徴収および公事裁判を掌った。

松方正義（一八三五〜一九二四）

明治時代の政治家。天保六年薩摩藩士松方正恭の四男として生まれた。幼名金次郎、のち左衛門。島津久光の小姓となり、その間、御側役大久保一藏（利通）の指導を得る。文久二年久光に従い、京・大坂との間を往来し、公武合体運動、討幕運動にも関係する。

明治元年、大久保利通の推挙により日田県（大分県）知事となる。その後、三年民部大丞、四年大蔵権大丞より租税権頭、租税頭、八年大蔵省三等出仕

を兼任、大蔵大輔、九年勸業局長兼務一四年大蔵卿となり、紙幣整理、官業払下げなどにより、西南戦争後の財政窮乏を克服する。一八年には官制改革により蔵相、二四年に首相兼蔵相となり、金本位制の確立など国家財政の整備に尽力した。大正二一年公爵。その後も興津（静岡県清水市）に住み、元老として政局に関与した。赤十字社長、内大臣も勤める。死去したとき国葬が行われた。

青山胤通（一八五九〜一九一七）

日本内科学医学界の大御所。安政六年、苗木藩士青山景通の三男として生まれた。幼名捨松。兄直通は苗木藩の廃仏毀釈を断行し、のちに大野・池田郡長

となる。胤通は上京して大学南校で医学を学び、卒業後ベルツ教授の下で内科助手となる。ついでドイツに留学してベルリン大学で学び、明治二〇年に帰国すると東京帝大医学部教授、二四年医学博士、三〇年附属病院長となり、青山内科主任を兼任した。三四年には医科大学長となり、医学界の中心的存在として多くの後進を導いた。また、医学教育の改善に努力し、癌研究会をおこして会長となる。三九年帝国学士院会員。四五年には明治天皇御臨幸まで診療を行う。多年の功績により華族に列し男爵を授けられた。

佐藤三吉（一八五七〜一九四三）

日本外科医学界の大御所。安政四年、

大垣藩士佐藤只五郎の三男として生まれた。藩校で野村藤蔭の教えを受け、藩の實進生として大学南校に入学、のちに東校へ転校して医学への第一歩を踏み出した。明治一五年に卒業すると、外科教室スクリバ教授の助手となり、翌年ドイツに留学しベルリン大学で学んだ。二〇年に帰国すると帝国大学外科教授となり、二四年、青山胤通と

ともに日本最初の医学博士となった。こうして佐藤外科の名声



佐藤三吉の書

は青山内科とならび称されるようになり、二六年医科大学附属第二医院の外科主任、三四年東京帝国大学附属病院長、大正二年東京帝国大学医科大学長に任命され、わが国外科医界の最高峰に立った。同一〇年定年退官し名誉教授、翌年貴族院議員に勅選された。昭和一八年六月、八六歳で没した。三吉の夫人は岐阜県知事小崎利準の長女滋子である。

貴族院

明治憲法の下で衆議院とともに帝国議院を構成した立法機関で、明治二三年に創設される。上院の一種である。

貴族院を組織した議員には、皇族議員、華族議員、勅任議員（いわゆる勅選議

員・帝国学士院議員・多額納税者議員）の三種があつた。このうち華族は明治二年に皇族の下、士族の上に置かれた族称。旧公卿・大名のほか、明治一七年の華族令により維新の功臣にも適用され、公・侯・伯・子・男の爵位を授けられた。昭和二年、新憲法の施行により廃止。

渋沢を継ぐ人

昭和一七年一月、誠之助が没すると全国の新新聞は誠之助の功績を讃え、哀悼の意をあらわした。読売新聞の記事は次の通りである。

郷誠之助男

名実共に財界の大御所

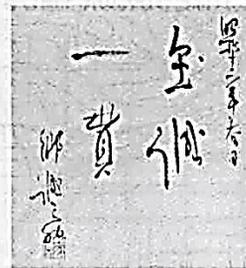
財界の巨人・貴族院議員男爵郷誠之

「ふるさと黒野」 岐阜市立黒野小学校 1996年(平成8年)3月発行

【資料】「きょう土にかがやく先人」21人の中の一人

郷 誠之助 (ごう せいのおすけ) 1865～1942

岐阜県は、県のたんじょう120年をきねんして、平成3年11月に「きょうどにかがやく先人」21人を多くの人に知らせることをしました。21人をえらぶにあたっては、明治4年11月22日すぎからかつやくされ、すぐれたしごとをされ、岐阜県にかんけいがふかく、また、なくなられてから、10年いじょうすぎていることとしました。そして、きょう土はってんのもとになられた方々を21せいきにつたえるといういみから、21人としたということです。(県立のとしょかんに21人の人々のことをまとめたへやがあります。「じんぶつしょうかいし」をもとにまとめました。)



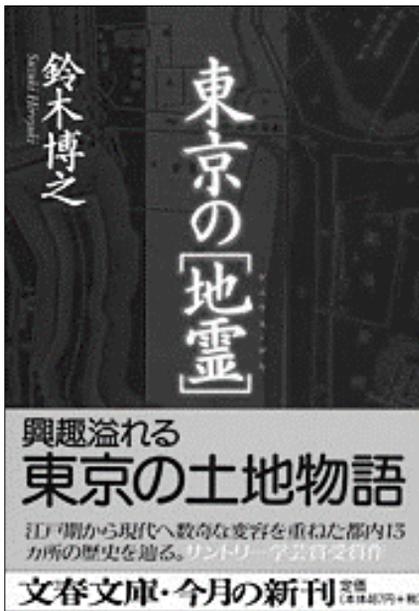
郷誠之助は、1865年に黒野村に生まれました。1866年、家ぞくは江戸(えど・いまの東京)にうつりましたが、郷家と黒野村とのつながりはつよく、そのあとも父純造(じゅんぞう)は黒野小学校に多くのきふをしています。

子供のころの誠之助は、まけずぎらいでした。大学をそつぎょうし、ドイツでべんきょうしました。

ドイツからかえると、会社に入ることをきめ、1895年まだ31さいのわかさでものをはこぶ会社の社長をひきうけました。それまで7年間に社長が8人もかわる、ひどい会社でしたが、誠之助はしっかりした自分の考えで、しごとのむだをなくし、のうりつがあがるようにして、みごとに会社をたてなおしました。

つづいて、日本メリヤス・日本鉛管・入山採炭・王子製紙などの会社をつぎつぎたてなおしました。1911年には東京株式取引所理事長になりました。その後いくつかの会社のたてなおしなどをしました。1930年には東京商工会議所・日本商工会議所会頭、1931年には全国産業団体連合会長、1932年には、日本経済連盟会長などになりました。

- ※ 株式取引所理事長 (かぶしきとりひきしよりじちよう)
 - 株式の売買をするところの長 (現在は証券取引所)
- ※ 商工会議所会頭 (しょうこうかいぎしよかいとう)
 - 商工業者で作られる会の長
- ※ 産業団体 (さんぎょうだんたい)
 - 工業や商業などのあつまり
- ※ 経済連盟 (けいざいれんめい)
 - 会社の長などのそしきたい



「東京の地霊」(文藝春秋)より

明治以降、東京で最も成功した 土地の強者・郷父子

「東京の[地霊]」

1998年3月 文芸春秋発行

鈴木博之著

江戸から現代へと個性的な変容をとげた都内13カ所の歴史を、土地の運命を左右する「地霊」概念を使って読み解いた「東京土地物語」。

以下に郷父子関係の一部を引用する。

現代の「五秀六艶楼」のあるじ

最も成功した土地の強者・郷誠之助父子

『郷純造は文政8年（1825年）4月25日に岐阜の農家に生まれ、苦勞して江戸に出て、幕府の御作事方勘定役というところまでなり、明治の新政府にも仕えて、会計局組頭から、最後は大蔵次官となって明治21年に退官している。かれは節約に節約を重ねて金をため、維新のときに諸所に土地を買った。これが財をなすもととなったのである。息子の誠之助は、こう回想している。

「当時は駿河台でさえ坪1円といふ時代であつたが、何しろ安かつた。父は此所（自邸）ばかりでなく山本達雄男爵の屋敷だとか、三田の四国町だとか、神田の二崎町だとか、浜松の一带など、各所に土地を買って土地価格の自然増加で大分儲けた（『男爵郷誠之助君伝』27頁）

明治期の政府高官達は、土地を入手するものがすこぶる多かつた。大名邸から町人の手へ、そこから政府用地に、そして政府高官の手に入り、のちに一部が企業の土地になる。郷誠之助の方は郷純造から相続した三田四国町の土地を日本電気などに譲渡している。

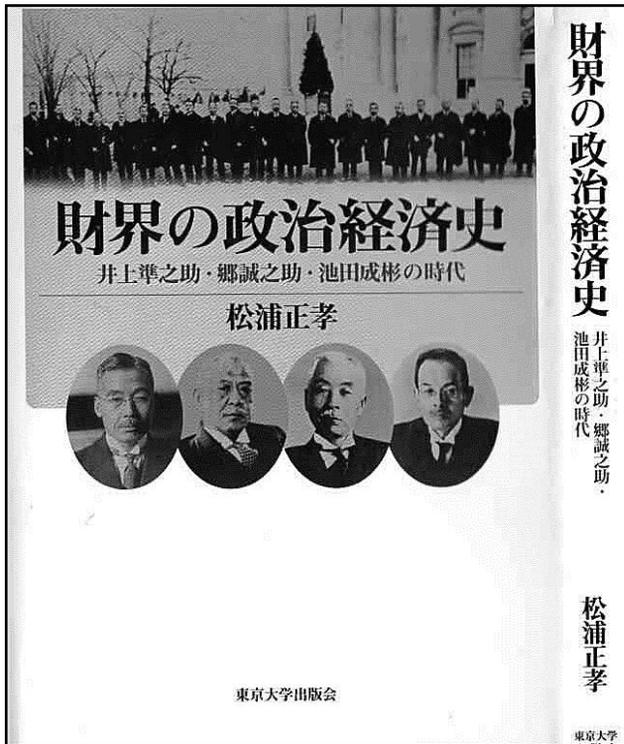
純造が明治元年9月に土地買い入れた初めの場所が麴町二番町の屋敷で、旧旗本の青木某の屋敷900坪を56円で買ったという。いくらなんでも安い買物だったと、後になって書家の巖谷一六にたのんで、56円の屋敷だから「五十六円楼」と書いてもらおうとした。巖谷はそれを少しシャレて「五秀六艶楼」として額に入れたという。

明治以降の東京の土地物語のなかで、もっとも成功した土地の強者の住まいとして、「五秀六艶楼」という名は記憶されるべきであろう。今、かつての三田四国町に建つ高層ビルの姿をみると、ふと、ああこれが「五秀六艶楼」なのかと、奇妙な感慨に打たれてしまったりするのだ。』



明治2年の麴町二番町付近。左側黒枠「出納司コウ」が郷の「五秀六艶楼」
「東京の[地霊]」(文藝春秋)より

「財界の政治経済史」 松浦政孝著 2002年 東京大学出版会



財界の政治経済史
—井上準之助・郷誠之助・池田成彬の時代—

2002年10月12日 初版

[検印廃止]

著者 まつうらまさたか
松浦正孝

発行所 財団法人 東京大学出版会

代表者 五味文彦

113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東大構内
電話 03-3811-8814 Fax 03-3812-6958
振替 00160-6-59964

印刷所 株式会社理想社

製本所 矢嶋製本株式会社

©2002 Masataka Matsuura
ISBN 4-13-036211-9 Printed in Japan

Ⓡ 〈日本複写権センター委託出版物〉

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

第二章 「財界世話業」の群像

第一節 経済システム創業者としての渋沢

本章では、財界が「財界世話業」のネットワークとして形成されていく過程について説明する。「財界世話業」を論ずる際に、まず一番最初に挙げなければならないのは、日本の資本主義ないし経済システムの組織者としての渋沢栄一である。彼は、財政金融制度を始めとする日本の経済システムの創出に関与する一方、五〇〇余の会社・銀行の設立に参加してその出資・経営に関わった。一八四〇（天保一）年武州榛沢郡血洗島の豪農の家に生まれ、その後一橋家に採用されて幕臣となった渋沢は、明治維新後、旧幕臣で当時大蔵少丞兼民部少丞であった郷純造の推薦で大蔵官僚となった。渋沢を推薦した郷は、岐阜の豪農の家に生まれ、その後武家の中間奉公を転々として旗本株を買い、幕臣となり、会計実務の能力を買われて明治新政府に召し出された中堅官僚で、後に初代の大蔵次官となった人物である。郷は民部・大蔵省内の事務機構整備を進めるとともに、渋沢栄一・前島密・杉浦謙ら、欧米の制度についての専門的知識と実務能力とを備えた旧幕臣を探し出し、彼らを大隈重信民部大輔兼大蔵大輔に推薦して近代化政策を進める閣内官僚の中核に据えた⁽²⁾。その後渋沢は参議に昇格した大隈の後を襲った井上馨大蔵大輔の知己を得て、終生その庇護を受けるようになり、井上とともに新たな貨幣・金融・財政制度を確立した。そして一八七三（明治六）年井

義が田中政友会内閣による政党関係の情実融資を抑制したことが、政友会からの井上に対する圧迫や辞任要求となり、それが井上辞任の一因となったことが推測できる。井上は、元来金解禁論者であった。しかし彼は、田中内閣末期には、郷誠之助や田塚鷹とともに日本経済連盟会を代表して、金解禁は準備不足であるから時期尚早だと三土蔵相に申し入れた。しかしそれにも関わらず、その直後には、田中内閣倒壊とともに浜口内閣に入閣し民政党に入党して蔵相として金解禁を断行した。こうした一連の井上の豹変ぶりは従来謎とされてきたが、以上のことを考え合わせると、政友会の政党情実による放漫経済の下では金解禁の準備は行い得ないが、民政党内閣であれば緊縮と金解禁準備が実現できる、と井上と考えたために、金解禁に対する態度を何度も変えたのでであると説明することができよう。

井上の「財界世話業」としての立場は、当初は日銀総裁としての救済融資の実行者としての「金融資本型世話業」であったが、民間時代には「専門世話業」としてのそれへと変わり、そして再度の日銀総裁時代には銀行・金融システムないし秩序の安定を優先する立場をさらに強めるなど、微妙に変化していった。さらにその後、井上は浜口内閣入閣とともに民政党に入党したことで、財界や経済界とは距離を置くようになり、また性格も本来持ち合わせていた自負心の強さが表面に出てきて、彼は財界人ではなく政党政治家となった。

なお、井上が「財界世話業」となった際の資源としては、井上の世話好きな性格や、金融資本や財界の組織化への関心もあったが、最大の資源は、大恐慌期にたまたま日銀総裁であった時の日銀の救済融資にあった。日銀総裁としての国家金融資本を基盤としたという意味で、井上は、和田や郷らの「財界世話業」とは多少異なっている。

さて、洪沢が引退し、和田が逝き、井上が政界へと去った後に、「財界世話業」を中心に背負うことになったのは、一八六五（元治二）年生まれの郷誠之助である。郷が「財界世話業」として世間の注目を浴びるようになったのは一九二七（昭和二）年頃からであるが、「財界世話業」としての活動はそれ以前から始めていた。郷の場合、父親が松方正義の側近で貨幣制度を始めとする財政金融制度の創設に力をふるい、初代大蔵事務次官となった郷純造であ

ったことが、おそらくその出発点となった。松方や伊藤博文、陸奥宗光といった政府要人や、純造が起用した洪沢らの経済界要人との関係、あるいは誠之助の第二人が養子に行った三菱財閥や川崎財閥（さらに株が川崎八右衛門に終している）との関係は、後に郷の重要な権力資源となった。郷誠之助は少、青年時代に放蕩と無法の限りを尽くしたうえでドイツに留学し、七年間で哲学博士を得て帰国した。欧州に比べて遅れている日本の経済に衝撃を受け、その整備を志した郷は、伊藤の紹介で農商務省嘱託となり、さらに川崎八右衛門（先代）らの斡旋により川崎系で経営不振に陥っていた日本運輸という会社の社長となった。この再建に成功した郷は日本メリヤスを整理し日本鉛管を再建し、さらに入山探炭の整理に成功したことで名をあげ、その結果郷はかつて父純造が登用した洪沢に評価されるようになった。そしてその推薦で今度は王子製紙の整理を行い、これにも大きな成功を収めたのである。

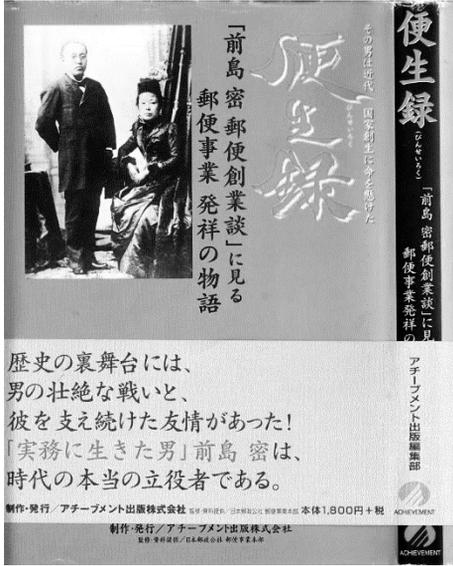
郷が経済界で影響力を持ち始めるきっかけとなったのは、一九一（明治四四）年に日本醬油の整理で苦勞をともにした北陸銀行頭取岩下清周らの推挙で、東京株式取引所（東株。現在の東京証券取引所）理事長に就任し、一四（大正二）年までこれを務めたことである。この間、第一次世界大戦によって日本は空前の好景気を迎え、東株の資本も四倍に増大し、郷らの努力もあって、それまで「賭博場」視されていた東株の地位は大いに上昇した。ところが一八年一二月大戦の終りが伝わると株価は大暴落し、ついに株式市場は立会不能の事態に直面した。市場建て直しのためには一五〇〇万円の救済資金が必要であったが、当時まだ大銀行が兜町との付き合いを嫌って資金調達は絶望的であった。このため、郷理事長がその政治手腕によって日銀総裁からの協力を取り付け、興銀等の資金融通を受けることで市場破綻を防いだのである。

しかしその後、一九二〇年の反動恐慌に際しても三月以降株式は三度の暴落をみ、第一次・第二次暴落に際しては日銀からの救済資金融通の諒解等によって何とか持ち直したが、四月一四日から第三次暴落ではついに一カ月間の市場休止を余儀なくされた。このため、郷理事長の下に河合良成理事（一九年一二月から郷退任まで在任）が共同証

「便生録・前島密 郵便創業談」

前島密を推挙した郷純造の記事

発行 2003年(平成15年)4月 アチーブメント出版株式会社



第2章 萌芽(近代郵便事業の誕生)

(二)

「九等出仕で、かなりがっかりしたのではないかね」

明治三年正月五日に民部大蔵省に出頭すると、門の前で渋沢栄一が、にこにこしながら白い歯を見せて笑いかけてきた。緊張した面持ちが解けていくような、屈託のない笑顔であった。その言葉が密の心情をそのままに、あまりにも素直に言い当てたので

「いやあ……」

と、頭に手を置いてはにかむしかなかった。

「九等」というのは今の本省で言えば係長程度の位である。いくら地方とは言え駿河

藩遠州中泉奉行まで務めた密には合点のいかぬ人事であった。しかし

(それも些細なこと)

と割り切って入省の命を拝受したのである。

「私も郷純造小丞ごうじゆんぞうに呼び出されてね。いや、改正掛かいていかけは私が頼んで作ってもらったものだ。いろんなことをやるからきつと面白いだろう。一応私が君のすぐ上になるが、今は上も下もない。お互い切磋琢磨せつたくさくでいい国をつくっていいこうじやないか」

便生録(ひんせいりく)

「前島密郵便創業談」に見る郵便事業発祥の物語

監修 二〇〇三(平成一五)年四月二〇日 第一刷発行

資料提供 日本郵政公社 郵便事業本部

企画 松尾 秀二郎

印刷 伊藤 誠次郎

発行人 青木 敏

発行 アチーブメント出版株式会社

〒一四一〇〇三三

東京都品川区東五反田四一六一六

高輪台グリーンビル一F

TEL 〇三三三四四五〇九一一

FAX 〇三三三四四五一一三〇

編集 有明会社アド・ボックス

印刷 製本 株式会社 平版印刷

©2003 (検印省略) Printed in Japan

ISBN 4-902222-00-0 C0023

落丁本 落丁本はおとりかえいたしません

さすがにバリの万国博を経て、欧州諸国を見聞してきただけのことはある。どことなく、物腰が垢抜けていた。

これが密と生涯の友となる渋沢栄一のはじめの挨拶の言葉であった。

太政官は、明治二年七月八日の官制改革により、六省置かれた。はじめ民部、大蔵省は別であったが、八月十一日になって所管の事務に関連するところ多し、とのことで併合され「民部大蔵省」となった。二つの省が一つになったわけであるから、その最高責任者である卿（長官）は絶大な権力を擁した。その頃太政官の主要幹部は、大名や公家、それに幕府を制した薩長土肥の出身者によりその大半が占められており、「民部大蔵省」の人事は次のように構成されていた。卿に伊達宗城、大輔に大隈重信、小輔に伊藤博文、大丞が井上馨、そして小丞に郷純造を配した。これらの人物は政治家としては傑出していたが、当然全てが行政事務に通じているわけではない。まして太政官と名は変わって、直接に支配している土地は全てが旧幕府領である。そこでは旧態依然のしきたりも、そのまま踏襲するしか手だてがなかった。ならば、その行政事務に明るいのは旧幕臣方に決まっている。大隈や伊藤は率先して旧幕臣の有能な人物を物色した。渋沢栄一も、前島密もそうして選ばれたわけである。一旦選んでおいて徐々に改革していくしか方法がなかったのである。

渋沢栄一は「橋慶喜に仕え、その家政の改革改善に従事し実力を発揮していたので、当然財務に秀でていた。一方前島密もいままでの職歴を考慮しても、あらゆる意味で行政全般に通じていることに間違いはなかった。ともに地位ではなく、実力で選ばれた二人であった。

はじめ小丞の郷純造は大蔵省租税正として渋沢栄一を招聘した。渋沢は入省したものの、その官員らが雑務に追われ、見るべき成果をあげることができないのに業を煮やし、事務の改進黨を圍り、旧制の改革や新規施設の調査、検討には是非ともあらたな掛を設けるべきだとして、民部省内にそれらを速やかに改善するべく「改正掛」を設置することを提案、早速成った、という次第であった。

さて密が渋沢栄一に迎え入れられ、民部大蔵省に入ったのはいいが、そこですぐに会議に出席せよ、というのには驚いた。またその席に大隈、伊藤兩名に加え、伊達宗城卿までもが臨席しているのには正直に言って仰天した。それも、その人物らが上下の位関係なく、喧々諤々、血気盛んに自由に討論するのであるからこころはすこぶる愉快であった。上といっても、改正掛には掛長の渋沢栄一が形としてあるだけで、密は位こそ九等

大隈重信 おおくま
しげのぶ (一八三
八・三・一一) 九
二・二・一〇) 佐
賀藩士。
維新後、外国官副知
事、参議、大蔵卿な
ど歴任。明治十四年
の政変後、立憲改進
党総理。東京専門学
校(早稲田大学)創
立。のち外務大臣と
して条約改正に取り
組む。一八九八年第
一次、一九一四年第
二次大隈内閣を組
織。

伊藤博文 いとう
ひろふみ (一八四
一・一・九〇) 九一
〇・二六) 萩藩士。
通称俊輔。
松下村塾門下。桂小
五郎に従い東上して
勤王諸士と交わる。
六八年徴されて参予
から兵庫縣知事・大
蔵少輔・工部大輔な
どを経て明治政府中
枢に進む。初代内閣
総理大臣。ハルビン
で暗殺される。

井上馨 いのうえ
かおる (一八三六
一・九一五) 九一
二) 萩藩士。通称閑
太。六八年明治政府
に入り外務、内務、
大蔵など諸大臣を歴
任。

郵政博物館 研究紀要 第11号(2020年3月) 64頁より抜粋引用 シンポジウム特集「日本文明の一代恩人」

前島密の思想的背景と文明開化

井上卓朗 著

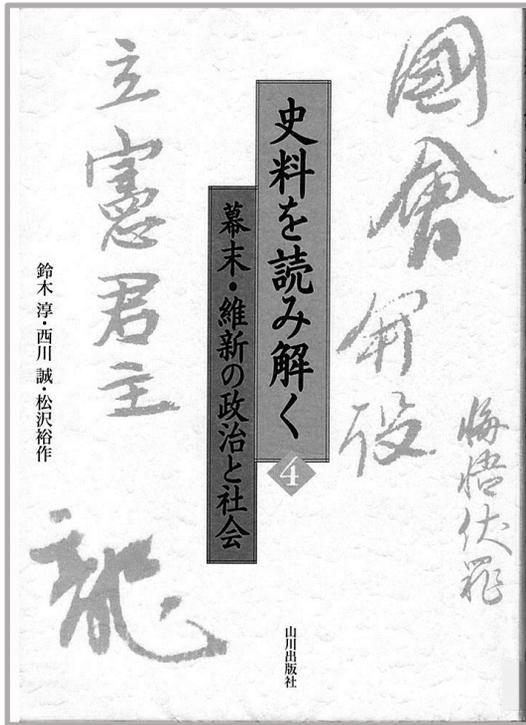
前島密が渋沢と出会ったのは、渋沢栄一によると、前島が中泉奉行、渋沢が相良奉行の時であった。渋沢が静岡で商事・金融会社「商法会所」を始めた時期である。前島は自ら渋沢の商法会所へ出向いて商会の計画を聞き、その後、静岡藩をどのように運営すべきか、さらにはこれからの日本について語り合ったという⁽⁵⁸⁾。

太政官により府藩県の民生関連の奉行職が廃止され、開業方物産掛(藩内の殖産担当)となっていた前島密は、郷純造⁽⁵⁹⁾の推薦により明治政府から徴召された。密は自ら馬を牽き、四名の書生を伴って久能山に登り東照宮を拝したのち、明治2年12月26日(1870.1.27)東京小川町静岡藩邸家老長屋に到着、同月28日(1870.1.29)民部省に出頭し同省九等出仕改正局勤務を命じられた。

「史料を読み解く」 4. 幕末・維新の政治と社会

秩禄処分 大隈重信宛郷純造書簡

2009年6月
山川出版社
鈴木淳・西川誠・松沢裕作 著



ちつろくしょぶん 秩禄処分とは

WEB「日本史事典.Com」より引用

- ✓ 秩禄処分とは、明治新政府が士族などに支払われていた『秩禄』を廃止するためにとった一連の政策のこと。
- ✓ 秩禄の支払いは明治政府にとって大きな負担であり、政策の最大の目的は士族たちをリストラし支出を減らすことだった。
- ✓ 秩禄奉還の法は、希望者限定。秩禄処分と金禄公債証書の発行は強制。
- ✓ 下級士族の多くが利子だけで生活できず、金禄公債証書売り払ってしまった。
- ✓ 新たな仕事を探した士族は「士族の商法」で失敗することも多かった。
- ✓ 士族の怒りは爆発し、西南諸藩を中心に士族反乱がおきた。
- ✓ 反乱を起こさなかった士族たちは板垣らを中心に自由民権運動を行った。
- ✓ 政府は士族授産の一環として屯田兵の設置や安積疏水を開くなどして士族に仕事を与えた。

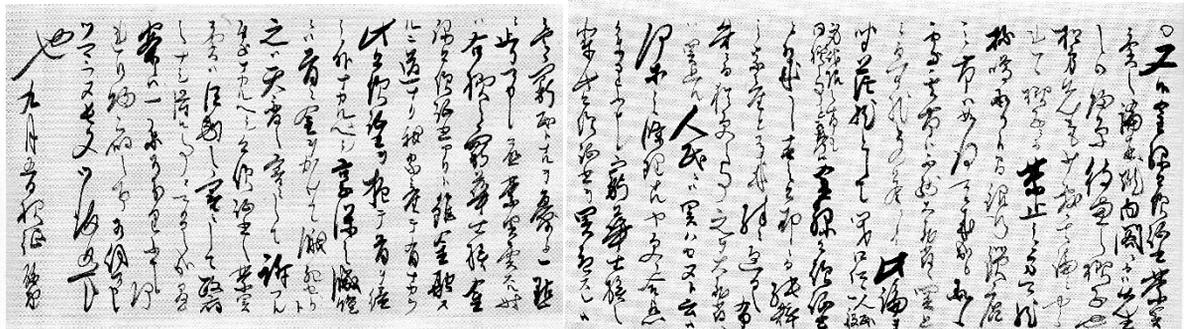
史料を読み解く 4 幕末・維新の政治と社会

2009年6月15日 第1版1刷印刷 2009年6月25日 第1版1刷発行

著者 鈴木淳・西川誠・松沢裕作
 発行者 野澤伸平
 発行所 株式会社山川出版社 東京都千代田区内神田1-13-13 〒101-0047
 TEL 03(3293)8131(営業) 03(3293)8135(編集)
 http://www.yamakawa.co.jp/ 振替 00120-9-43993
 装幀 菊地信義
 印刷所 株式会社シナノパブリッシングプレス 製本所 株式会社手塚製本所

© Jun Suzuki, Makoto Nishikawa, Yusaku Matsuzawa, 2009
Printed in Japan ISBN987-4-634-59047-2

明治10年9月5日付 大隈重信宛郷純造書簡



「大隈文書」イ14-b283 4 早稲田大学図書館所蔵

4 秩祿処分

秩祿処分ちつりくしよぶんの最終段階として明治九（一八七六）年に金祿公債きんろくこうさいが発行された。政府部内で最後まで争点となった、その売買の可否をめぐる国債局長こくしやくしやう郷純造おおくらまきよおおくましのぶの大蔵卿大隈重信宛書簡を読む。

原文

（前略）

○又候金祿公債証書禁買賣之論再燃、内閣ニ而ハ先生之御帰京待兼候様子也。

松方先生も少数其論ニゆられ候様子ニ而、禁止之方可然杯噂承り候間、銀行鎖店

之節ハ如何可被成哉も承候處、其節ハ不残大蔵省へ買上

候而可然との答に而、此論ヲ聞、茫然として閉口仕候人民身代限之節も一般同様之事と相考候

金祿公債証書と相成候節之公布ニ而純粹

之家産と相成、殊ニ過日之布告ニ而猶更之事。之ヲ大蔵省へ

ハ買上ル、人民ニハ買ハセヌト云ハ何等之條理ナルヤ更ニ合点

參リ不申候。窮華士族之輩此公債証書ヲ買却スレハ

空ク窮民トナルヲ憂る一點

ニ止り可申候。愈禁買賣スル時

ハ右様之窮華士族、金

祿公債証書アリト雖金融ス

ルニ道ナク、我家産テ有ナカラ

此公債証書ヲ抱テ首ヲ縊

之外ナカルベシ。享保之饑饉

ニハ首ニ金ヲかけて餓死セリト。

之ハ天変之害ニして訴フル

處ナカルヘシ。公債証書之禁買

賣ハ法制之害ニして政府

之ナシ得ル事ニ可有之哉、愚

察ニハ一圓相分り不申候。何

れ御帰宿之節相伺可申候。

ツマラヌ長文御海恕可被下候

也

（明治十年）
九月五日夜認 聊堂

（後略）

読み下し

○またぞろ金祿公債証書禁買賣の論再燃、内閣にては先生の御帰京待ち兼ね候様子なり。松方先生も少しくその論にゆられ候様子にて、禁止の方しかるべしなど噂承り候間、銀行鎖店の節はいかがなざるべきやも承り候ところ、その節は残さず大蔵省へ買上げ候てしかるべしとの答にて、この論を聞き茫然として閉口つかまつり候（人民一般身代限の節も同様の事とあい考え候）。金祿公債証書とあい成り候節の公布にて純粹の家産とあい成

語句説明

1 松方先生 松方正義大蔵大輔。

2 鎖店 銀行が営業をやめること。

国立銀行条例に規定がある。3 身

代限 個人の破産。明治五（一八七

二）年太政官第一八七号華士族平民

身代限規則により生活必需品のほ

か全財産を公売される。4 家産

家の財産、私有財産。5 一圓 全

然。

り、殊に過日の布告にて猶更の事。これを大蔵省へは買い上げる、人民には買わせぬと云うは何等の条理なるや更に合点まいり申さず候。窮華士族の輩この公債証書売却すれば空しく窮民となるを憂うる一点に止り申すべく候。いよいよ禁買売する時は、右様の窮華士族、金禄公債証書ありといえども金融するに道なく、我が家産でありながらこの公債証書を抱て首を縮るの外なかるべし。享保の饑饉には首に金をかけて餓死せりと。これは天変の害にして訴うるところなかるべし。公債証書の禁買売は法制の害にして政府のなし得る事にこれあるべきや、愚察には一円あい分り申さず候。いずれ御帰宿の節あい伺い申すべく候。つまらぬ長文御海恕下さるべく候なり。

現代語訳

○また金禄公債証書の売買を禁じるといふ議論が再燃し、内閣では先生のご帰京を待ちかねているようです。松方先生も少しその論に動かされているようです、禁止したほうがよいとお考えだとの噂を聞いたので、銀行が経営破綻したときにはどうなさるおつもりか聞いたところ、そのときは残らず大蔵省が買い上げるべきであろうとの答で、この論を聞いて茫然として閉口いたしました(普通の個人破産の場合も同様のことと考えます)。金禄公債証書になった際の公布で純粹の家産となり、ことに過日の布告でおさらのことです。これを大蔵省へは買い上げる、人民には買わせぬというのは、どのような理屈なのか、まったく納得できません。困窮した華士族がこの公債証書を売却すれば、なすすべなく窮民となってしまうと心配する一点からだけで話です。いよいよ売買を禁止したなら、そのような困窮した華士族は金禄公債証書があつても金を借りる道がなく、自分の財産でありながら、この公債証書をかかえて首をつるしかないでしょう。享保の飢饉のときには首に金をかけて餓死した人があつたといひます。

これは自然災害で文句をいうべきところはなかつたでしょう。公債証書の売買を禁じるのは法制の害であり、政府がしてよいことでしょうか、私にはまったくわかりません。いずれご帰宅のあとにおうかがいします。つまらぬ長文をお許しください。

解説

秩禄処分最終段階は、明治九(一八七六)年八月五日に行われた金禄公債証書発行条例の公布であつた。江戸時代の武士の俸禄などを引き継いだ家禄は、多くの藩では明治初年の藩政改革によつて削減されたうえで廃藩置県の際に明治政府に引き継がれた。その後、希望者が「奉還」してかわりに現金や公債証書をもらうことが認められ、また支給形態が現金に切りかえられていた。この家禄と戊辰戦争の恩賞である賞典禄の全所有者に対して、その金額の数年分の金禄公債証書を渡すかわりに年々の支給を打ち切つたのである。金禄公債の所有者には公債が償還されるまで毎年利子が交付されたが、それは最大でも従来の家禄と同額であり、家禄が多かつた者ほど従来と較べて低い額となつた。

当時、明治政府の支出の三分の一程度が家禄であり、とくに政府のために仕事をしているわけでもない華士族にこれを支給する状態を解消するのは、政府にとつて大きな課題であつた。しかし、このような処分の形には異論もあつた。公布直前の七月三十一日になつて「検視」を求められた元老院は翌八月一日に議長有栖川宮熾仁の名で、その一部を改正する意見書を提出して、太政大臣三条実美に上奏を求めた。それは政府の命令があるまで、金禄公債証書を売買し、あるいは抵当にすることを禁じるべきとするものであつた。検視は法案の可否を論じることができず、追認するだけの制度であつたから、このような意見の提示が最大限の異論であつた。意見書では、先に希望者が奉還したが、彼らは経済的自立にいたらない

まま資本を失ったので、その轍を踏むべきでない、またいつせいに売却されると価格が下がるので、政府が「保護」のために売買を規制すべきであると論じた。元老院では出席議員一八人中一三人がこの意見書に賛成した。意見書の起草者柳原前光のちに大正天皇の外祖父となる公家であるが、地租改正の発案者陸奥宗光や、のちの大蔵卿佐野常民、土佐海援隊出身で初代衆議院議長となる中島信行も賛成意見を述べ、由利公正にいたっては、期限を定めず売買を禁止すべきという強硬論であった。売買禁止反対は古い考えというより幅広い与論であったといえよう（元老院会議筆記 号外 自第八号至十九号 二「国立公文書館所蔵単行書、アジア歴史資料センター Ref.A07090152200」のうち第二十二号）。

これを受けて、太政官は条例を第一〇八号布告として原案のまま公布するとともに、第一〇九号布告で、政府の指令があるまで書入れ・質入れ・売買の約定を禁じた。ここで売買ではなく売買約定としているのは、証書交付のあかつきには解除する伏線であったと考えられるが、大蔵省内でも議論が続いたことがこの史料からわかる。

受取人の大蔵卿大隈重信は、当時熱海で静養していた。郷は慶応四（一八六八年八月）に新政府の会計局組頭になって以来、会計官・大蔵省と一貫して新政府の財務官僚であり、明治七（一八七四年）には国債頭に就任していた。金禄公債の担当部長の長である。当時は西南戦争中で、この書簡の前半では終息が近い戦況が語られているが、省内で大隈に次ぐ地位の松方が売買禁止論に傾いていることを批判するのが引用部分の主眼である。金禄公債は五年目以降に現金で償還されてしまうと、その現金をどう使うかは持ち主の勝手である。そうである以上、証書の状態では売却できない、というのは理に合わないように現在の感覚では思える。郷の「純粹之家産」とはこのようなことであろう。しかし、家禄は売買できず、明治五

（一八七二年）の第三〇〇号布告は家禄を抵当にした貸借については裁判を受け付けない、としていた。現在の年金を考えれば、そのような方も理解できよう。史料中の「過日之布告」は、明治九年十二月の、「旧藩庁に於て禄券売買差許しこれあり、従来現場売買致したる家禄」を優遇する太政官第一五二号布告であろう。これが適用されたのは旧鹿兒島藩と高知藩だけで、反乱の可能性が高い両地の不平士族対策の色彩が強かったが、郷はこれを根拠に、しよせん家禄は売買可能な私有財産だとする。

郷は、農民の出身であった。武家奉公人から身を起し、王政復古のうちに一五〇両で御家人の株を買っている。金で武士の地位を買えたのが二藩だけの例外でないことはよく知っていた。ようやく買った御家人株が数カ月で意味のないものとなるなかで、彼は値下がりした東京の土地を買い集め、のちに巨利を博す。自由な経済活動がリスクをとまうことは、彼には当然であった。そして、郷は自分を登用した大隈はわかってくれると確信しているようだ。

大蔵省は明治九年のうちに国立銀行条例を改定し、金禄公債で出資して銀行をつくる道を開いた。これによって全国の旧城下町で一〇〇を越す「国立銀行」が設立され、早期に多量の公債証書が市場に出回るとは防止された。明治十一（一八七八）年七月から公債証書の交付が始まると、政府は同年九月九日に、証書が下付されたら書入れ・質入れ・売買を許すと布告した。念のため、希望者の金禄公債を府県庁があずかり、また額面より低い価格ではあるが買い取る体制もとられたが、この時点で、売買の解禁が大きな議論を呼んだ形跡はない。財産を失う自由のある時代が到来したのである。

参考文献 郷男爵記念会編『男爵郷誠之助君伝』（郷男爵記念会、一九四三年）、落合弘樹『秩禄処分』（中公新書、一九九九年）。

まき し まのかみ よし のり

郷純造が仕えていた長崎奉行 牧志摩守義制

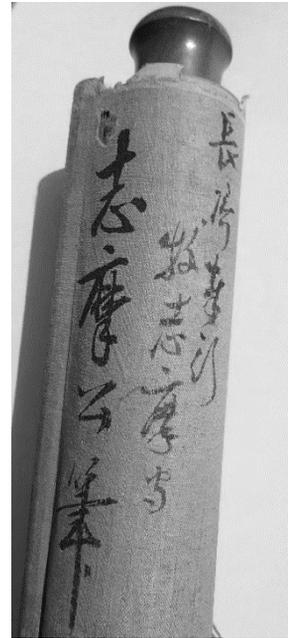
いきさつ(経緯)話は2011年に遡る。巻物の軸の肩に「長崎奉行牧志摩守 志摩公筆」と書かれた書が出てきた。我が家の古い木箱からである。PCで検索すると、「大宮の郷土史」1件がヒットした。

志摩守の書の写真を大宮の郷土史にお送りした所、次のようなお手紙と冊子を頂いた。

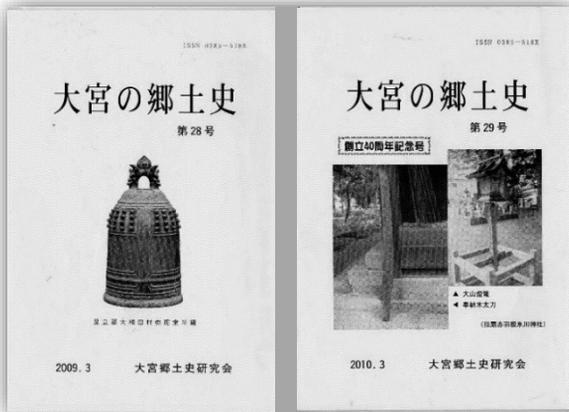
「(前略)実に多くの方々が見ておられることに、改めて驚かされた次第です。当会ではこの数年旧市内(大宮市)の著名な寺院を対象に、共同調査を実施しております。大成山・普門院の調査の折、牧志摩守義制の墓石を見つけ、副会長・織本重道氏が中心になりまとめ、大宮の郷土史 第28号・第29号に発表したものです(後略)」と、当時の会長・河田捷一様からのお便りでした。

そんな名利普門院の中に、郷純造が建立した牧志摩守義制の墓誌があるとは、何という奇遇か、縁を感じずには居られない。また、それを見つけて出して下さった大宮の郷土史研究会の諸兄に感謝いたします。

郷家プログ 郷和彦 記



長崎奉行 牧志摩守の書
嘉永5年(1852)
郷和彦 蔵



- ・第28号 2009年3月 大宮郷土史研究会発行
- ・第29号 2010年3月 大宮郷土史研究会発行

「大宮の郷土史」第28号・29号

大宮の郷土史」29号

旗本 牧氏

―長崎奉行牧志摩守義制を中心として―

織本 重道

(牧氏の墓誌建立に郷純造の名 関係分抜粋)

計一三〇〇石余

とある。上野国は長富の元禄一〇(一六九七)年に廩米を改められ四〇〇石与えられ、計一二〇〇石を代々知行してきた。義道の時に一〇〇石加増となったのか。

また、建立者一五名の名が刻まれている。順に、大蔵太書記官郷純造、上野国中島祐八、中島文在、武蔵国井原平八、丹波国衣川佐兵衛、足立嘉右衛門、中嶋秀太郎、相模国大貫弥七、東京塚達、陸軍中尉柴田至、大蔵六等属井原澂一、大蔵十等属岩澤興行、男牧謙、松平敏行、大蔵一等属中島行孝

郷純造は美濃国黒野(現岐阜市)の豪農の三男として生れ、江戸に出て武家の家を転々とした後、長崎奉行牧志摩守の納戸役としてオランダとの折衝にあたり、さらに箱館奉行堀利熙、大坂町奉行鳥居忠善に仕えた後、維新後大蔵官僚として活躍。松方正義蔵相の下で初代大蔵次官を務めた。退官後貴族院議員、男爵。次男は日本商工会議所会頭を務め、渋沢栄一後の財界世話役となった郷誠之助、四男は岩崎弥太郎の養子となった岩崎豊弥。

※明治元年五月・宮中日記に、「牧相模守 一三〇〇石士分一〇人・足軽二人 内士分二人在京、士分一人・足軽一人知行所上州佐位郡今井村、士分一人知行所武州

旗本長崎奉行 牧志摩守義制よしのり

牧義制 享和元年(1801年) - 嘉永6年9月9日(1853年)

江戸時代後期の旗本。官途は従五位下、志摩守。牧義珍の子。

弘化3年(1846)12月15日より嘉永2年(1849)10月8日まで日付盗賊改め方を務め、普請奉行に就任ののち、嘉永3年(1850)11月29日長崎奉行となり翌年9月に長崎に着任。

嘉永4年、薩摩藩から送られて10月1日に長崎に入ったジョン万次郎10月3日から11月22日までの間合計18回に渡って取り調べ、幕閣に対して「万次郎はすこぶる伶俐にして国家の用となるべき者なり」と報告している。嘉永5年(1852)9月に長崎を離れ、嘉永6年4月28日西丸留守居となる。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

「大宮の郷土史」第29号

旗本牧氏

— 長崎奉行牧志摩守義制を中心として — 織本 重道著 (抜粋)

牧志摩守義制の長崎奉行としての主な実績

- 1 就任時米価騰貴人心騒擾、米倉を開き米価抑制
- 2 窮民対策
- 3 長寿者報奨
- 4 貿易統制
- 5 漂流民の受け入れ

以下抜粋

ジョン万次郎取調べ

オランダ商館長ドンケル・クルチウスとの交渉

牧志摩守長崎奉行として歴史的役割

◎牧志摩守義制の長崎奉行としての歴史的役割は、ジョン万次郎取調べとオランダ商館長ドンケル・クルチウスとの交渉である。

ジョン万次郎の取り調べではかなり寛大に処置し、土佐へ帰国させた。土佐では後藤象二郎はじめ多くの者が、おそらく坂本龍馬も河田小龍を通して万次郎の影響を受け、これが新時代に繋がっていった。

ジョン万次郎はその後江川太郎左衛門家に寄宿したが、幕末・明治期に活躍した大島圭介、榎本武揚、大山巖、福沢諭吉、岩崎弥太郎、西周等多くの者が訪ね、中浜塾で海外事情や英語を学んだ。また、長崎奉行所で取り上げられた書籍は後に返還されたが、その中の一冊は安政6年頃、手塚律蔵、西周によって又新堂から「伊吉利文典」として出版された。

この本は初級英文法書で、その後洋書調所からも出版され、さらに開成所から翻訳出版された。我が国英語学習の基本となった書物である。

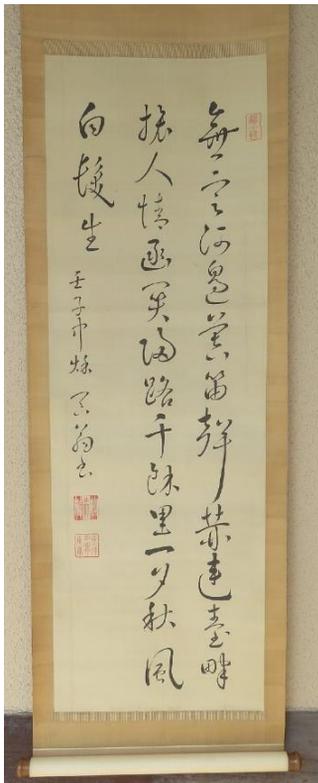
なお、「伊吉利文典」の表紙には「手塚律蔵 西周助閲」と並んで、「津田三五郎 牧助右衛門 校正」とある。この牧助右衛門は志摩守義制の子の義道の可能性がある。又新堂で英語を学んでいたのだろうか。

このように牧志摩守がジョン万次郎に対して寛大に処置したことの影響は計り知れない。

ドンケル・クルチウスは特別な使命を帯びて日本にきた。風説書だけでなく東インド総督の信書を持参した。いろいろ理屈はつけたが、結局受け取り阿部正弘に送った意義は大きい。だが、クルチウスとの信頼関係を築けぬうちに任期が来て長崎を去った。このことはクルチウスにとっても予想外のことだったらしい。もし、もう少し時間があり、駆け引きを超えて分かり合えれば、もしかして協議会の設置に進み、その後の日本の対外政策も違った方向にいったのではないかと残念に思う。

いずれにしても牧志摩守義制が幕末の大事な時期に長崎奉行となり、日本の針路に大きな影響を与えたことは記憶されていいことだと思う。

「牧志摩守義制漢詩の解説」



牧志摩守義制 漢詩の掛軸
嘉永5年(1852)
郷和彦 蔵

(雑詩 陳祐)
無定河邊暮笛聲

赫蓮臺畔旅人情

函關歸路千餘里

一夕秋風白髮生

壬子 中秋 牧義制 落款

(読み下し文)

無定河の辺 暮笛の声
(むていかのほとり ぼてきのこえ)

赫蓮台の畔 旅人の情

(かくれんだいのたもと たびびとのじょう)

函関の帰路 千余里

(かんかんのきろ せんより)

一夕の秋風 白髪生ず

(いっせきのあきかぜ はくはつをしょうず)

〈七絶仄起下平聲庚韻〉

(口語訳)

無定河の岸へのほとりに、夕暮れ時の笛の音が耳に入ってくる。
赫蓮台のほとりにたたずむ旅人には笛の音を聞くにつけても、寂しさがこみ上げてくる。

遠く函谷関への帰り道は、千里余に及ぶ道のりである。
それを思うにつけてもこの一夜の秋風に、俄かに白髪が生ずるのである。

壬子＝嘉永5(1852)年

(語釈)

○陳祐・・・伝記は分からない。全唐詩では、無名氏の雑詩の中に入れてられている。

○無定河・・・陝西省北部を流れる川。流れが急なため絶えず川の深さが変わるところからこのように呼ばれる。

○赫蓮台・・・寧夏回族(ねいかかいぞく)自治区の首府・銀川市の東南、黄河に臨むところにあつた高殿。五胡十六の一つの大夏国(だいかこく)をたてた『赫蓮勃勃(かくれんぼつぼつ)』が、築いたものといわれている。

○函関・・・函谷関(かんこくかん)のことで関所のこと。

*くずし字の解明は國島京子様、読み下し文と口語訳、詩形〈七絶仄起下平聲庚韻〉、語釈は郷孝夫様にご協力を頂きました。御礼申し上げます。

郷家ブログ 郷和彦 記

補 足

1. 郷純造が青年時代に世話になった御望村の漢学師匠郷余斉がいる。余斉は同村藩主松平長八郎との交流から得たと思われるが、当時の出来事を余斉が模写した文書が2015年(平成27年)御望の郷隆雄(現泰彦)家古文書調査で多数判明。《「和蘭密告辰巳秘録・咬瑠吧筆記」に牧志摩守の名、「亜米利加使節差出候書付和解」、ペリー浦賀来港の「アメリカ国之書翰受取之節御困人数並陣立之図」には揖斐出身のペリー折衝役浦賀奉行戸田氏栄、「桜田門外の変」などなど》

純造の東京屋敷と松平長八郎の屋敷は近く、余斉は両者との交流で幕府の資料得られる環境にあつたと思われる。

2. 長崎といえば、郷純造が長崎奉行所を離れてから14年後に、大洲藩の蒸気船いろは丸の運航に関わり、坂本龍馬と接していた大洲藩郡中郡奉行の国島六左衛門紹徳が慶応2年(1866)12月24日に長崎で自刃している。昭和時代になって国島六左衛門の先祖が美濃国方県郡古市場村出身であることが判明。先祖は黒野城主加藤貞泰に仕え、お供して米子、大洲へと移ったのである。

同郷の黒野では生誕地もすぐ近くであり、えにしを感じる。

研究会 河口耕三 記

明治天皇東京行幸・大洲藩が担う

明治元年（1868）9月20日、天皇は京都を発し東海道を進み10月13日、江戸城へ入城した。

輔相（ほしょう）・岩倉具視以下の諸役人・藩兵ら2千余兵を従えての大行幸であった。同日、江戸城を東京城とした。大洲藩十三代藩主加藤泰秋は、二個小隊を率いて前衛を、後衛も又、新谷藩が担った。

馬上豊かに秋風を切り、「蛇の目紋」の大旗をなびかせ、先導する雄姿は大洲藩最後の藩主泰秋で、ここに有終の誉（ほまれ）を飾ったのであった。名君と謳われた泰秋の行動に、大洲の人たちは限りない高揚を感じ、また惜しめない拍手を送ったことであろう。

平成16年（2004）大洲城は復元された。全て木造りで釘一本と使用して無いと云う。総工費約十数億円で、その半分が大洲市民らが負担したと聞き及んでいる。大洲市は5万余の人口である。良くぞ再建できたと驚くばかりで、それには計り知れないご苦労があったのではないかと察します。大洲城は小高い丘の上に建ち、威風凜然としたその姿は、正に必見の価値あるお城ではある。

初代大洲城主・加藤貞泰は、黒野城・4万石の城主であった。関ヶ原の役（1600）後、国替えで伯耆国（ほうきのくに・鳥取県）米子城主6万石となり、その後大洲城主に転封となった。大洲藩は貞泰を初代として泰秋まで十三代続いた。



「東京名勝吳服橋之図」（大洲城山郷土館蔵）

旧大洲市合併20周年に合わせ出版された『大洲市誌写真版』大洲市誌編纂会、昭和49年8月発行より
図の解説 江戸城入場錦絵 1868年（慶応4）9月、明治天皇が東行された。このとき加藤泰秋は先駆をうけたまわり、新谷藩は後衛を供奉して江戸城に入城した。

郷純造・江戸城無血開城に寄与

郷純造は、文久元年（1861）36歳の時、凶らずも大坂町奉行・鳥居越前守と松平勘太郎の家老を勤めた。慶応2年（1866）家老職を辞し江戸へ戻り幕臣の株の入手を待った。浪人すること1年、その間成田山新勝寺で37日の断食もした。

慶応4年正月、園彌平から撒兵隊（さっぺいたい・鉄砲隊）の売りが出た。その株を150円で買い受け、念願の幕臣になった純造は、毎日練兵場で訓練を受け、隔日に鉄砲を構え門衛を勤めるのが日常だった。

しかし、同年2月16日、御作事方勘定役の役付きになり、直ぐに工兵指図役並勤方に昇進し、練兵憧れの「黄金の陣笠」を冠り指図をする身になった。そして工兵指図役頭取に特進した。

一方、戊辰戦争という名の戦いは、慶応4年1月から始まり翌5年2月の函館戦争まで続いた。その間江戸城では、開城の議決をするに先立ち江戸城の護りを固めることとした。純造の持ち場は本丸大手（正門）と決まった。工兵指図役頭取の最後のお役目として、ここを護れることは本望であり、身体が奮い立った。大砲を構え弾薬を貯え華々しき討ち死にを覚悟した。

ところが、将軍からは天璋院・篤姫を通じて、『江戸城は穏やかに開城し、軽率な振る舞いは無きように』というお言葉が縛したに懇諭された。だが城内は意見が割れ、騒然となった。純造の率いる部隊の士卒も騒ぎ立て、脱走か謹慎か二者択一に迫られた。そこでそれを決めるため、城内の隊付き仕官一同は詰所に集合し総評議を開いた。

意見を求められた純造は、烈々たる気魄（きはく）を込めて帰趣（きしゅ）と大義の存ずるところを熱心に論じ、脱走論者らを圧倒した。評議はついに『謹慎』と決定したのである。

だがその時、純造に「謹慎して武器弾薬を取り上げられた後に、紛乱（ふんらん）が生じた場合に、我々は手を束ねられて斬首（ざんしゅ）を待つのか！」と、詰め寄ってきた士官がいた。すると純造は「万全の備えがある、余は死を以て誓う。」と断言した。

純造は「万が一の時に備える」という掛かりにも任命されていたので、密かに元込銃三千挺、スナイドル銃千挺そして弾薬一式を、深川の松原喜平衛宅に隠しておいたのである。これらはその後、官軍に引き渡された。

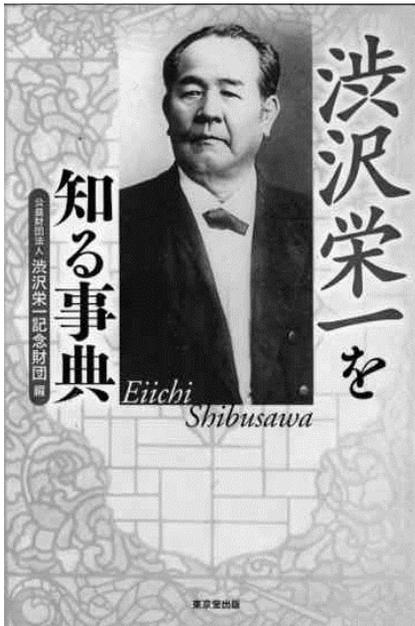
江戸城の無血開城は慶応4年（1868）4月11日であった。その後、旧幕府軍は順次撤退し、新政府軍が次第に鎮圧していった。7月に入り、鎮台府（ちんだいふ）の陸軍頭を通じて純造に、新政府からのお召しが再三あったが拝辞していた。

しかし、8月5日付けを以て鎮台府の辯事（べんじ）から徳川亀之助（家達・いえさと）宛純造召し出しのお沙汰があった。又、純造に直接に陸軍頭・阿部邦之助からも会計局組頭に、仰せ付けるとの辞令の通達があった。純造はお受けし出仕をした。

当時の会計局は、後の大蔵省（現財務省）で辰ノ口・傳奏屋敷跡（でんそうやしきあと）にあり、江戸詰めの高官で判事の江藤新平らがおおり、周囲は殆どが薩長土肥（さっちょうどひ）の人たちで固められていた。[この無血開城の項は「郷誠之助君伝」を参考にした。]

明治天皇の行幸で純造は、目と鼻の先である二十橋辺りで、謹んでお迎えした事と思われる。

郷 和彦 記



郷純造の推薦で渋沢栄一らを明治新政府に仕官させた功績は大きい

「渋沢栄一を知る事典」

編者 渋沢栄一記念財団

2012年(平成24年)10月

発行 (株)東京堂出版

明治新政府へ渋沢栄一らの登用を大隈重信へ推薦した郷純造に関する事項を51、52頁から引用する。

改正掛と実業界入り(渋沢栄一)より

1869年(明治2年)の10月、新政府から静岡藩のもとに、栄一への招状が届いた。一度は断ったが、伊達宗城(むねなり)、郷純造の推挙と大隈重信に説得されて、民部省租税正として新政府に勤務することになった。さらに栄一は、杉浦譲、前島密、赤松則良、島田三郎ら主に静岡藩から来た旧幕臣10数名をとりまとめる民部省改正掛の掛長にも任命され、近代日本の国づくりにとりかかった。度量衡、租税制度の改正、暦、銀行制度、貨幣金融制度、郵便制度、鉄道敷設、官庁建築など、近代化に必要と考えられるあらゆる制度の導入を手掛けた。まさしく近代日本社会の基盤整備を行ったのである。

栄一は、第一銀行を設立する一方で、東京養育院の設立にも関与していた。1870年(明治3年)には大蔵少丞、翌年には枢密権大史に転任した。

・・・その後、大久保利通との対立により、1873年(明治6年)明治政府を井上馨とともに辞した。大久保との対立の理由はさまざま考えられるが、直接の原因は国家財政に対する両者の考え方の違いにあった。薩長藩閥出身者が多数を占める新政府の中で、最高実力者であった大久保とは合わなかった。

- (1) 郷純造1825年(文政8年)～1910年(明治43年)美濃国黒野の豪農の三男として生まれる。大垣藩用心に武家奉公したのち、各地を転々とするが、対外交渉、貿易問題などの実務を着けた。御家人株を買い幕臣になったが、江戸城開城後は新政府軍に従軍した。維新後、44歳のとき大蔵省に勤務し、渋沢栄一、前島密、杉浦譲など旧幕臣を明治政府に推薦仕官させた功績は大きい。後に大蔵次官を経て、貴族院議員、男爵となる。

補足1：改正掛(かいせいがかり) = 明治2年11月18日(1869年12月20日)に民部省に設置された部局で、明治3年7月10日(1870年8月6日)に大蔵省に移管され、明治4年7月27日(1871年9月11日)大蔵省と民部省の再統合の際に廃止された。明治政府に必要な制度改革の素案を作成した。出典：フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

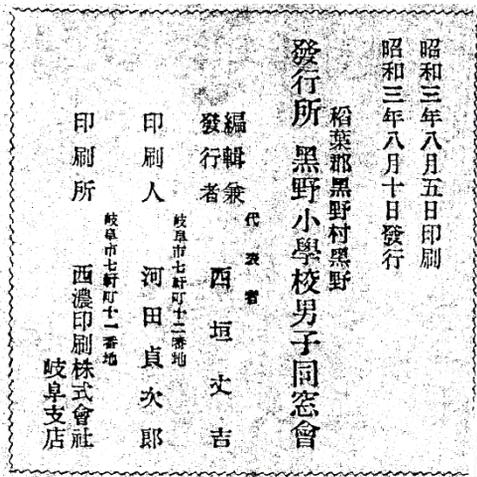
補足2：郷純造も渋沢栄一と同じく、幕臣の出身である。大蔵少丞、大蔵大丞と出世していたが幕臣嫌いの久保と合わず、負債取調係に降格させられ、役職が渋沢の下位になっていた時期がある。因みに渋沢栄一が大蔵省に登用された明治2年は渋沢栄一29才の若さ。明治新政府に入り4年目の郷純造は44才。

郷純造(76歳)

黒野小学校に土地寄贈

1901年(明治34年)7月
田6段5畝17歩(約2千坪)
(反)

1928年(昭和3年)8月
黒野小学校男子同窓会 発行



本校沿革概要

明治三十年四月 舊黒野、御望兩校合併鶴岡高等小學校ト改稱
 同 三十一年二月 黒野高等小學校ト改稱
 同 三十三年五月八日 校舍竣工ニ付落成式舉行
 同 三十四年七月 男爵郷純造氏ヨリ田六段五畝十七歩寄附
 同 四十年六月 畑一町二段二畝二十七歩拂下ヲ受ケ本校基本財産ニ編入
 同 四十一年四月 農業補習學校附設
 同 四十一年四月 農場一段五畝餘歩設置
 同 四十二年十二月 基本財産蓄積條例設定同時ニ收穫期ニ於テ米麥初穂積立開始
 同 四十三年三月十八日 成績優良ニ付本縣ヨリ表彰金五拾圓下附
 同 四十四年三月 農業補習學校成績優良ニ付本郡長ヨリ表彰
 同 四十五年四月 四十一年度小學校令改正ノ結果尋常科六學年高等科二學年ノ教科完

六一

谷汲山華嚴寺・本堂前大石燈は郷純造寄付

2017年(平成29年)10月の台風被害で石燈壊れる

郷純造が明治38年(1905)に谷汲山華嚴寺本堂前に左右一対の大きな石燈を寄付した。しかし2017年10月の台風21号被害で樹齡約300年のモミの木が倒れ、両側共に石燈が壊れた。その後、本堂裏の石燈が移設された。華嚴寺の純造銘石燈は、112年間存在していた。



台風で倒れたモミの木
写真:華嚴寺提供

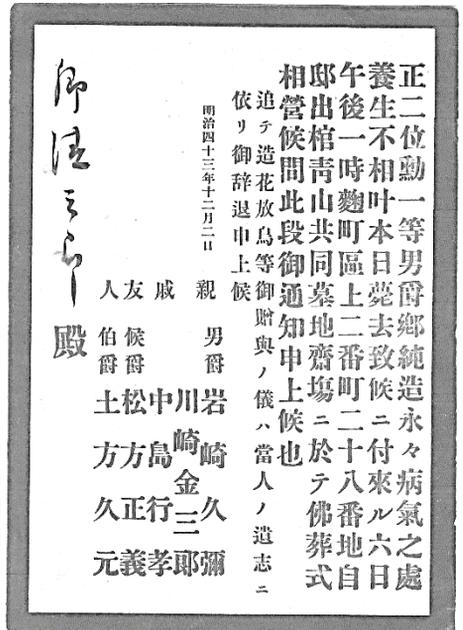


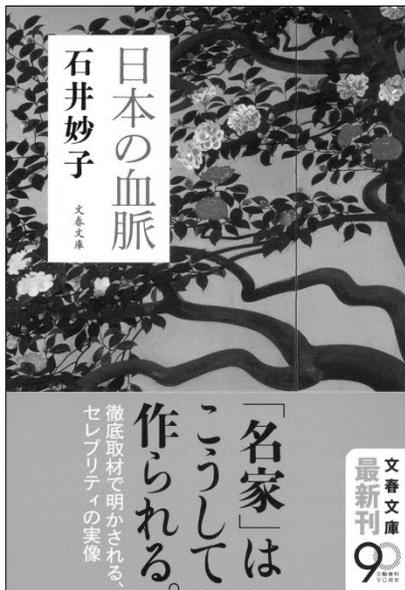
現在の本堂前 筆者撮影
左右1対の石燈、以前は純造銘

「明治38年2月勲二等 郷純造」
の銘
2017年3月13日 郷和彦撮影

郷純造葬儀案内状

1910年(明治43年)12月2日
郷本家八代 清三郎宛て
郷和彦蔵





「日本の血脈」(文藝春秋)より

中島みゆきの曾祖母は郷純造の妹

「日本の血脈」 石井妙子著

「哀しき父への鎮魂歌」中島みゆき
発行 2013年12月 文藝春秋

この本には著名人10名の血脈が紹介されている。その一人に「哀しき父への鎮魂歌」のタイトルで歌手中島みゆきの血脈が全29ページに書かれている。この中から中島みゆきの祖父中島武市について引用する。

『中島みゆきの曾祖母は郷純造の妹志乃で、子の中島武市は明治29年、岐阜県土貴野村（現・本巣市）の出身で数えの16まで育ったという。

母、志乃は亭主運が悪く、大垣藩士であった武市の父、臼井忠義に死に別れて、小作農の中島源吉と再婚。だが、またもや夫に先立たれてしまう。そのため武市は満足に学校に通うこともできず数えの16で大阪心斎橋へ奉公に出た。生まれつき頭の切れた武市は、やがて筋金入りのお大阪商人へと変貌していく。ところが5年の歳月が過ぎた頃、主家の娘と恋仲になり、店の金に手をつけて逃走し、全てを失い故郷へ戻った。とはいえ都会の暮らしを知った武市には、農夫で一生を終える人生は、もはや考えられなかった。

そこで一度も会ったことのない従兄を頼って上京する。この「従兄」は、かなり著名な人物である郷誠之助男爵、近代史に名を残す財界人だ。

武市の母が志乃、その兄が郷純造であり郷誠之助はその息子だった。つまり自分たちは従兄弟の関係であると、武市は回想録で繰り返し語っている。だが、郷誠之助の君伝を見ると、そこに書かれた家系図の中に志乃の名はない。志乃の母は正妻ではなかったのだろうか。

郷誠之助は突然現れた山出しそのままの、従兄と称する武市を見て、当然ながら門前払いした。「ワシに志乃ちう叔母のあることは聞いているが、武市という従兄弟がいるということは知らない。あまり心やすそうに名乗ってこられても困る。立派に独立してから顔を出すがいい」（『波瀾に富む50年 中島武市氏の半生史』昭和30年。以下、文中では回想録と記す）

岐阜から中島武市が従兄の郷誠之助を頼って訪ねていったのは、大正3、4年のことであった。財界の中心人物として華やかな活動をしていた当時の誠之助は、そんな武市を見ると座敷にも上げず、玄関先ではねのけたのだが、武市はそれが悔しくて、「絶対にひとかどの人物になって再会を果たす」との思いを胸に抱き、以来がむしゃらに働いたのだと回想録で語っている。

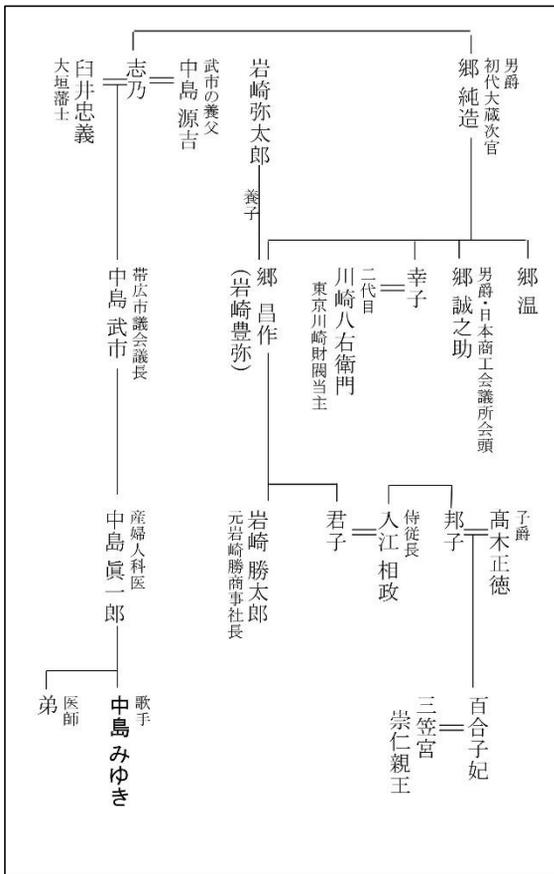
誠之助に門前払いされた武市は、しかたなく東京で洋食屋の皿洗いなどをし、次に名古屋に出て株屋の定員となった。そのとき、偶然「定員募集、生来大成せんとするものは北海道に來れ 北海道旭川区 博進堂書籍店」と書かれた新聞広告を目

にし、大正5年北海道へと渡る。

以後時を経て武市は北海道で成功し、帯広商工会議所副会頭となった武市が20年振りに誠之助の元へ訪れた。武市の回想録によれば、郷は20年前とは打って変わって武市を座敷に上げると、「偉い、偉い、よく頑張った。これからは親戚ずきあいをしよう」と慰労してくれたという。武市にとっては人生の目標が願った瞬間だった。

だが、武市の名誉欲、出世欲はその後も留まらず、戦後は政界に乗り出し昭和21年から立て続きに衆参合わせて3回、国政選挙に立候補している。だが三度とも落選した。以後、国政はあきらめて、帯広市議会議員となる。丁稚上がりで野生をむき出しにし、がむしゃらに働いて帯広でのしあがった中島武市、その長男として生まれたのが、中島みゆきの父、眞一郎である。

武市は帯広では財界人として知られた人物だった。手広く商売をし、帯広市議会議員を長く務め、議長にも選ばれている。また二宮尊徳像をはじめ、帯広開拓の先駆者である依田勉三像などを次々と学校や市に寄付し、篤志家としても知られた。今でも市内のあちこちに「寄贈者 中島武市」と記された銅像は多く残され、武市が依田勉三像とともに寄付した土地は「中島公園」と名付けられている。』



『誠之助には腹違いの弟妹があり、妹幸子は東京川崎財閥の二代目当主、川崎八右衛門に嫁ぎ、その下の弟・昌作は、乞われて三菱の創始者、岩崎弥太郎の養子になった。岩崎弥太郎には実子が多くいたが、男爵であり政財官に強い影響力のあった郷家と縁を結びたいという気持ちがあったのだろう。

郷昌作は、岩崎豊弥と名を改め、その娘、君子は昭和天皇の侍従長、入江相政 (すけまさ) と結婚する。入江の姉、邦子は高木正徳 (まさなり) 子爵と結婚し、その娘・百合子は三笠宮と結婚している。つまり、中島みゆきと三笠宮家は縁戚関係にあると家系図は物語るのである。』

「日本の血脈」 (文藝春秋) より

歌手中島みゆき祖父中島武市の故郷岐阜

岐阜新聞 2012年(平成24年)4月21日付掲載

伊佐治邦夫 提供

分水嶺

富有柿の産地、本巢市。柿の木にやっと新芽が吹き出した。市内から大野町方面に向かう国道303号。その道沿いに土貴野神社がある。小さな境内に胸像が一つ。刻まれた名前には中島武市▼神社は旧糸貫町土貴野の氏神。武市さんは明治30年、当時の土貴野村早野に生まれた。北海道へ渡り、事業を成功させ、帯広市の商工会議所会頭など要職を勤め上げた▼郷里への思いを多額の寄付などであてがい、糸貫町の名誉町民として讃えられた。「今は誰もそんな話、知らんやろね」と神社近くの住民。町は合併で本巢市になり、武市さんはあの世で名誉市民の称号を得た▼帯広の名士だった祖父の遺徳を受けているのが歌手中島みゆきさん、という話もほとんど知られていないエピソード。みゆきさんは武市さんの長男の娘さんで、北海道の出身とあるが、岐阜県民のDNAが流れている▼こんな話を見聞きすると、みゆきさんが俄然、身近な存在になるのでは。「時代」が世に出て37年。この歌はいまだに歌い継がれる。以後「悪女」「空と君のあいだに」「フライト」。きら星の歌曲が続く

▼「地上の星」はサラリーマンたちの応援歌にもなった。きょうは別れた恋人や旅人が、生まれ変わって巡り会う地。岐阜は素敵な御縁が生まれる地上の星。

2012 4・21

「大志を抱いた人びと」－岐阜県人の北海道開拓物語－

1998年 岐阜県歴史資料保存協会編 より引用



中島武市

中島武市の母の兄は松方財政の推進者で大蔵次官を務めた男爵郷純造。純造の次男が郷誠之助。武市と誠之助は従兄弟同士にあたる。

武市は明治29年土貴野村（糸貫町）早野に生まれる。独立の夢を抱いて新転地の北海道旭川に渡り、帯広を本拠地として行商を始め、やがて帯広商工会議所会頭となり、北海道商工会議所連合会副会頭に推された。また帯広市議会議長ともなる。北海道に岐阜県人会創立されると、その会長に推され発展に尽くす。武市は生前「自分は寄付することが仕事であり、営業だ」と誇り、銀行から借金して帯広市や郷里の糸貫町へ数々の寄付をしている。

■中島武市生誕の本巢市土貴野訪問■ (旧 本巢市糸貫町)

最近歴史交流の古河太麻命氏の叔父が旧土貴野村村長であったことと、古河氏が戦時中一時疎開していたこともあり、中島武市が母校の土貴野小学校に寄付したピアノがあるようだと聞き、郷和彦氏と3名で小学校の佐藤直秀校長を訪問。中島武市資料や寄付目録に昭和29年寄付のピアノ名確認。その後、本巢市教育委員会の職員とともに中島家に縁がある光輪寺へ。中島洋晃住職ご夫妻から武市についてお聞きし、武市先祖の墓を訪問。そして糸貫公民館へ、公民館長の案内二階奥のピアノに「寄贈 北海道帯広市中島武市」の銘を確認する。後日、本書に寄稿の服部高信氏と4名で土貴野神社と武市寄付の二宮尊徳像がある小学校へ再訪問。

中島武市は糸貫町名誉市民第1号。
2021年4月23日、5月7日訪問 記 河口



中島武市寄付のピアノ
糸貫公民館



土貴野神社西の忠魂堂に
中島武市胸像
銘板は大野伴睦書
鳥居・忠魂堂なども寄付

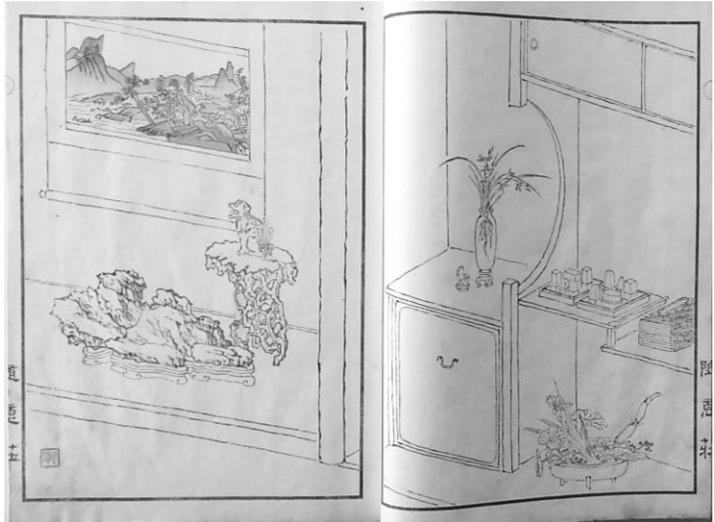
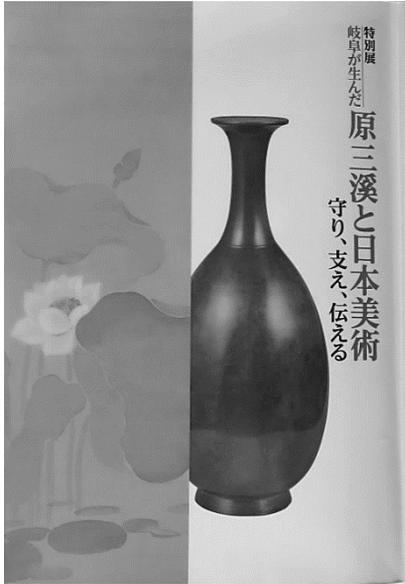


二宮尊徳像
土貴野小学校

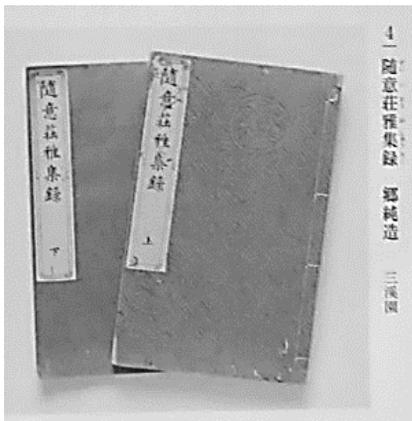
純造と原三溪の接点

図録【特別展 岐阜が生んだ原三溪と日本美術】
 三溪園所蔵
 発行 2014年 原三溪展実行委員会

原三溪は横浜の三溪園に室が3ヶ所あり
 その一つにこの純造の室と同じ物を造ったそうだ ↓

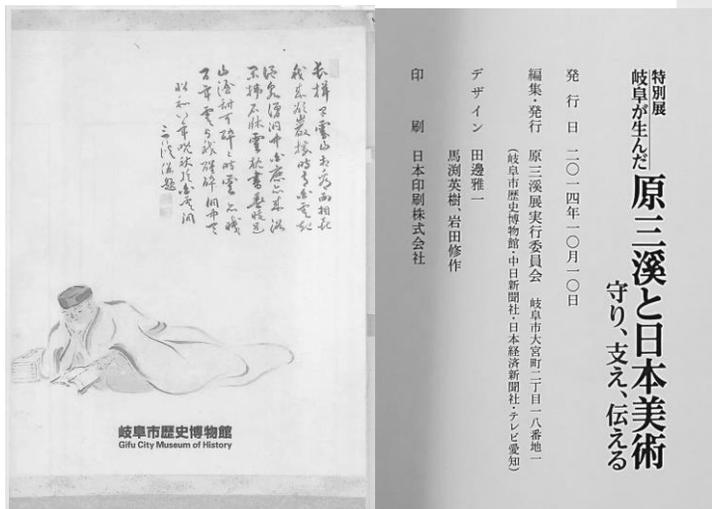


純造 大蔵省退官記念(63才)の煎茶席の図鑑
 「随意荘雅集録」郷純造著より



「随意荘雅集録」郷純造著
 三溪園所蔵

4 随意荘雅集録 郷純造 一冊
 明治三十二年(一八八九) 二七・七×一七・八 三溪園
 黒野村(現：岐阜市)の出身で、大蔵官僚であつた郷純造が、明治二十一年(一八八八)に退官記念として開催した煎茶席の図録、いわゆる茗讌図録である。幕末から明治にかけ煎茶が流行し、大寄せの茶会が盛んに催されたが、茗讌図録はその時に出された茶道具の名称や図などが掲載された小冊子で参会者に配られたものである。この茶会が開かれた時、三溪は二二歳で、この図録の入手方法も不詳であるが、三溪の文人趣味、煎茶好みを示す資料である。後に妻となる原屋寿が籍を置いた跡見学校校長で文人画家の跡見花蹊の誘いにより参会した可能性が指摘されている。



岐阜市歴史博物館 著

第66号

平成27年10月10日 発行



中山道加納宿

発行所
中山道加納宿文化保存会
各務原市鶴沼東町8丁目26
発行人 尾関孝彦
(電058-384-7100)
印刷所 三進社
(電058-245-3624)

関係分抜粋

黒野村の銀行

郷 和彦

黒野村（現岐阜市黒野）に、かつて三つの銀行が存在した事はあまり知られていない。その銀行とは、十六銀行、蘇原銀行、そして北方銀行の三行である。これらの銀行が如何なる道を辿ったのか、その一盛一衰を探ってみた。

一、十六銀行

イ、頭取・渡辺甚吉の苦悩

明治十年十月一日に開業した国立十六銀行は、全国に出来たナンバーバンク、百五十三行の一つで現在の（株）十六銀行の前身である。この時、若き初代頭取・渡辺甚吉（二十三）は生みの苦しみを味わうことになる。とは知る由もなかった。

翌十一年五月三十日資本金を五万円から十万円に増資した。八月八日、大蔵省銀行課長岩崎小二郎は検査のため来岐し、松屋町にある頭取の弟・渡辺寅吉の自宅兼店舗に入った。生憎、頭取は出張中で、上松武次郎支

配人が対応した。

しかし数ヶ月前に岩崎の部下遠藤敬止の下検査を受けており万全であると望んだが、五万円の準備金のうち、実に四万二千七百円の不足金が発覚した。検査は延々九時間におよび、岩崎課長は不都合を叱責し早急に善処するよう指示して検査は終了した。

十月二日、岩崎課長は状況を危惧し部下の外山脩造らを、大阪出張の途上十六銀行へ立ち寄らせた。だがまたもや「準備金九千円余の不足と、金銀有高でも一万一千円余の不足あり」、との報告を、岩崎課長は外山から受けた。

二度にわたる検査の不合格に岩崎は「最早我々の知るところに非ず」と見限った。

ロ、渡辺頭取の嘆願

十月十一日、渡辺頭取は一人上京し岩崎課長宅を訪い、検査の不都合を謝罪した。

しかし、「私に於いて保護すべき道は何もない、国元へ帰る何分の沙汰ある迄待つべし」と、岩崎は言下に突き放した。

翌十二日、渡辺は岩崎課長を再訪し、大蔵卿・大隈重信あての願書を持参し懇願したが却下された。身体極まった渡辺頭取は、最後の頼みの綱、国立第一銀行の渋沢栄一頭取に救いを求めた。渋沢は十六設立時から指導を仰いだ言わば師匠である。大隈大蔵卿に渋沢は次の書翰を認めた。

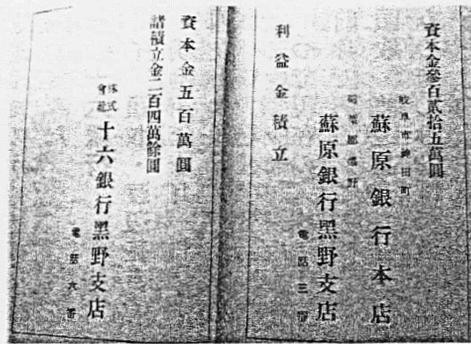
「銀行課の検査で不都合が生じ鎖業などの譴責があるのではないかと心配の余り小生より内々嘆願してくれる様に申し出があった。私情をもって憐憫を乞うわけではないが、頭取の渡辺甚吉は岐阜の豪商で業務も良く務めている。（中略）過分の懇願ではあるが、同行の心情を察すると黙止に耐えかねて実情を申し述べお取り計らいを願う次第である。」この渋沢の仲介が功を奏し、翌明治十二年三月資本金増加証書を受ける事ができた。

ハ、十六銀行黒野支店

明治三十五年九月一日、犬塚に出張所を設置した。その後黒野・南町矢野方西に、黒野派出

所として移転した。大正十四年十六銀行黒野は支店に昇格し、昭和と平成の激動期を乗り越えてきた。

平成二十四年、岐阜銀行（旧岐阜相互銀行）を吸収合併し、現在に至っている。



黒野尋常高等小学校 同窓会員名簿より (昭和3年発行)

二、蘇原銀行黒野支店

明治三十四年三月二十一日、蘇原村の有志三名が発起人となり、資本金六万円で古市場に、蘇原銀行が設立された。その後業務の発展に伴い、本店を岐阜市神田町に移し、旧本店はそのまま蘇原支店とした。

大正七年五月、黒野村に支店を設けた。世は、欧州戦乱好況

時代で業務を拡大し、昭和初年資本金を三百二十五万円に増資され、地方大銀行に発展した。

しかし、昭和二年二月からの金融恐慌により、銀行の危機が叫ばれ始めた。同四年、「取付騒動」が蘇原銀行にも波及し、同五年、銀行停止処分となり、同七年、倒産そして閉鎖された。

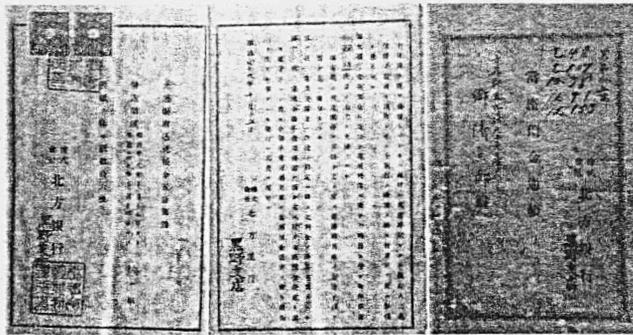
かつて、村の古老から「取付け騒ぎの時は預金者が殺到し、道路まで人が溢れて、それは大変だった」と聞き及んでいる。その建物は確か昭和三十年代頃まであり、大正ロマンが香る、瀟洒な造りの洋館だった。

三、北方銀行黒野支店

明治十五年四月、北方銀行は資本金三万五千二百円で開業した。最初は、林紀一郎氏の西の座敷で始めたがその後、鳥羽町へ移転された。続いて支店を黒野村と岐阜町に、梅原村に出張所を置いた。その時期は明治二十年頃ではないかと思われる。

その後、大正七年五月、愛知銀行に営業譲渡され六月、北方

銀行は解散された。同十二年五月、愛知銀行北方支店は、蘇原銀行へ譲渡されている。その蘇原銀行は昭和七年破産をした。



北方銀行黒野支店預金通帳 (筆者蔵) (明治29年10月15日発行)

おわりに

十六銀行の頭取、渡辺家は江戸時代から続く豪商で、代々織物業を営み「織甚」と呼ばれた。他に酒造業をも営み、加納藩の御用達商人として、城中への出入りが許されていたという。

渡辺は大正十一年に退陣するまで、四十五年の間、頭取を勤

め上げた。だがその三年後甚吉は七十歳で永眠する。

黒野村に最初に出来た銀行は、明治二十年ころの北方銀行で同三十五年の十六銀行、次いで大正七年の蘇原銀行であった。

参考文献・渋沢栄一伝記資料

- ・十六銀行百年史(1978発行)
- ・蘇原の歴史(1984発行)
- ・北方町史通史編(1982発行)
- ・岐阜 黒野史誌(1987発行)
- (黒野城と加藤貞泰公研究会 副会長)



関係分抜粹

一財界の世話役一

郷 誠之助

郷 和彦

生い立ち 父純造のこと

元治二年（一八六五）郷純造の次男として美濃国方県群黒野村（現・岐阜市黒野）に生まれる。当時大坂町奉行・松平勘太郎（信敏）の家老を勤めていた父純造の元へ届けられる。

慶応二年（一八六六）純造は

三年の家老職を辞し、江戸に上り御家人株の売りを待った。が売り物がない。千葉の成田山に参籠し断食祈願をした。すると撤兵隊園弥平から売りがでた。大政を奉還した幕府から、辞令がおりたのである。

撤兵 園 弥平

右病気に付願之通御暇申渡す

郷 純造

右弥平跡番代並撤兵申渡す

辰正月

江戸幕府最後の幕臣として、末席に名を連ねる事が出来た。だがその後間もなく、幕府は瓦解した。

明治維新（一八六八）

誠之助は、四歳で維新を迎える。父純造は大隈重信等の推挙で会計事務局（後の大蔵省）に出仕する。殆どが薩長土肥で占める中異例のことであろう。麹町へ移り誠之助は番町小学校に入学する。この頃から餓鬼大将で、暴れん坊となり手に負えない少年となる。明治十年、十三歳の時、仙台中学に学ぶが、二年で退学となる。

無銭旅行

十六歳の秋、突然「心の修養のため」と、仲間三人で東海道を西へ無銭旅行に出た。途中親の名を語り静岡県令・大迫貞清に金を無心する。手に入れた十円を分け、二人と別れ自身は生まれ故郷黒野村へ帰る。在所の人は大変驚き、歓迎をする。



無銭旅行で生家黒野へ16才（郷誠之助君伝より）

所がその事が父親の耳に入り逆鱗に触れ、遂に勘当される。その後、十九歳で東京帝国大学法学部専科に入学する。

ドイツ留学

明治十七年、二十歳の誠之助は横浜港より、大山巖陸軍卿の一行と同道にドイツ留学の途に就いた。留学先の地ハイデルベルクやハルレで経済学や哲学を学ぶ。遊蕩もしたが、哲学博士

の学位を取得する。約七年半の

留学を終え明治二十四年十二月、無事帰朝する。帰国後伊藤博文公へ出向き産業統計の必要性を熱心に具申した。すると、陸奥宗光が大臣を勤めている、農商務省の囑託に任じられる。

森鷗外・独逸日記

留学中森鷗外と出会う。鷗外の「独逸日記」明治十八年十二月二十四日。

『郷誠之助と相見る。ハルレに在りて経済学を修む。會て津城とハイデルベルヒに同居したりしことある故、此祭日にも亦津城を訪へるなり。快濶の少年にて、好みて撞球技を為す』。（「津城」は宮崎道三郎の号）

実業家時代

明治二十八年（一八九五）、初代・川崎八右衛門の口利きで業績不振の、日本運輸の社長に就任した。誠之助三一歳、実業家として、第一歩を踏み出す。その間、日本メリヤス、日本鉛管、入山採炭（後の常磐炭鉱）等の再建、整理に務める。

特に明治三三年、社長に就任した入山探炭は不振にあつた。改革や整理を地道に続け、業績は向上し配当を出せるようになり、徐々にその力量が認められるようになる。

もう一つは明治三五年、経営の危機に瀕していた王子製紙の再建で、渋沢栄一の強い要請を受け、北海道苦小牧に、工場の建設など再建に成功する。



誠之助75才郷浩へ贈る
(筆者蔵)

その他、日活、東京電灯の統合経営、帝国商業銀行、日本醤油等三十数社に及んだ。また七十を数える要職に名を連ねた。

- ・東京株式取引所理事長
- ・日本商工会議所会頭
- ・東京商工会議所会頭
- ・日本工業倶楽部専務理事等。

番町会

大正十年頃、郷誠之助の徳望を慕う財界の後輩たちが、麴町番町にある私邸で、月に一度食事をし乍ら、世情や経済のことを語り合う、言わば若手の勉強会である。

主な会員は、

- ・永野謙・岩倉具光・河合良成・渋沢正雄・後藤国彦・中島久万吉・伊藤忠兵衛・中野金次郎・正力松太郎・松岡潤吉・金子喜代太・小林中。準会員として・小林一三・根津嘉一郎・堤康次郎・五島慶太など。

悲恋

誠之助十六歳の春、真剣に恋した女性がいた。近所の学校の先生方へ出入りする中村のぶ子と言う一つ下の女性だ。二人は惹かれあい永遠の契りをした。所が三年後、悲劇的な結末になるうとは、誰も知る由もなかった。それは京都の新島裏に学び、帰京して間もなくのことだった。

彼女は叔父・岩崎小二郎宅で

世話になり、花嫁修業中の身であつた。折しも姪・のぶ子に、結婚話が持ち上がり「良縁」と叔父は薦めた。のぶ子は誠之助とのことを打ち明ける。

激怒した叔父は、のぶ子を家元の佐賀へ帰してしまふ。悲恋を愁いたのぶ子は、最後の手紙を誠之助に認め、その後飲薬し矢鱈十八の命を断つた。

晩年、ある側近が誠之助に、「生涯独身を通したのは、例の一件からですか？」と尋ねると首を軽く横に振り、遠くに視線をやつて目をつむつたそうだ。

最晩年知人に頼み、のぶ子の墓を探して貰つた。誠之助は、「直ぐにでも墓参りに」と思案をしたが叶わなかつた。

前述の、岩崎小二郎は、前号(六六)拙稿「黒野村の銀行」で十六銀行の増資検査で来岐した銀行課長で「十六銀行鎖店止む無し」と叱責した人で郷純造は大蔵省の上司である。

あとがき

財界の世話役と呼ばれるようになったのは、恐らく王子製紙

を軌道に乗せた、明治三五年頃からであろうか。

特に入山探炭では業績が上がリ大正六年、三〇万円の退職金が出たが、自身は二万円のみで後は社員等に全て分配をした。

放蕩息子と揶揄され、それでも遊蕩児を押し通した男も、約七年半の留学で人生観が変わり三〇歳を超え心機一転、実業界に身を置き、私利私欲を持たず常に論理的な観点で物事を見つめ、実業界をリードして来た。

そんな誠之助も病には勝てず昭和十七年、七十八歳の生涯を終え、青山墓地の父母の横に眠る。正三位勲一等陸叙。男爵。尚、誠之助は小生の曾祖父・清三郎と従弟で純造は叔父である。

参考文献

- ・財界随想 一九三九年発行
- ・郷誠之助君伝一九四三年発行 (本会員)

か が み けん きち ひ ら お は ち さ ぶ ろ う

各務鎌吉と平生釰三郎

かんぼう

『管鮑の交わり』＝東京海上保険を救う＝

二人の生い立ち～入社まで



各務鎌吉

「各務鎌吉君を偲ぶ」より

各務鎌吉 1868～1939 (明治元年～昭和 14 年) 岐阜県方県郡蘆鋪 (あじき) 村 (現岐阜市安食) の小地主・父省三と母鉄の次男として生まれる。1877 (明治 10 年) 一家は東京へ出る。父母と兄の幸一郎、姉の幾保^{※1}、鎌吉の 5 人である。省三は同郷の郷純造 (1825～1910) の紹介で大蔵省駅逋寮 (郵便局) の下級官吏になるが生活できず、葉茶屋を開業した。鎌吉たちは学校から帰ると茶箱を背負って行商した。なお、鎌吉は父が東京へ移すとき「謙吉」を誤って記入したという。鎌吉は芝の小学校に転向→東京府中学 (現日比谷高校) →1888 (明治 21 年) 東京高等商業学校 (現一橋大学: 渋沢栄一が創立に尽力) を首席で卒業。高校の教師などを経て、母校・矢野二郎校長の推挙で東京海上保険 (現東京海上日動火災保険株式会社) に入社する。



平生釰三郎

「平生釰三郎自伝」より

平生釰三郎 1866～1945 (慶応 2 年～昭和 20 年) 美濃国加納町 (現岐阜市加納) 加納藩永井家の名門・田中時言 (ときのり) と徳子の三男として生まれる。その後幕府は瓦解し時代は明治となる。田中家も藩主から三百年与えられて来た俸禄も途切れ、手元に届いた約七百円の公債証書がその代償だった。子女 10 人を抱え、加納傘の骨を削って天神町の傘屋に納める内職が辛うじて生活の支えになっていた。釰三郎は加納小学校を卒業→岐阜中学 (現岐阜高校) に入学するも 50 銭の月謝が払えず 1 年余で自ら退学を決める。

1880 (明治 13 年) 5 月 15 歳の釰三郎は長兄譲を頼り上京する。翌年 3 月東京外国語学校の難関を制し、月 5 円の給費生として入学する。

その内訳は 3 円が賄費 50 銭が舎費、残りの 1 円 50 銭が文房具費その他小遣である。この残金を貯め故郷への往復交通費 (約 5 円) とした。1885 (明治 18 年) 5 月外国語学校が廃校 (後復活) になり、東京商業学校語学部に編入。→翌年東京高等商業学校に入学。この時平生忠辰の婿養子となる。1890 (明治 23 年) 7 月釰三郎 25 歳同大学を首席で卒業。→同大学助教諭→翌年韓国仁川海関幫弁 (=税関) →1893 年兵庫県立神戸商業学校校長→1894 (明治 27 年) 7 月平生もまた矢野二郎校長の推挙で東京海上保険に入社する。

東京海上保険 運命共同体

1878 (明治 11 年) 5 月 13 日「東京海上保険会社」創設の為関係者一同は第一国立銀行にて、頭取・渋沢栄一より会社創立に関する説明会が開催された。翌明治 12 年 8 月開業した東京海上は頭取 (社長) に蜂須賀茂韶を据え、毛利元徳、伊達宗城、徳川慶勝、池田茂政、そして岩崎弥太郎^{※2}らが取締役の名を連ねた。この顔ぶれを見ても士魂は有っても商才は

なさそうである。殿様商売と揶揄され経営は苦しくなっていた。1891（明治24年）大株主で取締役の岩崎弥太郎は打開策の一つとして、我が社三菱の大番頭・**荘田平五郎**（後取締役会長）を取締役として送り込んだ。荘田は内情が直ぐ解った。早速支配人の**益田克徳**（兄は三井物産社長・**益田孝**）に有能で実行力のある人材を頼んだ。予て知人の東京高商・**矢野二郎**校長に打診した。そこで入社して来たのが**各務謙吉**^{※3}（24歳）である。謙吉は生まれ持ったアナリストであった。彼は具に分析を開始した結果1894（明治27年）**ロンドン**に赴任することになり、あと釜に**平生鈇三郎**（29歳）に白羽の矢が立ったのであった。二人は正に心の糸で結ばれた運命共同体である。同27年**渋沢栄一**取締役に就任する。その後、1917（大正6年）二人は揃って**専務取締役**^{※4}に就任。大正14年平生鈇三郎（60歳）は軌道に乗った東京海上を辞し**甲南学園**の理事長に就任し幼稚園・小中学校を設立後**七年生高等学校**^{※5}を設立した。その間1934（昭和9年）に**甲南病院**を開院しその理事長に就任した。

1933（昭和8年）3月平生鈇三郎は日本商工会議所会頭**郷誠之助**（1865～1942）から**川崎造船所**（和議申請）の社長を懇請され約2年で再興させた。又昭和11年3月広田内閣の文部大臣に就任した。郷里の加納町では盛大なお祝いをして皆喜び合った。

1942（昭和17年）郷誠之助の葬儀に、総理大臣陸軍大将・**東篠英樹**、藤原銀次郎、結城豊太郎、**平生鈇三郎**そして商工大臣・**岸信介**らが参列した。葬儀委員長は**池田成彬**（1867～1950）で参列者は千五百有余人に及んだ。（郷誠之助君伝 839頁参考）その3年後平生は逝去した。享年80歳。



加納天満宮神殿前の大燈籠は田中時言、

平生鈇三郎の献燈 大正15年7月建立

2021年6月26日 河口撮影

- ※1. 因みに謙吉の姉**幾保**は**森春涛**の息子**槐南**に嫁す。又、黒野の**国島雅敬**（1819～1877）の妹**勢以**（清子）は**森春涛**に嫁し、**雅敬**へ**各務省三**の妹**美知**が嫁いでいる。
- ※2. 海運事業の**岩崎弥太郎**は自社に海上保険会社の設立を政府に打診していたが却下されている。
- ※3. **各務謙吉**は**荘田平五郎**の仲介で**岩崎弥太郎**の妹・**佐幾**夫婦の四女**繫尾**と結婚。郷誠之助の弟**豊弥**（旧名昌作）は弥太郎の養子となり姻戚関係にある。
- ※4. 1925（大正14年）各務謙吉は専務取締役に取締役会長に→終生勤。平生（60歳）は退職す。
- ※5. **各務謙吉**は**平生鈇三郎**が退職の時衝突していたが、平生が経営する**甲南高校**の基金の中へ友情の記念として金10万円を10カ年賦をもって寄贈した。（「平生鈇三郎」545頁参考）
- ・**各務謙吉**は日本人実業家として始めて米雑誌「**TIME**」（1931年5月18日）の表紙を飾る。

《参考文献》

- ・「東京海上火災保険株式会社六十年史」昭和15年10月25日発行
- ・「各務氏の手記」と「滞英中の報告及び意見書」昭和26年5月20日発行
編者：稲垣末三郎 発行所：東京海上火災保険株式会社
- ・「平生鈇三郎」昭和27年5月22日発行 著作者：河合哲雄 発行者：拾芳会
- ・日本経済新聞 各務謙吉 2000年（平成12年）12月18日（月曜日）掲載
- ・岐阜新聞 ぎふ人物伝 実業界の巨人各務と平生 2009年8月1日掲載
- ・「各務謙吉君を偲ぶ」財団法人 各務記念財団 昭和24年5月27日発行
- ・「平生鈇三郎自伝」財団法人 名古屋大学出版会 1996年3月20日発行

郷 和彦 記

// 文献・調査

郷純造・誠之介の書翰・著書

国立国会図書館サーチ(NDLサーチ)の検索サービスより

タイトル	著者 編者	出版社	出版年月日等
郷純造 142件			
書翰			
大隈重信関係文書	郷純造 95通		明治2年5月～明治21年12月
井上馨関係文書目録	郷純造書翰 17通		
三島通庸関係文書目録	郷純造書翰 6通		
勝海舟全集 別巻 (来簡と資料)	郷純造書簡		
吉田清成関係文書	郷 純造		
渡辺国武宛(主計局長)	郷 純造		
史料			
戸籍寮取調事項概略報告書 [書写資料]	戸籍権頭郷純造		1872年 明治5年11月28日
負債課取扱処分未済件名簿 [書写資料]	郷純造		1873年 明治6年5月5日
戸籍寮取扱処分未済件名簿 [書写資料]	戸籍権頭郷純造		1873年 明治6年5月3日
米穀売買ニ関シ大蔵省・三井組・東洋銀行間受渡約定書 [書写資料]	大蔵大丞郷純造等		1876年 明治9年3月
書籍			
松石山房印譜 巻1-6	郷純造 編	郷純造	1883年 明治16序
松石山房印譜 続集 巻1-8	郷純造 編	郷純造	1883年 明治16-29序
随意荘雅集録	郷純造 著	郷純造	1889年 明22.12
随意荘雅集録 上・下合本	郷純造 著	郷純造	1889年 明22.12
随意荘題詠余集 上随意荘十二勝題詠	郷純造 編	郷純造	1897年 明30.2
随意荘題詠余集 下	郷純造 編	郷純造	1897年 明30.2
不動尊の靈験		不動全集刊行会	1941年 昭和16年
松丸東魚蒐集印譜解題	高山節也 著	二玄社	2009年
日本美術画報 初篇(11)	郷純造君藏	画報社	2010年 9/30

郷誠之助 700件

書籍			
製鉄所視察余録	郷誠之助 著	郷誠之助	1918年
小口落解禁に就て	郷誠之助 著		1920年 大正9年
金解禁に就て	郷誠之助 著	郷誠之助	1929年 昭和4年
財界不況事情	郷誠之助 著	東京商工会議所	1931年 昭和6年
郷誠之助の正体	太田義孝 著	東亜書房	1936年 昭和11年
日本経済の進路と其の指導精神	郷誠之助 述	ダイヤモンド社	1936年
人間・郷誠之助	野田礼史 著	今日の問題社	1939年 昭和14年
財界随想	郷誠之助著・帆足計編	慶応書房	1939年 昭和14年
経済新体制確立要綱ニ対スル意見	郷誠之助 著		1940年
財界我観	郷誠之助 著	慶応書房	1941年 昭和16年
会頭としての郷誠之助--私の人物評-2-	渡辺 鏡蔵 著	東商	1951年
番町会の大親分・郷誠之助	石川 梯次郎 著	人物往来	1955年
日本悲恋物語 死に結ぶ愛のきずな	村松梢風 著	清和書院	1958年
実業界に志す青年に与う	郷純造 著 論文	人物往来	1965年
男爵郷誠之助君伝：伝記・郷誠之助		大空社	1988年
郷土に輝く先人	岐阜県	岐阜県	1991年
近代日本の起業家たち(第11回) 郷誠之助	鹿島 茂 著	富士総合研究所 編	2000年
動向 先人顕彰事業 郷誠之助・牧野英一展	山本明道・所久男著	岐阜県歴史資料館報	2002年
極道：小説・郷誠之助	小島直記 著	日本経済新聞出版社	2012年

藩債処分・・・幕末諸大名の借金顛末記

服部 高信 記

はじめに

幕末諸大名の債務即ち藩債は、相当の額に達していたと思われる。徳川幕府崩壊後、その藩債はどのような展開をしたのか又どのように承継・切り捨てされたのか、兼ねてから関心を抱いていた。ついでに、藩債処分について若干ながら、考察してみた。

1 廃藩置県の断行

明治新政府は、明治2年6月諸侯が領地と人民の支配権を朝廷に返上する版籍奉還を実施した。旧藩主を知藩事に任命し、藩主の領土権は、否定され、家禄は実収石高の10分の1とされた。明治4年7月廃藩置県により、260年以上続いた幕藩体制による支配は終焉した。

「大蔵省百二十年史」よれば、藩の租税徴収権は、政府の掌握するところとなった。・・・中略・・・それは、藩札・藩債整理・秩禄処分等諸藩の難物を肩代りしたため、政府財政建直しは再びここにおいて以前にもまして緊急事となった。

2 藩債の整理

廃藩置県後、政府は何らかの解決方法をとらざるを得なくなった。明治4年7月、府県に対して藩債書類の提出と諸藩の負債額の報告を求め、翌11月債権者に対して証文等証拠書類と債権額の申告を求めて、藩債処分の準備を進めた。

明治5年3月、公債採否の技術的標準を決し、その後1年を経て明治6年3月3日にその処分方策を公布し、同月25日に新旧公債証書発行条例を発行した。

処分内容は次の通りである。

藩債一覧（国史大辞典より）

- ① 天保14年前の旧藩債は全部棄損（古債）
- ② 弘化元年より慶応3年迄、藩用に借入したる金穀は公債となし、明治5年より無利息50ヶ年賦償還（旧債）
- ③ 明治元年より同5年迄、右同断の負債は公債となし、明治5年より四分利付、3ヶ年据置、25ヶ年限り償還（新債）

種 類	藩 数	金 額
内 債 額	新 債	246 12,820,216
	旧 債	228 11,220,841
	即 債	50 707,573
	租 税 債	202 3,680,002
	官 金 債	250 6,435,949
	小 計	276 34,864,582
外 債 額	古 債	206 12,025,981
	幕 債	131 2,657,803
	私 債	24 2,372,040
	債 券 返 上	57 501,494
	空 債	17 483,226
	兼 債	254 14,977,026
	宿 債	23 2,501,443
古 借 済 利	207 3,747,273	
小 計	271 39,266,291	
合 計	277 74,130,874	
外 国 債	公 債	34 2,801,306
	私 債	22 887,144
	減 高	28 313,601
合 計	37 4,002,052	
総 額	277 78,132,927	

総藩債は277藩で78,132千円、その内、内国債は74,130千円、外国債は4,002千円である。同条例が発行された明治6年の国家予算の歳入85,507千円の91%にあたる。

政府引受の内国債34,864千円は申告額の47%であるが、旧債11,220千円（無利息、50ヶ年賦償還）は実質切捨てら

明治財政史編纂会編「明治財政史」8、大蔵省編「(明治前期)財政経済史料集成」9による

れたことと同断である。結局、総藩債の内、32%が承継され、68%が切捨てされたことになる。

全部棄損とされた古債の天保14年以前とは、天保14年12月14日発令の「無利子年賦返済令」のことであり、北原進著「江戸の高利貸」によればその骨子は次の通りである。

- ① 従来、札差が旗本らに貸出し、未払いのままになっている債権は、新古の差別なくすべて無利子とする。元金の返済は、原則として20年
- ② すでに利子を下げ、年賦にした借金口があれば、これも無利子、元金は知行高100俵について年に1両2分ずつ返済すればよい。

3 大蔵官僚 郷純造の対応

郷純造は、岐阜市黒野村の出身、幕臣でありながら明治新政府に奉職

明治5年2月負債取調係 明治6年10月旧藩負債取調専務 明治10年1月国債局長を経て
明治19年3月大蔵次官 男爵

明治文献資料刊行会発行の「明治前期財政経済史料集成第九巻」がある。その中の藩債輯録には277藩ごとの負債額の詳細を72ページあたり計上している。その刊行にあたり、明治10年国債局長郷純造は藩債輯録題辞を寄せている。藩債整理の担当官としてその経緯が述べられており、一部 紹介したい。

先ず、第一に藩債の起因は諸藩の政令を異にし、理財においては、その法百般しかして風俗浮華に流れて競って弊習を追い、出入計なきに至る。その不足を官庫に仰ぎ、富農豪商に借り、或いは、外国に求めた結果、その積債数万より百萬に越える者があった。(別紙 表2)

明治2年6月、旧藩主を知藩事とし、三府七十二県となし、各々職を解きて東京に帰る。然して人民未だ旧藩債支消の方如何なるかを知らず、危疑周章(危ぶみあわてふためく)これが為に財政一時雍塞した。明治4年11月277藩の負債を計査し、支消する方を議して人民旧藩吏に告げて証券簿籍を徴収した。

本省に負債掛を設け、ひきついで国債寮を置き、その任に当たった。然してその事たるや新旧紊乱元利錯綜、面糾質叩するわけにいかず、藩吏を呼び債主に立会い、問い糺して原由を解き明かした。これが為に拮据奔走するに満5年かかり、なし終えた。

おわりに

藩債の整理にあたり、総藩債の68%が切捨てられた。その背景として、寛政元年の棄捐令(旗本・御家人負債免除)、更に天保14年の「無利子年賦返済令」の延長線の処置であると考えられる。これについて高橋亀吉はその著書の中で

「旧藩債整理方針は、要するに、徳川時代において幕府及び諸侯が、商人からの債務に対し、返済能力不能に際にとってきた仕来りを踏襲したものを、露骨に方針化したものとみなすべき性格のものである」(日本近代経済形成史第一巻)

落合弘樹氏は「秩禄処分」の中で大蔵官僚側の対応として

「何ら生産することなく家禄のみに頼って生きる華士族は、大蔵省にとって「無用の人」と位置づけられた。大蔵官僚は理財第一であり、また国債頭の郷純造など早々に禄を失った旧幕臣のエリートなどは、自立できない旧藩士族を冷めた目で見ていた」

しかしながら、財政基盤の脆弱な中で、藩札・藩債整理・秩禄処分等の難題を抱える大蔵省にとり止むを得ない処置でもあった。

士農工商という階級社会にあって、経済即ち金銭にかかわる「商」は、卑しいものとみる傾向があった。幕府行政の要である「三奉行」寺社奉行・町奉行・勘定奉行のなかでも、経済を担当する勘定奉行のポストは最下位に置かれている。(大石慎三郎「将軍と側用人」)

貨幣の計算は下役人に委ねられた。多くの藩において財政は小身の武士もしくは御坊主によりて掌られた。(中略) 一貫して理財の道を卑しきもの・・・道徳的および知的職務に比して卑しきものと看做すことを固執した、(新渡戸稲造著「武士道」)

長岡藩国家老の娘であった杉本鉞子は、その著書「武士の娘」の中で、「武家育ちの父は、商売について全く無智でした。それに金銭にかかわることは、武士の恥辱と見るならわしもありまして・・・」

武士の恥辱とみる金銭感覚を根底にもつ武士階級において「理財において・・・出入計なきに至る」ことになり、又、経済を蔑視した武士階級の体質が膨大な藩債の要因の一つでもあったと考えます。

(令 2/7/31)

参考文献

- | | | |
|-------------|---------------|---------|
| 明治文献資料刊行会 | 明治前期財政経済史料集成 | 第九卷 |
| 経済懇談会 | 大蔵省百二十年史 | |
| 日本銀行統計局 | 明治以降本邦主要経済統計 | 並木書房 |
| | 岐阜県史 通史編近代上 | |
| 高橋亀吉 | 日本近代経済形成史 第一卷 | 東洋経済新報社 |
| 中村 哲 | 明治維新 | 集英社 |
| 落合弘樹 | 秩禄処分 | 講談社学術文庫 |
| 北原 進 | 江戸の高利貸 | 吉川弘文館 |
| 在団法人 郷男爵記念館 | 男爵 郷誠之助君傳 | |
| 大石慎三郎 | 将軍と側用人の政治 | 講談社現代新書 |
| 新渡戸稲造 | 武士道 | 岩波文庫 |
| 杉本鉞子 | 武士の娘 | ちくま文庫 |
| | 国史大辞典 | |

表1 美濃国諸藩の藩債一覧

単位 円

		大垣藩	郡上藩	加納藩	高須藩	岩村藩	今尾藩	野村藩	苗木藩	高富藩
内国債	公債合計	384,010	86,358	134,706	18,203	21,794	65,825	4,909	27,343	58,065
	新債	109,736	9,404	2,592	1,037	5,358	39,549	2,538	3,426	32,862
	旧債	182,481	47,034	49,635	5,624	10,428			22,235	8,090
	即償債	9,002								
	租税債	10,124	9,770	72,164			14,576		478	10,788
	官債	72,667	20,150	10,315	11,542	6,008	11,700	2,371	1,204	6,325
削除債	削除合計	117,796	141,243	39,063	34,013	50,072	80,789	6,091	36,005	183,265
	古債	63,207	48,564	21,673	15,615	9,687			812	30
	幕債		28,336	14,348		4,577			12,107	1,092
	私債								2,987	157,244
	空債							5,000		
	棄債	5,529	39,685	3,142	18,138	30,008	16,927	1,091	16,733	22,978
	宿債						63,395			
	古債滞利	49,060	24,658		260	5,800	467		3,366	1,921
総計	501,806	227,601	173,769	52,216	71,866	146,614	11,000	63,348	241,330	

出展 「明治前期財政経済史料集成 第九巻」 藩債輯録より作成

岐阜県史 通史編近代上 p9による明治政府公定の旧藩札価格新貨比較表による新円に換算した額

高富藩の外国債7577円と郡上藩の外国債16598円は省略

表2 藩債一覧表(藩別) 降順

単位 円

藩名	石高(万)	公債	削除債	外国債	合計
名古屋藩(尾張)	61.9	1,241,622	2,884,754		4,126,376
秋田藩(羽後)	20.5	1,405,155	1,192,145	508,597	3,105,897
津藩(伊勢)	32.3	1,440,341	1,049,367	254,880	2,744,588
和歌山藩(紀伊)	55.5	1,339,200	752,240		2,091,440
福岡藩(筑前)	52.3	1,174,068	910,065	1,911	2,086,044
金沢藩(加賀)	102.5	1,292,981	506,580	188,537	1,988,098
山口藩(長門)	36.9	820,868	1,117,959	1,671	1,940,498
広島藩(安芸)	48.5	903,695	891,955	46,170	1,841,820
久留米藩(筑後)	21	77,903	1,403,797		1,481,700
鹿児島藩(薩摩)	86.9	244,710	1,076,489	96,905	1,418,104

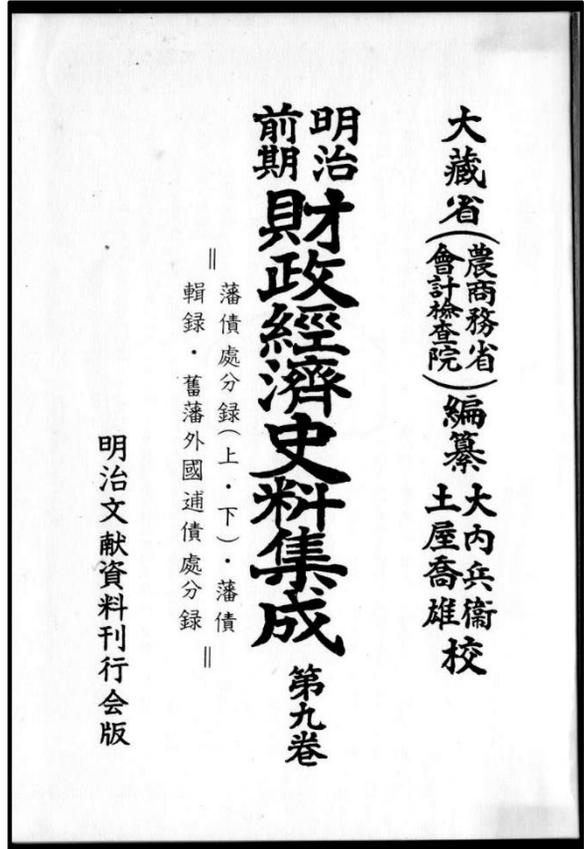
表3 藩債一覧表(藩別) 昇順 単位 円

藩名	石高(万)	公債	削除債	外国債	合計
長岡藩(越後)	2.4	80			80
高松藩(讃岐)	12	220			220
喜連川藩(下野)	0.5	931			931
一関藩(陸前)	2.7	1,101			1,101
吉井藩(上野)	1	2,150			2,150
佐野藩(下野)	1.6	2,306			2,306
完戸藩(常陸)	1	2,740	1,655		4,395
多度津藩(讃岐)	1	5,723			5,723
鹿島藩(肥前)	2	6,140	130		6,270
館山藩(安房)	1	4,335	3,250		7,585

出展 表2表3「明治前期財政経済史料集成 第九巻」 藩債輯録より作成

「明治前期 財政經濟史料集成 第九卷」 藩債輯録
 1963年(昭和38年)9月発行
 大蔵省編纂 明治文献資料刊行会版

岐阜県図書館蔵



昭和三十八年九月二十一日発行

明治前期財政經濟史料集成 第九卷

編者 大内兵衛

発行者 藤原正人

印刷者 湯島印刷株式会社

東京都文京区湯島三組町五六番地

電話 (332)・六四〇一

振替口座・東京三六二九〇番

明治文献資料刊行会

東京都千代田区神田三崎町二丁目五番地

【第九回配本】
定価二、九〇〇円

乱丁・落丁のものはおとりかへいたします。

菊川製本株式会社

藩債輯録題辭

夫レ藩債ノ起因タルヤ我邦中世封建ノ制タリシヨリ諸藩政令ヲ殊ニシ、故ラ理財ニ於テハ其法百般、而シテ輓近風俗浮華ニ流レ競テ弊習ヲ追ヒ出入略々計ナキニ至ル。其不足ノ用百方相救ヒ遂ニ之ヲ官庫ニ仰キ、又ハ富農豪商ニ借リ、或ハ外邦ニ求ム。其積債數萬ヨリ乃至百萬ニ越ル者アリ。

維時慶應三年十二月 帝室再ヒ政權ヲ復シ、乃チ官省ヲ置キ職制ヲ定メ、凡ソ百ノ典謨矯革振興スル者勝テ數フヘカラス。諸藩モ亦世勢ノ趣ク所ヲ察シ其版圖ヲ奉還セント謂フ者日ニ相望ム。明治二年六月皆之ヲ允シ詔シテ府藩縣政令ヲ一ニシ、舊藩主ヲシテ姑ク知藩事トス。尋テ之ヲ廢シ更ニ三府七十二縣トナシ、各々職ヲ解テ東京ニ歸ル。是ニ於テ封建全ク廢シテ土地人民盡ク一統ス。然リ而シテ人民未タ舊藩債支消ノ方果シテ如何ナルヲ知ラス、危疑周章財源之カ爲メニ一時壅塞スル者ノ如シ。朝廷乃チ二百七十七藩ノ負債ヲ計査シ、之ヲ支消スルノ法ヲ議シ、普ク人民舊藩吏ニ告ケ期ヲ告シテ證券簿籍ヲ徵收ス。實ニ明治四年十一月ナリ。既ニシテ其條目ヲ二十三章ニ約シ、年度ヲ三類ニ區別ス。其天保十四年前ニ係ルモノハ悉ク之ヲ削除シ、弘化元年ヨリ慶應三年ニ至ルヲ舊債トシ、明治元年ヨリ明治五年ニ至ルヲ新債トシ、各々官券ヲ發シテ之ヲ授與ス。之ヲ新舊公債證書ト云フ。新ハ毎年元金百ノ四ヲ加息シ、明治八年ヨリ抽籤ヲ以テ若干ヲ償減シ、明治五年ヨリ二十五年ヲ期シテ盡ス。舊ハ明治五年ヨリ五十年

ニ割賦シテ漸次償還セントス。其外國人ニ保ル者ハ別ニ所分附アリ、此編止タ金額ヲ輯載スルノミ。抑モ始メ是ヲ調理スルヤ本省特ニ負債掛ヲ設ケ、尋テ國債寮ヲ置キ余ヲシテ其任ニ當ラシム。然シテ其事タル千緒萬縷新舊紊亂元利錯綜、直ニ面料質叩スルニ非サレハ其實ヲ獲ヘカラサル者十ノ八九、是故ニ藩吏ヲ拉キ債主ニ蒞ミ推訊窮鞫シテ以テ原由ヲ講釋シ條理ヲ論議シ、其審理ヲ得ルニ隨ヒ各々法ニ據テ所置ス。之カ爲メ拮据奔走スル此ニ滿五年而シテ事初メテ竣ル。是ニ於テ乎嚮ニ人民危疑スル者漸ク信憑シ、嚮ニ財源壅塞スル者漸ク融流シ、以テ國家人民ニ裨益スル蓋シ尠シトセス。是既ニ朝議ト本省卿輔ノ裁制宜ニ適ヒ余ヲシテ其信任ノ厚ニ答フルヲ得セシムル所以ナリ。而シテ其書籍ノ群聚推積スルヤ汗牛充棟、苟モ之カ成蹟ヲ視ント欲シテ而モ俄ニ涉獵シ得ヘカラス。因テ今每藩其種類品目外數ヲ稽覈蒐集シテ詳記一部ヲ修シ、題シテ藩債輯録ト云フ。且其最モ簡撮セル表箋ヲ副ヘ、併テ以テ異日ノ檢考ニ備フト云フ爾。

明治十年

國債局長

純造

- 一、藩債ノ總額、大藏大書記官
- 一、藩債ノ種類、大藏大書記官
- 一、藩債ノ利息、大藏大書記官
- 一、藩債ノ償還、大藏大書記官
- 一、藩債ノ擔保、大藏大書記官
- 一、藩債ノ發行、大藏大書記官
- 一、藩債ノ管理、大藏大書記官
- 一、藩債ノ檢査、大藏大書記官
- 一、藩債ノ其他、大藏大書記官

郷誠之助 「講道館」後援会長を務める

日本柔道の創始者で嘉納治五郎が1882年(明治15年)、講道館を設立。「柔道の父」・「日本の体育の父」とも呼ばれる。渋沢栄一は、講道館が財団法人になった1910年(明治43年)～栄一が亡くなる1931年(昭和6年)まで、監事をつとめていた。

この間に後援会が組織され、大正14年に郷誠之助が会長に就任していたことが、下記の渋沢栄一記念財団デジタル版『渋沢栄一伝記資料』(WEB)に記されている。

出展：公益財団法人 渋沢栄一記念財団

デジタル版『渋沢栄一伝記資料』 URL: <https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryō/digital/main/>

第43巻 p.365-372(DK430055k)

大正15年2月9日(1926年)

是ヨリ先、十四年九月三十日、交詢社ニ於テ講道館評議員会開カレ、郷誠之助ヲ会長トスル当後援会ノ成立ノ件報告サル。栄一、当後援会ノ評議員ニ推サル。是日、日本工業倶楽部ニ於テ評議員会開カレ、栄一出席ス。

講道館書類(一)(DK430055k-0001)

第43巻 p.365

講道館書類(一) (渋沢子爵家所蔵)

(謄写版)

拝啓、時下愈御清穆奉賀候、偕前回の評議員会ニ於て大体御賛成を得置候講道館拡張の儀ニ付、後援会を組織され郷男爵其会長ニ就任せらるゝ事ニ決定相成候、右に關し其後の成行を御報告申上御了解を得置度、又右後援会が資金を得るまで其事業進行上必要の費用を一時講道館より立替置度、右の為評議員会相開き度候間、御多端の折恐縮なから来三十日午後五時山下町交詢社(帝国ホテル後)へ御来会被下度、此段得貴意申候 敬具

追て御来会の有無別紙葉書にて折返御返事被下度候

大正十四年九月廿五日 講道館長 嘉納治五郎

(宛名手書)

渋沢栄一殿

(謄写版)

拝啓、去る九月三十日交詢社ニ於て講道館評議員会相開き、兼て前評議員会ニ於て御諒解を得置候本館寄附金募集之儀ニ付別働機関を組織するの件、追々進行致、今回金式百万円募集の目的を以て講道館後援会なるもの成立致、其会長ニ男爵郷誠之助氏就任被致、理事も一応人選を終り、実行ニ移り行候ニ付ては、同会必要の費金を一時講道館より立替置くの必要を生し候ニ付、右評議の結果左の通り決議相成候間御諒承被成下度候

一、講道館拡張の為後援会を組織し金式百万円を募集することに決し、其成立を告げたるに付、講道館基本財産の内より必要ニ応し金壹万円以内を一時後援会ニ立替支出する事

右為念御通知申上候 草々敬具

大正十四年十月六日

講道館長 嘉納治五郎

(宛名手書)

渋沢栄一殿

大正十四年度講道館事業及会計決算報告書 第二一六頁(大正一五年)刊(DK430055k-0002)
 第43卷 p.365-366 大正十四年度講道館事業及会計決算報告書 第二一六頁(大正一五年)刊
 事業概況
 - 第43卷 p.366

○上略

前年来評議員会ノ諒解ヲ得タル講道館拡張ニ関スル件ハ、屢次有志者会合シ協議ノ結果、講道館後援会ナル一団ヲ組織シ、敷地購入・道場建築、各部門ニ亘ル柔道ノ研究、其他緊急必要ナル基金ヲ得ル為メ広く寄附金ヲ募集スルコトハナリ、会長ニハ男爵郷誠之助氏就任、評議員理事委員等ニハ多方面ヨリ有力者ヲ網羅シ、事務所ヲ丸ノ内日本工業倶楽部内ニ置クコトハナレリ
 処務ノ要件

○中略

一、九月三十日、交詢社ニ於テ評議員会ヲ開キ、嘉納治五郎・嘉納徳三郎・潮田方蔵・吉岡範策・山下義韶・中川末吉・本田親民・富田常次郎・正力松太郎・本田存・永岡秀一・飯塚国三郎諸氏出席、嘉納館長議長トシテ講道館後援会成立ノ件ヲ報告シ、且ツ後援会ノ活動ヲ便ナラシムル為、講道館所有金ノ内ヨリ一時必要ノ資金ヲ同会ニ立替支出スルノ件ヲ附議シ、左ノ如ク決議シタリ
 講道館拡張ノ為講道館後援会ヲ組織セラルルコトニ決シタルニ付必要ニ応ジ講道館基本財産ノ内ヨリ金壹万円以内ヲ、一時後援会ニ立替支出スル事

○下略

財団法人講道館後援会書類(DK430055k-0004)
 第43卷 p.367

財団法人講道館後援会書類 (渋沢子爵家所蔵)
 (別筆朱書)
 大正十五年二月一日
 講道館後援会々長男爵郷誠之助氏来状

(印刷物)

拝啓、時下益々御清穆奉賀候、陳者今般財団法人講道館の事業を援助する目的を以て、講道館後援会を組織致し、不肖会長の任に当り候事に相成候処、幸ひ尊台に於て本会評議員たる事御内諾被下候趣奉謝候就てハ公私御多端の御事とは存じ候へ共、何卒本会の為め御尽力を煩はし度切望の至に奉存候、右御依頼申述度、此段得貴意候 敬具

大正十五年二月一日

講道館後援会々長 男爵 郷誠之助

(宛名手書)

子爵 渋沢栄一殿

(謄写版)

拝啓、陳者来ル二月九日午後四時ヨリ、丸ノ内工業倶楽部ニ於テ、講道館後援会評議員会ヲ開催致シ、同会寄附金募集ニ関スル会務ノ状況ヲ報告シ、後援会趣意書及後援会々則ノ御承認ヲ仰キ、且ツ後援会々計規則ノ御審議ヲ煩ハシ度候間、御多用中トハ存候得共、御繰合セ御出席被下度候 敬具

大正十五年二月五日

講道館後援会々長 男爵 郷誠之助

(宛名手書)

子爵 渋沢栄一殿

二伸、御出席ノ有無ハ封入ノ端書ニテ御回答願上候

渋沢栄一 日記 大正一五年(DK430055k-0005)
第43巻 p.367

渋沢栄一 日記 大正一五年 (渋沢子爵家所蔵)
一月二十八日 晴 寒
午前○中略嘉納治五郎氏来り○飛鳥山邸講道館寄附金募集ニ付趣意書及規則書ヲ示サル、依テ大体ニ於テ同意ノ事ヲ答フ○下略
○中略。
二月九日 晴 寒
○上略四時再ヒ工業倶楽部ニ抵リ、講道館柔道奨励ノ為ニ設立セル後援会ニ出席ス、郷誠之助氏其他ノ諸氏ト寄附金募集ノ事ヲ議ス、六時辞去ス
○下略

財団法人講道館後援会書類(DK430055k-0008)
第43巻 p.368-369

財団法人講道館後援会書類 (渋沢子爵家所蔵)
(別筆)
大正十五年二月九日日本工業クラブに開催せられたる相談会に出席せられたり
(印刷物)
講道館後援会趣意書
修文尚武は興国の要道なり。神武創業以来、今代に至る迄二千五百八十有余年、我が国政挙り、紀綱張り、外患を一掃し、国運を伸暢し、以て国家をして常に磐石の安に在らしむるもの、我國民が文を修むると共に尚武の精神を涵養したるによらずんばならず。
明治維新直後、所謂泰西文物の輸入に維れ日も足らざりし余弊は、由来尊重せられたる武術、著しく弛緩し、甚しきは之を無用視するに至れり。此秋に際し、嘉納治五郎氏は、斯道の為め深く計図する所あり、茲に日本伝講道館柔道を工夫し、明治十五年道場を設け、親ら教育指導の衝に膺り、以て國民の体力を強健にし、徳性を涵養し、元気を作興し、風尚を淳化するの一大事業を樹立せられる。是れ現今の財団法人講道館の濫觴にして、爾来爰に四十余年を経たり。
講道館は元來、嘉納氏の独力経営に成り、其費用亦同氏の支持に由れるを以て、入門者よりは何等報酬を收受する所なかりしが、漸次事業の繁盛に赴くに從ひ、入門料又は道場費として少額の金員を徴するに至り、次で明治四十三年有志の贊助を得て、同館を財団法人とし、寄附行為の下に事業を継承せり。
今其の成績を觀るに本館入門者約四万人、有段者約老万三千人、現に毎日本館及び在京諸学校等に於て柔道を修行する者数万に及び、其他国内各地方に於ける修行者の数幾何なるを知らず。更に欧米諸国に於ける斯道普及の状況を觀るに、或は軍隊に於て或は警察官衙に於て之を練習し、又は教科として之を課する学校あり、且つ大学体育科教授の熱心之を研究する者あり。斯の如く我が国粹たる柔道は、今や世界的權威を發揮しつつあり、然も倍々之が普及と保持とを圖らんには、省みて其の研究設備を整へ、以て内容の充実を講ぜざるべからず。
さて講道館の現状を査するに、修行者激増の為め、道場は狭隘を告げ練習に支障を生じつつある情況にして、之を拡張するは刻下の急務なりとす。
又同館の教職に在る者は、由来師弟の情誼に委せ、多年無報酬なりしが将来は相当の報酬を贈るの制と為し、且つ柔道の各地方に普及するに從ひ、講道館より指導者を派遣し、以て其の純正なる發達を助長せしめ、又た柔道教育の徹底を期する為め、特に教育者を養成するの必要あり。然るに現在財団法人講道館の資産情態は、辛うじて現状を維持し得るに過ぎず。
上叙の諸事項は内外の情勢に鑑み、速に着手するの要、切なるものあるを以て、講道館々員一同奮起して、自ら乏を割き勞を効し、其大成を期せんとす。然れども多数の館員は志氣満ちて財力伴はざるの憾あり。吾曹は深く這般の消息に想到し、此の国家的社会的事業の一日も速に發展せんことを冀ひ、茲に汎く有志者の援助を請ふの至当なるを信じ敢て自ら揣らず、講道館員と与に本会を組織せる所以也。願くは微衷の存する所を諒せられ、各位奮て贊助を賜はらんことを。

講道館後援会々長 男爵 郷誠之助

新聞記事

出展: 報知新聞 [1936年(昭和11年)12月8日]

所蔵: 神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫



郷誠之助男の足跡 ひき際は満点! 世話業開店の素地は東株理事長時代に作る

財界の巨星郷誠之助男の退陣は財界に異常なショックを与えると共に、同男の持つかがやける経歴、高邁なる識見と人格にあきたらず、その出所進退にも実に胸のすくようなあざやかな手際を見せた、人間惜まれて退く程幸福なことあるまい、この意味において郷男は最後まで羨望に堪えざる財界人として永く世人の記憶に止まるだろう…と先ず一言讃辞を呈しておく。

郷男は慶応元年の生れだというから当年とて七十二、故松方正義の片腕大蔵次官として明財政の確立に与かって力あった郷純造の御曹司である、例の不換紙幣整理や金本位制等は父親純造氏の隠れたる大努力がひそんでいる、純造氏はその功によって華族に列せられたのだから、バロンの名称が親譲りのものなら、そのち密な整理的頭脳もまた親譲りといえぬことあるまい。

郷男は今でこそ威風堂々、ちょっと近づき難い威厳をそなえているが、あれで若い頃はよくいえば奔放不羈、悪くいえば手のつけられぬ道楽息子であった。

ドイツのハイデルベルヒ大学を卒業して「ドクトル・オヴ・フロイツフィー」の称号を帯びているが実は親父から勘当同様の宣告を受けて漂然ドイツに流謫を命ぜられて名残りであるといえる。

帰朝後農商務省の嘱託かナンカでくさっていたが、その中日本運輸、入山採炭、東洋製鉄等の社長にかつがれてからだんだん天稟のえい才を發揮し出した、明治四十四年東株理事長に選ばれてからの彼はいよいよその本領を發揮して、隔月問題その他縦横の手腕を揮ったが、後年財界世話業開店の素地はこの時代に作ったものだといえよう。

ことに日本運搬などはとてもひどいボロ会社だったが郷男が関係してから見違える程更正したというので大いに男を上げた。

現在三十いくつある肩書の中、目ぼしいものを拾うと大正七年東洋製鉄社長、昭和二年東電会長、同五年東京商工会議所会頭、同七年日本経済連盟会長にそれぞれ就任今日に至った次第。

一体郷男が今日の地盤をきづき上げたのは何といっても財界世話業のお陰であろう、世話業者としては渋沢、和田につぐ三代目であるが、この世話業なるもの、誰でも良いというわけのものでない、ある人は財界世話業者の条件としては、

- (イ) 財界の長老なること
- (ロ) 顔が広いこと
- (ハ) 世話好きであること
- (ニ) 公平無私なること
- (ホ) 押しが利いてしかも酸いも甘いもかみ分ける苦労人であること
- (ヘ) 財産があって金ばなれよく、無欲恬淡なること。

先ずこれ位の条件がいるといった世話業者として郷男が幅をきかせたゆえんである、世話業者として手にかけてた事件はかなりある。

最初は大正十四年の郵船東洋汽船の合併、これなどは途中で交渉が行悩んだものを、渋沢翁や大橋新太郎氏にねぢ込んで到頭物にした。

それから国際通運、明治運送の合併、東電と東京電力の合併、十五銀行、川崎造船所の整理、例の島徳一派の日魯漁業乗取事件、東洋モスリン、東電整理、八千代生命問題さては下って日本製鉄の創立、セメントの統制等々ちよっと筆者などの記憶にあるだけでもこれ位はある、きのう引退声明で、他人の伝記などを沢山送って来るが読んで面白くないから積み上げてある、だからわしも書かぬことにしてある。と伝記を軽くボイコットしたが、郷男の世話業伝だけでも立派な財界史になるだけの価値はあろう。

もつともこの財界世話業なるもの自由主義華やかなりし頃の産物で各事業相互間、金融家と企業者、財閥と財閥等、相互間の利害錯綜した場合にいるもので、今どきのように「資本主義の第三期」だとかで、大蔵大臣までが準戦時体制論を持出すような統制ばやりの時代には段々その必要性も減殺される、現に郷男が日本経済連盟会長就任以来は、むしろこうした事業家相互のイザコザよりも財界それ自体の基礎的な問題にぶつかり、そうした意味で郷男の存在は単なる世話業者としてでなく、より広い、より深刻なる性質を帯びたものとなって来た。

郷男の引退が惜まれるのは恐らく、切迫した社会情勢下にあつて、同男がリベラリズムの最も強力なる代表者としてであろうと思う。

さて郷男引退後の財界は?…人物からいってもまた御時勢からいっても郷男の地位をそのまま承継する人物はこの際困難であろう、で恐らく財界の代表機関たる日本商工会議所、日本経済連盟、全産連いずれも別々に担当されるので時勢にふさわしい会議所会頭には恐らく興銀総裁結城豊太郎、全産連会長には藤原銀次郎がそれぞれ推されるだろう、経連は門野重九郎、井坂孝両氏であるが、多分やはり名義だけは郷男にしておいて事実上の切盛りは右の両氏が担当するのではないか。

結局我国財界の重要問題は今後は結城、藤原、大橋(新)門野諸君の合議制でもって進められるのぢやないか、時代の波からいってもこの事は当然だろう。

さて引退後の郷男御本人はどうする考えか、同男の声明では、

明年四月から旅行でもして専心静養に努めたい、場合によってはハワイあたりにも出かけたいたい身体の調子が良くなれば財界の第一線には立たないが、老人向の相談なら引受てもよい。といっているから「郷財界相談所」の復活は期待してもよさそうだ、最後に男は声を落としてこうしていよいよ辞めると何だか古い女と別れた時のようでやっぱり未練が残るネと白状するところなど彼としてもけだし感慨無量であろう。

データ作成:2010.6 神戸大学附属図書館

中日岐阜ホームニュース 1985年(昭和60年)12月21日付掲載

**伝説と谷間
歴史の**

—<65>—

郷土史家 郷浩

甥が語る男爵郷 純造

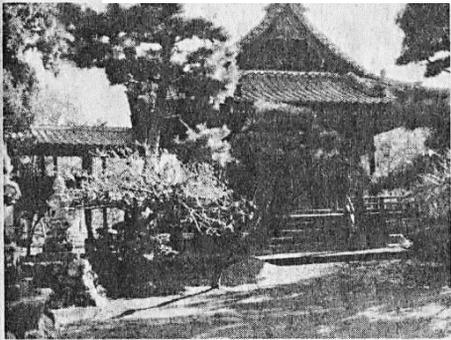
薩摩武士の娘を妻に迎える幸運つかむ

男爵は私の叔父に当たり、文政八年四月二十八日黒野村で出生、幼名を嘉助といった。当時、郷家は百姓で駄菓子屋と料理屋を営み、家号を「うどんや」といった。兄二人、第一人、妹一人の五人兄弟で、下男三人と女中二人を常置、労働は苛酷であった。当時、黒野は加納藩安藤対馬守の領地で、長森切通の陣屋から毎年検見の役人がきて、常宿となっていた。

嘉助は学問が好きで、野良へ弁当を運ぶのが日課だったが、食事の間は畔に腰を下し、本を読みながら待った。剣道は鶴飼の大野沢忠太氏に学び、免許皆伝の腕前。書は御望の郷余齋に学んでいた。

十八歳ごろ無断で家を飛び出した。目的地は江戸である。親類の二人が追いかけて、名古屋・笠寺門前で捕まり、評議の結果、改めて江戸行きを許され、芝・増

郷 純造氏が寄進した正法寺の観音堂



上寺に小僧として入山。毎日写経の仕事だった。百姓の卒が出世するには御家人の株を購入するのが早道で、当時最低が三十円であった。その金策のため親類中をかけめぐった。国を出てから二十年を経たが目鼻がつかない。意を決して成田不動に二十一日間の断食祈願をした。その頃、幕臣堀織部正の知遇を得た。彼の命令で静岡にいる西郷隆盛へ連絡をとることになったが、彼の妻しげが薩摩武士の娘だった事が幸いしたという。嘉助から純造に改名したのもその頃である。

しげとの間には実子がなく、女中松島との間にできた子供が誠之助である。松島は拙宅で誠之助を産んだそう。祖父は誠之助をかわいがり、おんぶして大阪奉行所へ行く途中、背中に小便されて困ったそう。

新政府に招かれ大蔵省企画部出任、当時、全国五百六十大名は借金を抱えて困っていた。禄高に応じて公債を授与する制度があり、これを無難にこなした功績で明治二十二年男爵を授与された。同四十三年十二月三日、八十六歳で没。

昭和60年12月21日(土) <4>

「電気新聞」 2020年3月付掲載
 一般社団法人 日本電気協会新聞部発行
 士魂商才 渋沢栄一
 日本近代資本主義の父 (No58)
 北康利作



第三章 明治新政府出仕 より引用

明治2年10月、渋沢栄一はその大隈重信から明治新政府への出仕を求められる。元幕臣で民部大蔵少丞(しょうじょう)(局長級)であった郷純造(後の大蔵大輔、貴族院議員、男爵)が推薦してくれたのだ。

郷は栄一と同じ農民出身で、後に財界の巨頭として一世を風靡(ふうび)した郷誠之助日本商工会議所会頭の父親である。郷誠之助が栄一の後を受けて財界総理的な地位に立ったのにも縁を感じる。



中日新聞 1988年(昭和63年)2月11日付掲載

百年百人

岐阜市制百年に寄せて

19

時からの夢で、十九歳のと

き江戸に出て、芝増上寺で出世していた。小使として住み込んだ。明治に改まってからは、幕府の外国奉行の用會計局へ出仕、同局が大蔵人となって財政経済面を担当となり、以後もとどま当した。さらに大阪奉行のり、時の大蔵大臣の女房役家老も務めた。江戸城開城を務めた。特に、新政府の際には、工兵差役頭取ま 兌(だ) 換制度の実現に全

重鎮として活躍した。

同二十八年、日本運輸株式会社社長となり、財界に第一歩を踏み出した。その後、東京株式取引所理事長(明治四十四年)、東京商工会議所と日本商工会議所の会頭(昭和五年)、日本経済連盟会長(同七年)などを歴任。不況期には会社整理合併に力を尽くし、財界の世話役的存在だった。出身の黒野へは、父・純造とともに神社や寺へ桜を寄付して、郷土に感謝の念を示したという。

郷純造・誠之助父子

郡黒野村(現岐阜市)出身。祖先から関係の深い黒野の多賀神社の本殿や正法寺の観音堂を寄進。さらに、小学校の基本財産として多くの土地を寄付した。

文政八年

(一八二五年)生まれ。少年時代に父親を亡くしたため、苦勞を重ねた。「江戸へ出て、武家となって笠松郡代になりたい」が小さい

初代の大蔵次官を務めた郷純造氏



息子は財界重鎮で活躍

父・純造氏の後を継ぎ、財界の重鎮として活躍した郷誠之助氏



精力を傾け、財政的基礎を確立した。明治十九年に初代の大蔵次官となる。二年後、退官。同二十四年に貴族院議員、同二十九年に男爵を授けられた。

二男の誠之助は、大正から昭和初期にかけて財界の

大正期の護憲運動を率い、海軍の青年将校らによる「五・一五事件」で暗殺された犬養毅元首相（一八五五～一九三三年）が、囲碁仲間の財界人郷誠之助男爵（一八六五～一九四二年）に宛てた書状が、岐阜市黒野の郷男爵の生家で見つかった。

書状は、縦十八センチ、横五十三センチ。郷男爵のいとこのひ孫に当たる会社役員郷和彦さん（六七）が十年前、自宅の蔵を整理した際に発見し、保管していた。

内容は、開催が二日後に迫った碁会の出欠の返事が遅れたことへのわび状。碁会の案内が一他の書類中に混

犬養元首相のわび状



犬養元首相が岐阜市生まれの財界人郷誠之助男爵に宛てた書状と郷和彦さん＝岐阜市黒野で

岐阜

囲碁仲間宛て、発見

中部発

入」してしまつて「昨た封筒の消印「7・5六十二歳。立憲国民党夜発見」し、「御答延・24」や、犬養元首相のリーダーとして衆議院で与党の一角を形成して来た。郷男爵は五十三歳で、貴族院議員の神様」といわれた犬や日本工業倶楽部専務理事など要職を歴任していた。

日付は五月二十四七（一九一八）年とみられる。当時、犬養元首相は

元首相を顕彰する犬

養木堂記念館（岡山市）によると、元首相は囲碁棋士の本因坊秀栄に師事するほど、囲碁好きだったという。郷さんは「今年は一五事件から八十年。書状からは『憲政の神様』といわれた犬養元首相の律義で誠実な人柄がうかがえるようだ」としのんでいる。

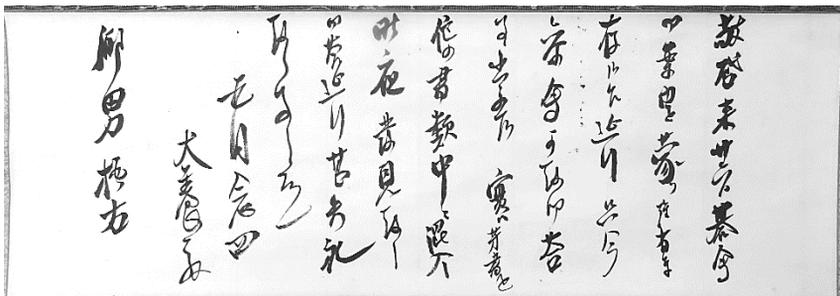
取材後記

犬養元首相の書状は、郷和彦さんの亡き父浩さんが戦前、東京の農林省に勤務していたとき、郷男爵本人からもらったとみられる。書状と一緒に、郷男爵の肖像写真や、短歌をしたためた直筆の短冊も見つかった。

書状を軸装に仕立てたのは、郷男爵か、浩さんか。今となつては分からないが、丁寧な装丁からは、志半ばで銃弾に倒れた元首相の遺徳をしのぶ姿がうかがえた。

（森村陽子）

4月28日付 岐阜・近郊版から



昭和7年6月24日の消印
郷誠之助宛 犬養毅書状
180×520 郷和彦蔵

岐阜新聞 県内版 2021年(令和3年)1月1日 金曜日付掲載

明治政府官僚の郷純造

登用推薦「成功への転機」

渋沢栄一に恩人

「日本資本主義の父」と称される実業家渋沢栄一の才能をいち早く見抜いた人物が、岐阜市黒野にいた。大蔵省(現財務省)の官僚として明治維新後の新政府で活躍した郷純造(1825~1910年)だ。純造は、実業家になる前の渋沢を新政府で登用するよう大隈重信らに推薦。大蔵官僚となった渋沢は、国立銀行条例制定に携わり、第一国

立銀行設立を指導するなど腕を振るった。純造の子孫で郷家について研究する郷和彦さん(78)＝同市黒野＝は「大蔵省への抜擢がなければ、後の実業家としての成功もなかったはず。純造の推薦がターニングポイントとなった」と語る。(山田雄大)

郷家に伝わる郷純造の肖像画と子孫の和彦さん。「純造の大蔵省への推薦が渋沢栄一の人生のターニングポイントになった」と語る＝岐阜市黒野



岐阜市の子孫ら 大河心待ち



郷誠之助(郷和彦さん提供)

まれ、笠松代官になる志を持って江戸へ。鳥羽伏見の戦い直前に御家人の株を買って幕臣となり、江戸城無血開城に寄与。明治維新後は高い財務処理能力などを買われ、大蔵省で活躍した。

「我が輩が大蔵省に入って人材を求めていると、郷純造君が洋行帰りの渋沢君を推薦してきた。郷氏はなかなか人物を見る目があつた」。1909年発刊の雑誌「実業之日本」で大隈自衛身がそう語っている。近代郵便制度を創設した前島密も、純造の推薦で新政府入りした一人だ。

純造と渋沢の間に親交があったかは不明だが「幕臣の末端に名を連ねた者同士、よく知っていたのでは」と和彦さん。渋沢は死の直前、

と和彦さん。渋沢は幕末にフランスを視察しており「欧州の先進的な産業を見ていたことも、純造が一目置いた理由の一つ」と分析する。幕臣だった2人は、薩長出身者で固められた新政府では疎まれ、特に薩摩出身の大久保利通に憎まれたという。大久保が大蔵大臣に就任すると純造は左遷、予算編成で対立した渋沢は退官し、実業家の道を進むこととなる。

渋沢との縁は、純造の次男誠之助(1865~1942年)に受け継がれる。誠之助は日本運送、入山探炭、王子製紙などの会社再建を成功させ、日本商工会議所会頭などを歴任。昭和の戦前まで日本財界をリードした。渋沢は死の直前、親族を集めて「自分の亡後は郷男(誠之助)によろしくお頼みしたい」という遺言を伝えており、誠之助の手腕を高く評価していたことがうかがえる。

今年大河ドラマ「青天を衝け」で渋沢の生涯が描かれるため、純造と誠之助の地元では、2人の功績を見直す動きがある。黒野地区の歴史や文化を研究する市民グループ「黒野城と加藤貞泰公研究会」が生誕地に看板を設置し、2人に関する資料を黒野会館に置いて閲覧できるようにする計画を練る。河口耕三会長(72)は「郷土が誇る偉人として大いにPRしていく。大河ドラマにも登場すると期待したい」と話す。

生誕地に案内版設置 除幕式

2021年(令和3年)4月4日

岐阜新聞 県内版

2021年(令和3年)4月5日 月曜日

郷純造と次男誠之助の生誕地紹介



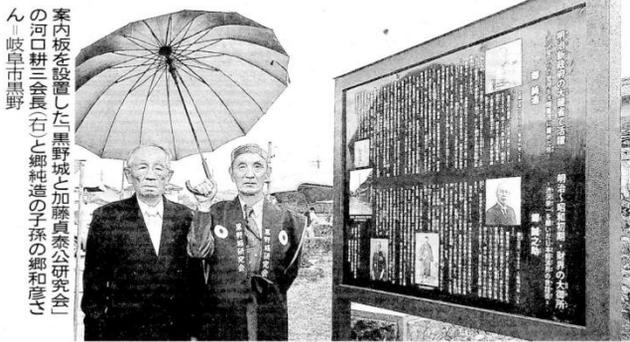
看板を紹介する河口会会長と郷和彦さん。岐阜市黒野で

NHK大河ドラマ「青天」の渋沢栄一と親交があった「衝け」の主人公で実業家郷純造(一八

岐阜黒野に案内板設置

二五(一九一〇年)と、次男の誠之助(一八六五(一九四二年)の生誕地を紹介する案内板が、郷家の屋敷にあった岐阜市黒野に設置された。農家に生まれた純造は大坂奉行所の家老を経て江戸幕府の幕臣となり、江戸城の無血開城に関わった。明治政府では、大蔵官僚として初代大蔵次官まで上り詰め、欧米から戻った渋沢を政府に登用するよう大隈重信に推薦した。誠之助は実業家として活躍。渋沢の遺言にも後を託せる人物として名を連ね、東京株式取引所理事長や日本商工会議所会頭などを務めた。地元の歴史を研究する市民団体「黒野城と加藤貞泰公研究会」が、ドラマにちなんで案内板の設置を企画。純造の兄の玄孫に当た

る郷和彦さん(中心)宅の敷地にあり、二人の著作や郷家の資料に基づいた来歴や写真が掲載されている。除幕式が四日(日)あり、研究会の河口耕三会長(中心)は「大河ドラマを見る人が増え、地元の人にも貢献したとPRできれば」と話、和彦さんは「子どもが地元で偉人がいたと知り、将来自分も身を立てたい」と志してくれたら」と話した。(名倉航平)



案内板を設置した黒野城と加藤貞泰公研究会の河口耕三会長(右)と郷純造の子孫の郷和彦さん。岐阜市黒野

渋沢栄一を登用した官僚

岐阜市黒野地区の歴史や文化を研究する市民グループ「黒野城と加藤貞泰公研究会」は、日本近代資本主義の父とされる実業家渋沢栄一を大蔵省(現財務省)に推薦した郷純造(1825~1910年)と純造の次男誠之助(1865~1942年)の誕生地を示す案内板を同市黒野に設置した。4日に除幕式があり、関係者が完成を祝った。(高橋夏帆)

岐阜市・黒野、市民グループ設置 実業家 誠之助の偉業も

つた東京電灯(現東京電力)や王子製紙など約30社の企業再建を成功させ、東京株式取引所(東京証券取引所の前身)の理事長を務めるなど日本の経済界を牽引した。2人の生い立ちを記した案内板は、大河ドラマ「青天を衝け」の放送に合わせ、江戸時代からある郷家の庭園に設置。道路側に生誕地を示す支柱も立てた。式には、関係者ら約40人が出席。研究会の河口耕三会長(73)は「同市今川は黒野の史跡の名所になれば」と話し、純造の子孫郷和彦さん(78)は「同市黒野は訪れた子どもたちの目標となつてほしい」と完成を祝った。

郷純造 生誕地に案内板

中日岐阜ホームニュース
中日 わっちとおまはん

2021年(令和3年)5月号 [4月25日(日)発行]

発行/岐阜ときわ専売店 やまもと新聞店 ☎058-294-5381
 近の島専売店 小川新聞店 ☎058-231-9494
 鶯飼黒野専売店 戸川新聞店 ☎058-239-3500 [定価50円]

郷純造、次男誠之助の生誕地 黒野に案内板設置

NHK大河ドラマ「青天を衝け」の主人公・渋沢栄一と親交があった、郷純造(ごじゆんぞう)と次男の誠之助。2人を紹介する案内板が、生誕地である岐阜市黒野に設置された。純造は明治政府の官僚として、誠之助は実業家として活躍した。2人の偉業の紹介を、地域団体「黒野城と加藤貞泰公研究会」(河口耕三会長)が、ドラマを機会に企画。案内板は純造の兄の玄孫である郷和彦さん宅の敷地にあり、2人の著作や、郷家の資料に基づいた来歴や写真が掲載されている。



案内板と郷和彦さん

WEB・データベース

国立国会図書館が全国の図書館等と協同で構築している、調べ物のためのデータベースより

レファレンス事例詳細(Detail of reference example)

図書館 (Library)	埼玉県立久喜図書館 (2110009)	管理番号 (Control number)	埼熊-2013-006
事例作成日 (Creation date)	2013年03月09日	登録日時 (Registration date)	2013年05月20日 11時04分
		更新日時 (Last update)	2013年08月01日 16時40分
質問 (Question)	<p>渋沢栄一を推薦したという郷純造(ゴウ ジュンゾウ)について書かれた資料を見たい。</p> <p>子息郷誠之助の伝記資料に、父郷純造についてのまとまった記述があった。 『男爵郷誠之助君伝 伝記・郷誠之助 伝記叢書 48』 p1-70「第1編 男爵の系譜と純造翁」 純造の自叙伝である「郷純造履歴自記」が紹介されているが、埼玉県立図・国会図とも未所蔵。公刊物ではない可能性あり。</p>		
回答 (Answer)	<p>国会図書館デジタル化資料「男爵郷誠之助君伝」あり。 (http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1043410 国会図 2013/08/01 最終確認)</p> <p>『人間・郷誠之助』 p10-30「父、郷純造を語る」あり。 経歴について記述のあった資料 『朝日日本歴史人物事典』(朝日新聞社 1994) 『海を越えた日本人名事典』(富田仁編 日外アソシエーツ 2005) 『日本人名大事典 2』(平凡社 1986) 『コンサイス日本人名事典』(上田正昭監修 三省堂 2009) 『明治過去帳 物故人名辞典』(大植四郎編 東京美術 1991) 『郷土歴史人物事典岐阜』(吉岡勲編著 第一法規出版 1980) 『岐阜県人』(吉岡勲著 新人物往来社 1977) 『地租改正法の起源 開明官僚の形成』(丹羽邦男〔著〕 ミネルヴァ書房 1995)</p> <p>渋沢栄一・前島密を推薦したという記述のあった資料 『明治を耕した話 父・渋沢栄一 青蛙選書 53』(渋沢秀雄著 青蛙房 1977) 『埼玉の先人渋沢栄一』(菰塚一三郎、金子吉衛著 さきたま出版会 1983) 『前島密 人物叢書 新装版』(山口修〔著〕 吉川弘文館 1990) 『日本の郵便文化選書〔1〕 鴻爪痕』(示人社 1983)</p>		
回答プロセス (Answering process)	<p>『財界の政治経済史 井上準之助・郷誠之助・池田成彬の時代』(松浦正孝〔著〕 東京大学出版会 2002)</p> <p>その他の記述があった資料 『大隈重信関係文書 5』(早稲田大学大学史資料センター編 みすず書房 2009) p69・73・79 郷純造の大隈重信宛書簡あり。 『極道 上下 中公文庫』(小島直記著 中央公論社 1982) 郷誠之助を主人公とする小説だが、郷純造についての記述が散見される。『小島直記伝記文学全集 6 極道』(小島直記著 中央公論社 1987)にも収録。 『明治初期の官員録・職員録 6 明治初期歴史文献資料集 1 明治18・19年』(寺岡書洞 1981) p274 大蔵省の項目に「郷純造」あり。</p> <p>『近代デジタルライブラリー』 「名士の嗜好」(中央新聞社〔編〕 文武堂 明治33.3) コマ123-126「郷純造君」あり。(http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/778825/24 国会図 2013/3/8 最終確認)</p>		

渋沢栄一記念財団 渋沢史料館 井上潤館長講演より

埼玉県日高市のホームページより

第7回

渋沢栄一の事業・経営理念

講師名	渋沢栄一記念財団 渋沢史料館 館長	井上 潤 (いのうえじゅん)氏
受講日	2019年11月2日	
場 所	日高市生涯学習センター	
参加者	合 計	77名
	登録受講者	54名
	当日のみ受講者	23名



講師プロフィール

(公益財団法人)渋沢栄一記念財団 業務執行理事・事業部長
 渋沢史料館 館長
 1984(昭和 59)年 明治大学文学部史学地理学科日本史学専攻卒業 渋沢史料館学芸員
 2001(平成 13)年 渋沢史料館学芸部長
 2003(平成 15)年 渋沢史料館副館長
 2004(平成 16)年 渋沢史料館館長～今日に至る
 企業史料協議会監事、(公財)北区文化振興財団評議員、(公財)埼玉学生誘掖会評議員 などを兼務
 研究分野:渋沢栄一研究、日本村落史

主な著書

- 『渋沢栄一 近代日本社会の創造者』(山川出版社 2012年)
- 〔共著〕『村落景観の史的研究』(八木書店、1988年)
- 『新時代の創造 公益の追求者・渋沢栄一』(山川出版社、1999年)
- 『記憶と記録のなかの渋沢栄一』(法政大学出版局、2014年)
- 〔論文〕「通行手形にみる関所通行の実態—金町松戸関所を中心に—」1993年
- 「博物館の連携—飛鳥山三つの博物館を中心に—」2001年 など



Q2: 渋沢栄一の企業理念が経営者に引き継がれているのかなとは思っていますが、郷誠之助は多くの企業を渋沢から受け継いで持っていますが、父親は純造ですね。純造が大蔵省に渋沢を引き入れたと聞いているのですが、その辺のところをお聞きできますか。

A2: 実証できるような文献等はなかなか残ってはいませんが、明治政府に推薦したのは郷純造であると語られています。渋沢栄一を受け継ぐ財界の世話役的な存在としては、和田豊治がいます。また、商工会議所2代目会頭の中野武富にも受け継がれています。財閥を築かなかったのですが、有能な人材は財閥の人間うまく活用していました。代表的なところでいうと、ビール業界では三井の中にいる人間をうまく活用して醸造業を進めていった。自分の後継というよりも、しっかりと自らの目で眼鏡にかなった人を選んで充てて進めていったと思います。

WEB 『大河ドラマを10倍面白く見る方法』

ブログ管理者『pansars』より

2020.07.02 2020.07.11 monster.cat611

渋沢栄一 明治政府の大蔵省官僚になる 2021年NHK大河ドラマ「青天を衝け」

静岡で、主・徳川慶喜の元で、商法会所の仕事をするつもりで、妻子を静岡に呼び寄せています。娘・歌子は7歳。初めての家族水入らずの生活が始まろうとしていた矢先でした。太政官から、渋沢栄一に出仕の呼び出しがきたのです。それを辞退したい旨を伝えたと、徳川側が逆に慌てました。徳川家が渋沢栄一の出仕を断ると、朝命に反して有能な人材を出さなかったと責められることになるのです。徳川家に迷惑が掛かることは避けたい……こうして、仕方なくではありますが、渋沢栄一は大蔵省官僚になるのです。

大隈重信と渋沢栄一

渋沢栄一が敬愛する徳川慶喜と敵対し、慶喜を今の境遇に貶めたのは、現政府です。しかも旧幕臣だった自分が、なぜ明治政府の主要ポストに就任しなければならないのか！？そんな不満と疑問を持ちながら、渋沢栄一が太政官に出頭したのは、明治2年11月4日でした。当時の明治政府は、新たな国を作るためと、新たな政府を作るための試行錯誤真つただ中にあり、組織制度もたびたび変わっていました。しかし薩長土肥の各藩士が上級官僚の多くを占める、閥族政府であることに変わりはありません。そうした中で渋沢栄一が拝命した役職は、租税正というもので、上官は大隈重信でした。渋沢栄一は大隈邸を訪れ、重信本人にあつて辞退を伝えています。「自分は税金に関する知識は、まったくありません。静岡での仕事の途中で、それこそが自分の生涯の仕事と思っています。また、自分は旧幕臣であり、慶喜公には計り知れない恩義を賜っております。ぜひともお側近くでお仕えしたく、今回の任命は取り消していただきたい！」それに対し、大隈は次のように、渋沢を説得したそうです。「君がいうことは、もっともだ。しかし、新政府の中で、実際の知識や経験のあるものなど、一人もいない。静岡で藩の財政を潤しているような、斬新な発想が今の日本には不可欠だ。しかも君の辞退が通れば、徳川家に迷惑がかかるのは必定。未来の日本のため、ぜひ尽力してほしい」ここでも徳川慶喜の立場が悪くなるといった説得をされ、結局受けざるを得なかった渋沢栄一でした。12月18日、妻子を静岡から呼び、湯島天神中坂下に移り住んでいます。

渋沢栄一を推薦したのは誰？

新政府の中には、能力に関係なく旧幕臣というだけで嫌う人達がいたのは事実です。その筆頭が大久保利通で、彼が大蔵省のトップにいたときは、渋沢栄一に声が掛かることはありませんでした。

いったい誰が渋沢栄一を大蔵省に推薦したのでしょうか。それは、大蔵官僚・郷純造という人物です。彼は、「人を見る目」に長けた人物で、郵便の父とも称される前島密なども、郷純造の推薦により政府に登用された一人です。郷純造は大久保利通には嫌われていて、一度は重要ポストから外されていましたが、大隈重信により再び咲いています。

渋沢栄一が財務に秀で、静岡藩での活躍も政府内には知れ渡っている関係で、歓迎する人々がいる一方で、やはり顔色を変えて反対する人々も存在しました。旧幕臣であり、農民あがりの渋沢栄一の下で、仕事などできない！そう言って詰め寄る人々を、大隈重信は一切取り合わなかったそうです。一方、渋沢栄一の働きは、神がかり的なものでした。日本にとって、まったく前例のない中、税の金納制の改革・貨幣制度や郵便制度の検討・鉄道敷設・行政規則の改正など、多岐に渡り、次々と膨大な量の仕事を処理していきました。

結果、農民上がりだの旧幕臣だのと非難ごうごうだった人たちは、大隈重信に謝罪に訪れたそうです。「渋沢租税正の働きは、誰も真似ができないものです。前に無礼なことを言ったのは、とんだ思い違いでした。得難い人物を得られたとのだと、感心しています。まことに申し訳ありませんでした。」いい気味だ！といったところですが、渋沢栄一の苦労は、計り知れなかつただろうと思います。まだまだ若い渋沢栄一だったからこそだと、まさに時代に求められた寵児だったのだと思わずにいられません。

千代田区麹町出張所地区連合町会のホームページより

2020/12/19

麹町界隈わがまち人物館

麹町界隈 わがまち人物館

▶ 麹町地区出張所連合町会地域ポータルサイト

MENU | 社会・政治・経済のリーダーたち |

テーマ別

- 番町文人通りの人々
- 近代日本文学を彩った人々
- 樋口一葉と番町の人々
- 麹町界隈の先進的な女性たち
- 輝けるアーティストたち
- 音楽発祥・発展のまち
- 政治・経済のリーダーたち
- 江戸の残照

ジャンル別

- 文学
- 音楽・美術
- 教育・宗教
- 芸能
- 政治・経済
- 女性
- その他

50音順

- あ行
- か行
- き行
- た行
- な行
- は行
- ま行
- や行
- ら・わ行

日本の株式市場を確立した財界人

郷 誠之助 (ごう せい の すけ) 1865～1942



郷誠之助は、ハイデルベルク大学の哲学博士号を持ち、日本運輸の社長として実業界へ登場、その後多くの企業の再建をまかされた敏腕経営者である。彼の屋敷が、上二番町28(現：一番町14)にあった。東京株式取引所理事長として市場の重要性を説く。また戦後の財界リーダーとなる永野護、小林中、河合良成ら、当時の若手実業家を集め、この私邸で番町会を催すなど財界世話役としても慕われた。

有島生馬が「大東京繁昌記」(山の手麹町)の中で若き日の郷誠之助にふれており、生馬の隣家であった明治女学校の敷地を「当時この家は郷誠之助君が住まっておられた。氏もまた若かったので、敵君の怒りにふれ勤当されていたのだった。」と述べている。若き日の郷の奔放な生活ぶりがうかがわれる。

ジャンル	実業家
ゆかりの地(旧)	上二番町28
ゆかりの地(現)	一番町14番地

※ゆかりの地での(旧)は旧地番を表記し、(現)とはその場所の現行地番を示しています。
また、現行地番からのリンク先(既成地図ソフト利用)は、あくまでも「その周辺」とご理解ください。

参考文献:

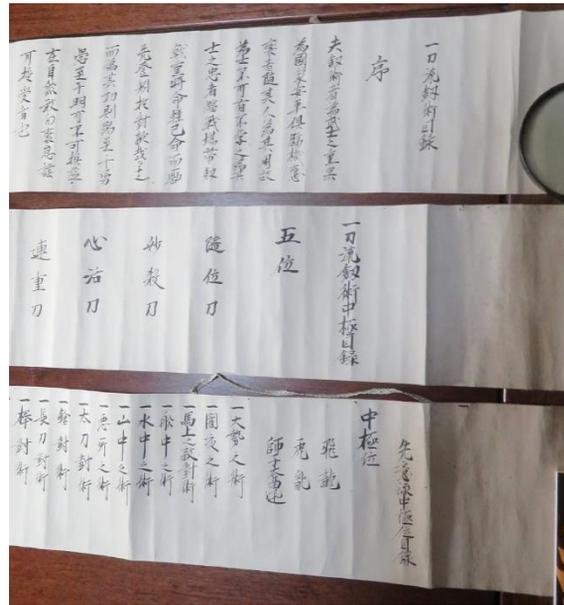
千代田区麹町出張所地区連合町会・地域コミュニティ活性化事業実行委員会

// 文芸・趣向

純造(当時19才の策一)の剣術巻物(目録三巻)

下鶉飼 大野理忠太道場で剣術習得
1864年(天保15年)4月

郷和彦蔵

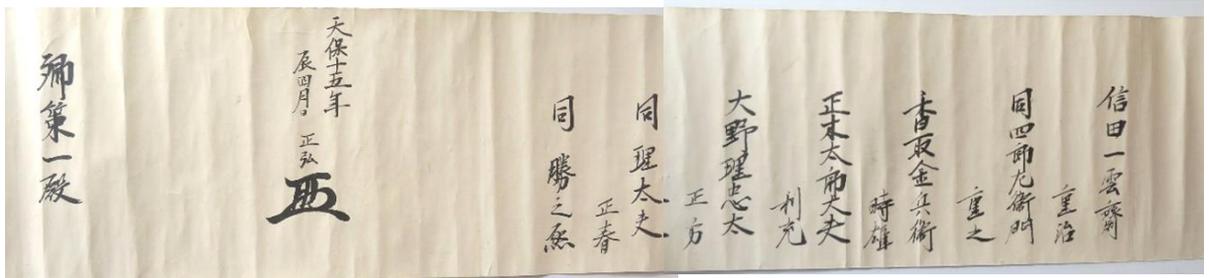


一刀流剣術目録

一刀流剣術中極目録

先意流中極目録

剣術目録の師匠名



信田一雲齋
重治

重治

同四郎左衛門
重之

重之

香取金兵衛
時雄

時雄

正木太郎大夫
利充(大垣藩士)

利充(大垣藩士)

大野理忠太

正方(下鶉飼大野家第14代)

大野理太夫

正春(正方二男)

同 勝之丞

正春(正方二男)

同 理太夫

正春(正方二男)

天保十五年
辰四月 正弘

西

天保十五年(1844)
辰四月 正弘 花押

郷策一殿

郷策一殿(19歳の純造)

幼名嘉助のち策一

編者 郷純造が収集の印譜 いんぶ

しょうせきさんぼう

「松石山房印譜」、「松石山房印譜続集」



郷和彦蔵

郷純造が収集して編纂した印譜のなかで、郷和彦さん所蔵は、松石山房印譜6巻、松石山房印譜続集4巻。前者は秦漢以来の古印を収集したもっとも古い印譜であり、日本篆刻（てんこく）学上、特筆されるものであるともいわれる。印譜は印刷ではなく一枚ごとに押印されている。

郷純造の印譜について印章史学者の松村一徳氏が月刊書道情報誌「書道界」2017年11月（藤樹社発行）で次のように記述されているので紹介します。

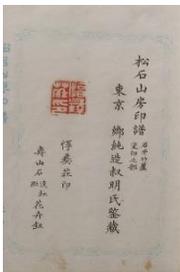
「印章に関して気になる存在が、美濃国黒野（現在の岐阜市黒野）出身の郷純造（1825～1810）である。豪農に生まれ幕臣・旗本となり、明治維新後の新政府では初代大蔵次官を務め、退官後は貴族院議員となる。官僚・政治家だが篆刻（てんこく：印章を作成する行為）への見識が高く、収集した秦漢以降の官私印や明清篆刻印を納める印譜『松石山房印譜』（明治15年、中井敬所校訂）や、印譜を解題した『印譜考略』（同30年、中井敬所評定）を上梓（じょうし：書物を出版すること）している。

他に『松石山房印譜續集』（同27年）、『随意荘印贖』（同29年）、『法眼居印賞・同附録』（同33年）、『松石山房銅印考』（同37年）等がある。

郷純造の書面骨董蒐集は漢学塾泊園書院の勉学や幕府、政府での交遊からでは。泊園書院は藤澤東峯（1794～1864）が文政8年（1825）大阪に開いた学問所で、昭和23年に閉院するが3年後に、泊園書院の蔵書・自筆稿本や印章が関西大学内に東西学術研究所、文学部に東洋文学科を開設した。印章は丸山大迂を含む江戸後期～大正期の印人刻で南岳（東峯長男で書院を再興）旧蔵が175顆、黄鵠（南学長男）旧蔵が3顆。

純造の印癖は幼い頃よりというが、師南岳（通天閣の命名者）の影響もあるのでは。実は地元芥見出身者に純造と同世代の篆刻家篠田芥津（1821～1902）がいる。」

松石山房印譜（全423印）



石牙竹蘆
窠印之部
(80印)



玉晶之部
(56印)

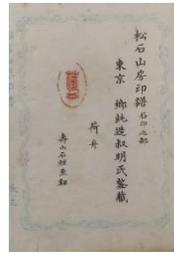


銅印之部
(62印)

石印之部



(80印)

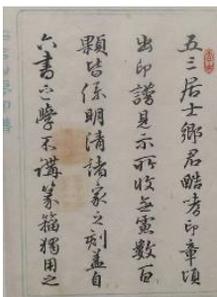


(73印)



(72印)

松石山房印譜続集 石印之部（全419印）



(121印)



(109印)



(101印)



(88印)

180円の一軸が32万円で入札 水墨画「藝阿彌(げいあみ)山水」

現在、東京都根津美術館所蔵 芸阿弥の「観瀑図」
芸阿弥 室町時代の画家
国の重要文化財

解説によると、室町時代の側に仕えた人の今に残る唯一の絵

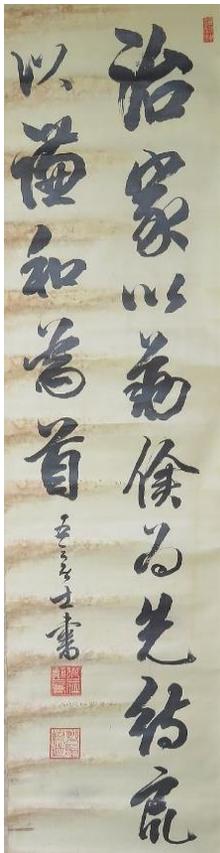


郷純造の書・水墨画



信為萬事本 郷純造書 郷 和彦蔵

信為萬事本、信を万事の本と為す。信は全ての物事の基本である。これは、あらゆる物事において、信用、信頼、信義なくして、物事は始まらないという意である。



郷純造書
400×1540
郷和彦蔵



水墨画
明治14年 郷純造書画
675×1800
郷和彦蔵



松ノ画
明治33年 郷純造書画
360×1127
郷和彦蔵



松樹千年
郷純造書画
揖斐郡池田町沓井
益田 靖夫蔵

画は安田老山（海津郡高須藩医の出で明治初年の日本画壇の重鎮）に学び五三と号す

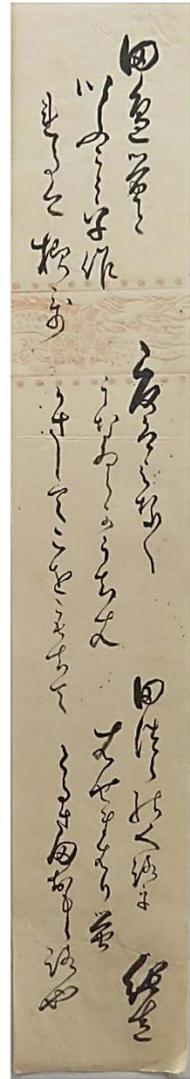
郷純造の和歌短冊

田辺螢と
いふことを作
れる今様哥

夏はよなる
うなるらがうちは
かさしてこそもちて

田つらのくろに
はせまはり螢
とるさまおもしろや

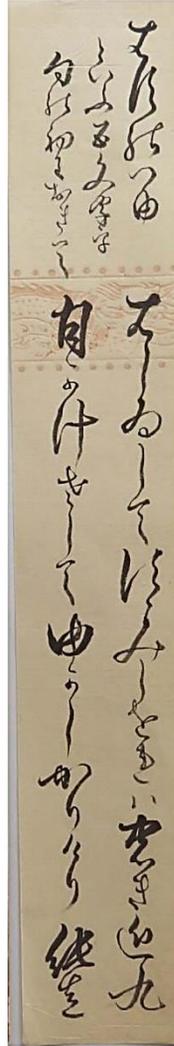
純造



はすのつゆ
といふ五文字を
句の初におきて

はしぬしてすゝみしをれはのき近く
月かけさしてゆかしかりけり

純造

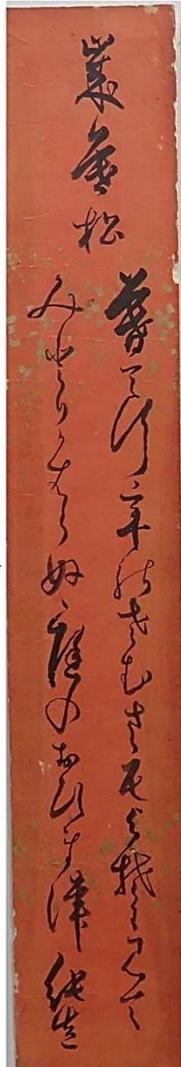


※「はすのつゆ」の五文字を、各句の頭
において詠んだもの

歳寒松

暮て行年ゆくのさむさもよそに見て
みどりかはらぬ庭のおひまつ

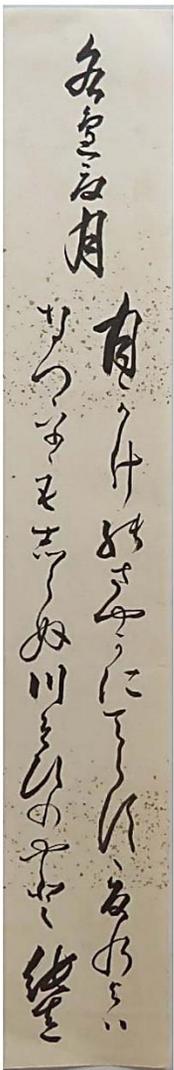
純造



水辺夏月

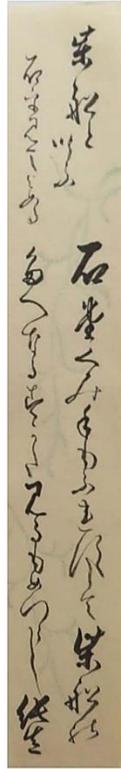
月かけのさやかにてらす夏のよは
なつをもしらぬ川そひのやと

純造



※うなひ髪を垂らして、うなじにまとめた十二歳くらい
までのこども
こ＝籠。虫かご

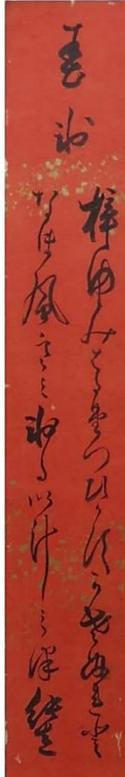
柴船といふ
石を見てよめる
石たくみ手もふれずして柴船の
たへなるすかた見るもめつらし 純造



※柴船＝柴を積んだ船

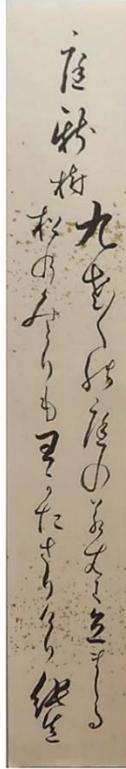
春氷

棒ゆみはるたつひかすかさぬれと
なほ風寒み氷るいけみつ 純造



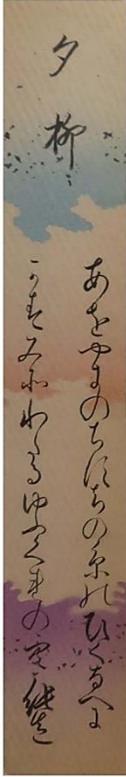
庭新樹

くさくさの庭の若はに立ましる
松のみどりもわかたさりけり 純造



夕柳

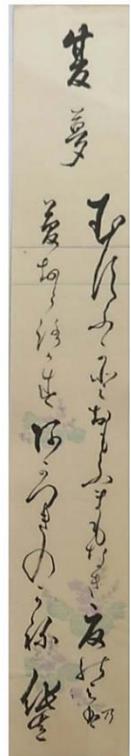
あそやぎのちすちの糸のひくなへに
かすみそわたるゆふくれの空 純造



※なへ＝上

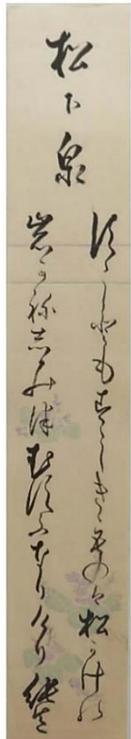
夏夢

むすふかとおもふまもなき夏のよの
夢おどろかすあかつきのかね 純造



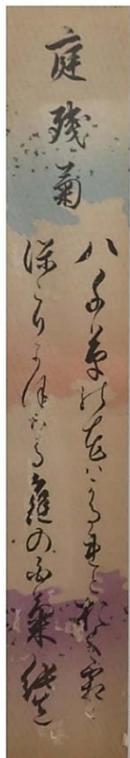
松下泉

すしともすしきものは松かけの
岩かねしみつむすふなりけり 純造



庭残菊

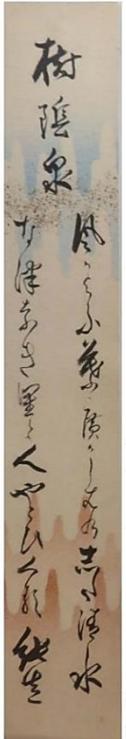
八千草の花はかるれとおく霜
ほこりかほなる庭の白菊 純造



※□は一字消えています

樹陰泉

風かよふ葉広かしのした清水
なつなき里に人やとひくる 純造

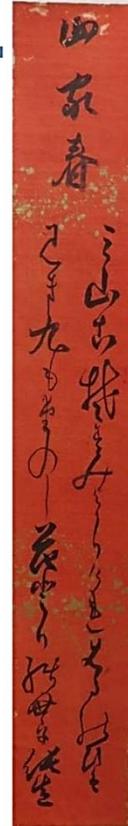


※かしは＝柏
とひくる＝訪れて来る

郷誠之助の和歌短冊

山家春

み山こそすみよかりけれはるのひは
みきくもたのし花とりの世を 純造



冬虫

ひとりねのふゆの夜寒のさびしさを
慰めかほにこほろきの噺 純造



名所森

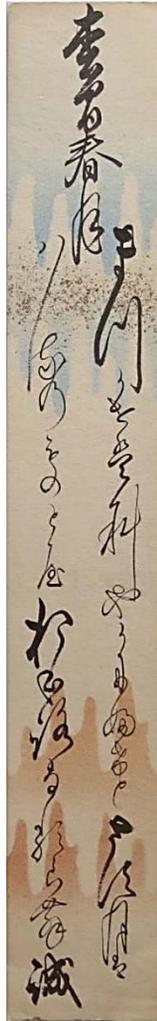
いまやう

加茂かはつゝみはるたけてなみ木の
やなぎえだたれぬ駒をはせゆくひとかけ
もみえみ見えすみなりにけり 誠



松間春月

まつかせはさやかにふけとさす月は
はるのものとやおほろなるらむ 誠



※つゝみ＝堤
「みえみ見えすみ」＝見え
たり見えなかつたり

社頭鶯

はつねをはさくくとならし千早ふる
かみの御前にうぐひすのなく 誠



※さくくとならし＝捧げる
というのだらう

読み 犬山城白帝文庫主任学芸員
 寛 真理子氏
 研究会 國島京子

しゅうしゅう

郷誠之助・根付を蒐集 海外に散逸するのを防ぐために収集し寄贈

根付

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

根付（ねつけ、ねづけ）とは、日本の江戸時代に使われた留め具。煙草入れ、印籠、巾着や小型の革製鞆（お金、食べ物、筆記用具、薬、煙草など小間物を入れた）、矢立などを紐で帯から吊るし持ち歩くときに用いた。江戸時代から近代にかけての古根付と、昭和・平成以降の現代根付に大別される。製作国の日本では服装の中心が着物から洋服に移り変わるとともに使う機会が減ったが、外国人に美術面で評価されるようになり、印籠と共に日本国外で骨董的な蒐集対象となった。

蒐集品として

根付は日本国内外で蒐集対象となっている。日本では郷誠之助、高円宮憲仁親王・久子夫妻が蒐集家として著名である。郷誠之助と憲仁親王が遺した膨大な数の根付は、いずれも東京国立博物館に寄贈され、その名を冠したコレクションとして所蔵されている。

郷誠之助寄贈根付274点

出展：東京国立博物館 (WEBサイトより編集)

東京国立博物館140周年特集陳列 根付 郷コレクション

2012年10月30日(火)～2012年12月9日(日)



白兔牙彫根付 線刻銘「蘭亭」（高さ2.5cm）
江戸時代・18世紀 郷誠之助氏寄贈

所蔵：東京国立博物館

郷誠之助（1865～1942）氏は、第一次世界大戦後から第二次大戦前にかけて、日本の経済界を牽引した大実業家です。経営危機に陥った幾多もの会社の再建に次々と成功し、貴族院議員や東京商工会議所会頭、日本貿易振興協議会会長などを歴任されました。氏が財界で活躍のかたわら25年余りをかけて収集した根付は、没後その遺志にしたがって当館へ一括寄贈されました。

根付は印籠や煙草入などを腰に提げる際に、紐の端につけた留め具です。明治時代以降、根付を使う習慣は失われますが、その一方で根付は欧米の美術コレクターの心を捉えました。多くの根付が海を渡って行くこととなり、郷氏は根付が海外に散逸することを懸念し、国内に良い作品を残し伝えるべく、収集を始めたといえます。

郷氏の収集した根付はその体系的な内容と質の高さから、根付愛好者の間で「郷コレクション」と呼ばれ、高く評価されています。郷コレクションには、江戸時代から明治期にかけての有名根付師の作品が満遍なく含まれているのです。今回の展示では久々に、その全てを一挙に公開いたします。根付のさまざまな主題や作風の違いなど、実際の作品を比較しながらご覧いただけます。

担当研究員の一言

東京国立博物館に根付の名品が収蔵されているのは、郷氏のおかげです。その先見の明に、尊敬と感謝の気持ちでいっぱいです。／竹内奈美子

主な出品作品 展示作品274点のリストがWEBサイトに掲載されています。

蛤牙彫根付 線刻銘「懷玉」	江戸時代・19世紀	郷誠之助氏寄贈
饅頭形唐美人牙彫根付 線刻銘「明鶏斎法実」	江戸時代・19世紀	郷誠之助氏寄贈
白兔牙彫根付 線刻銘「蘭亭」	江戸時代・18世紀	郷誠之助氏寄贈
風神雷神牙彫根付 線刻銘「鴛楽民」	江戸時代・19世紀	郷誠之助氏寄贈
面持猿木彫根付 線刻銘「三輪」	江戸時代・18世紀	郷誠之助氏寄贈
猩々木彫根付 線刻銘「寿玉(花押)」	明治時代・19世紀	郷誠之助氏寄贈
常盤牙彫根付 線刻銘「光広」	江戸時代・19世紀	郷誠之助氏寄贈
癒见面木彫漆塗根付 線刻銘「天下一出目は閑」	江戸時代・18世紀	郷誠之助氏寄贈
東方朔木彫根付 線刻銘「啄斎」	江戸時代・19世紀	郷誠之助氏寄贈
高砂牙彫根付 線刻銘「景利」	江戸時代・19世紀	郷誠之助氏寄贈
心磨牙彫根付 線刻銘「友親」	江戸時代・19世紀	郷誠之助氏寄贈
刀鍛冶牙彫根付 線刻銘「白雲斎」	江戸時代・19世紀	郷誠之助氏寄贈
大原女牙彫根付 線刻銘「光明(花押)」	明治時代・19世紀	郷誠之助氏寄贈
高砂牙彫根付 線刻銘「藻己刻」	明治時代・19世紀	郷誠之助氏寄贈

画像検索 <https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/>

東京国立博物館の郷コレクションは274点あり、列品番号はH-3925～H-4198まで。画像はその一部だけが見えます。

「別冊太陽 骨董をたのしむ『印籠と根付』平凡社(1995年刊)」

郷コレクションの章に郷誠之助が東京国立博物館に寄贈した根付写真と解説文章が100～110頁に掲載されています。



骨董をたのしむ 4
印籠と根付
 一九九五年一月五日 初版第一刷発行
 編集人 高橋洋二
 発行人 田中光則
 発行所 株式会社平凡社
 〒一五二 東京都目黒区碑文谷五一六一九
 電話・東京(〇三)五七二二二五七(編集)
 東京(〇三)五七二二二三四(営業)
 振替・〇〇一八〇〇一九六三九
 印刷所 凸版印刷株式会社
 ©株式会社平凡社一九九四年

とっ こう 郷純造の徳行 — 小野 正法寺 —



五光山 正法寺

郷純造は、郷家の菩提寺である小野の正法寺に約4千坪の土地寄付、また宅間良賀の涅槃図二幅及び十三仏の画幅を寄贈している。観音堂の再建も純造である。境内には郷純造の碑が鎮座している。

正法寺は 真言宗古義派の寺院で、山号は五光山。古くは奈良時代に始まるとされるが、幾度か兵火にかかりその歴史は途絶えている。美濃四国56番札所。

黒野城主加藤貞泰が再興

文禄3年(1594)豊臣秀吉の命により、加藤左衛門尉貞泰が「大慈山」と「医王山」両山を一つにして再興、叔父の桂泉僧正を招き、黒野城の祈願所「五光山蓮華王院正法密寺」とした。桂泉和尚は光泰の父景泰の子。慶長4年(1599)父光泰の七回忌法要に貞泰が父光泰の追善建基碑を建立。慶長年中に貞泰は客殿や雑舎を再興。

けんぼんちやくしよくねはんず

境内には本堂のほか、観音堂、地蔵堂がある。純造が寄贈した「絹本著色涅槃図」は優品として県重要文化財に指定されている。釈尊が宝台上に横たわり入滅の情景を描いた図二幅。一幅は南北朝時代の暦応3年(1340)の作。他の一副は室町時代初期の作。

涅槃図は元々は伊勢のお寺(観音寺)に寄付され、縁あって純造が入手し明治22年(1889)に寄贈。

安田以哉坊の桜塚と墓

境内には江戸時代、黒野生まれ偉人の一人。俳人芭蕉を受け継ぐ美濃派(獅子門)道統第5世、安田以哉坊 [正徳5年(1715)～安永9年(1780)享年66才]の桜塚と墓がある。



涅槃図 平安～鎌倉時代
南北朝時代 暦応3年(1340)
岐阜県指定重要文化財



涅槃図 鎌倉時代以降
室町～戦国時代の作
岐阜県指定重要文化財



観音堂



郷純造石碑

郷家写真・系図

君伝: 男爵 郷誠之助君傳

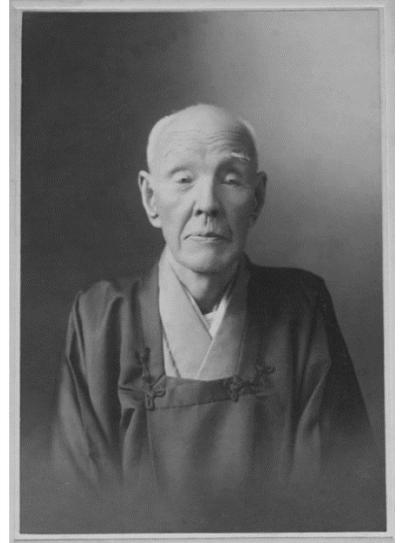
郷 純造翁



東京九段 長谷川写真館
郷和彦蔵



郷和彦蔵



84歳 明治42年10月撮影
東京九段 長谷川写真館
郷和彦蔵

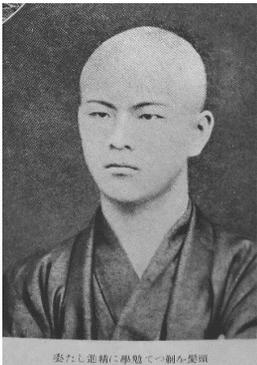
純造夫人



夫人純造に同大

君伝より

郷 誠之助翁



髪剃つて勉学に精進した姿

少年時代 頭髪を剃って
勉学に精進した姿
君伝より



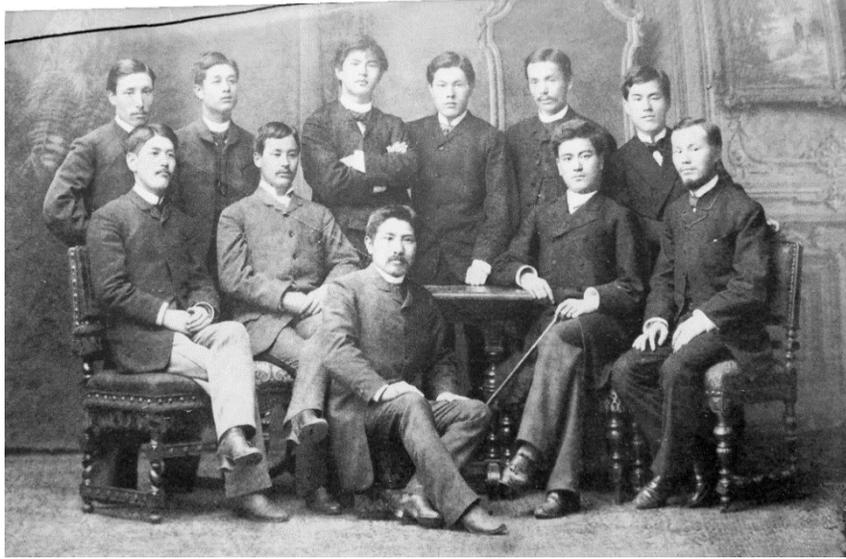
空を背負つて無銭旅行の道中姿

少年時代
傘を背負つて無銭旅行の道中姿
君伝より



青年時代及び兄弟
向かって右 誠之助
中央後ろ 義兄温
左 幸(後の川崎八右衛門夫人)
君伝より

前列右より
 中澤岩太、都築馨六、田村怡興造、土方久名、松方巖
 後列右より
 木場貞長、井上哲次郎、末岡静一、郷誠之助、藤沢利
 喜太郎、和田維四郎

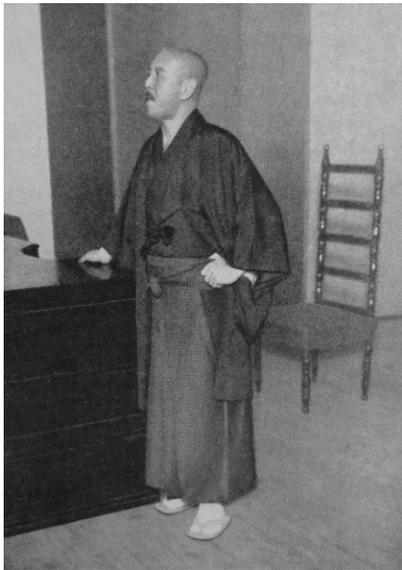


左の誠之助拡大

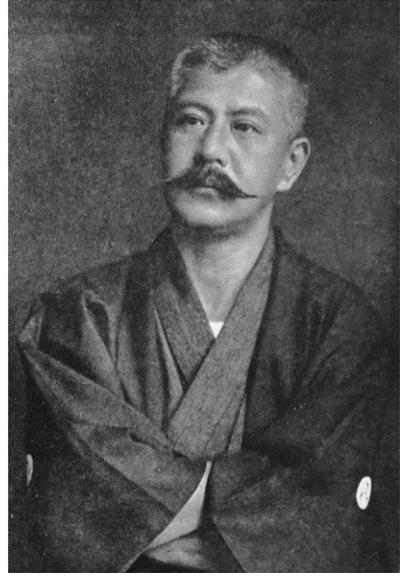
ドイツ留学時代の学友 君伝より



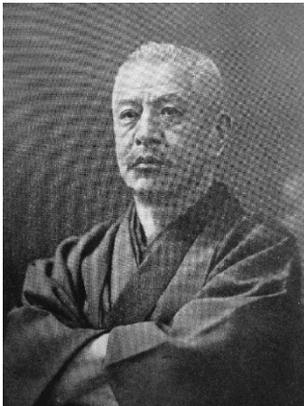
入山採炭社長時代 君伝より



演壇に於ける誠之助 君伝より



東株理事長時代 君伝より



東京電燈会長時代 君伝より



位階服姿 君伝より



晩年の誠之助 郷和彦蔵

東京の郷邸 玄関と全景
千代田区麴町番町

・誠之助の徳望を慕う財界
の後輩らが毎月一度の勉強
会「番町会」の会場となった



君伝より

・秩父宮献花
・「特旨ヲ以テ
正三位勲一等
セラル」立札



男爵郷誠之助葬儀 築地本願寺 君伝より



男爵郷誠之助葬儀及び告別式
上遺族席・下 葬儀委員席
君伝より



郷純造(左)・郷誠之助(右) 東京青山霊苑
ブログ「万遊歩撮」より



明治31年6月 郷和彦蔵 令和3年2月 筆者撮影
郷純造石碑(黒野墓地内)



郷純造石碑 令和3年2月
小野 正法寺内 筆者撮影

昭和時代初期の黒野

1948年(昭和23年)米軍撮影航空写真 国土地理院HPよりダウンロード

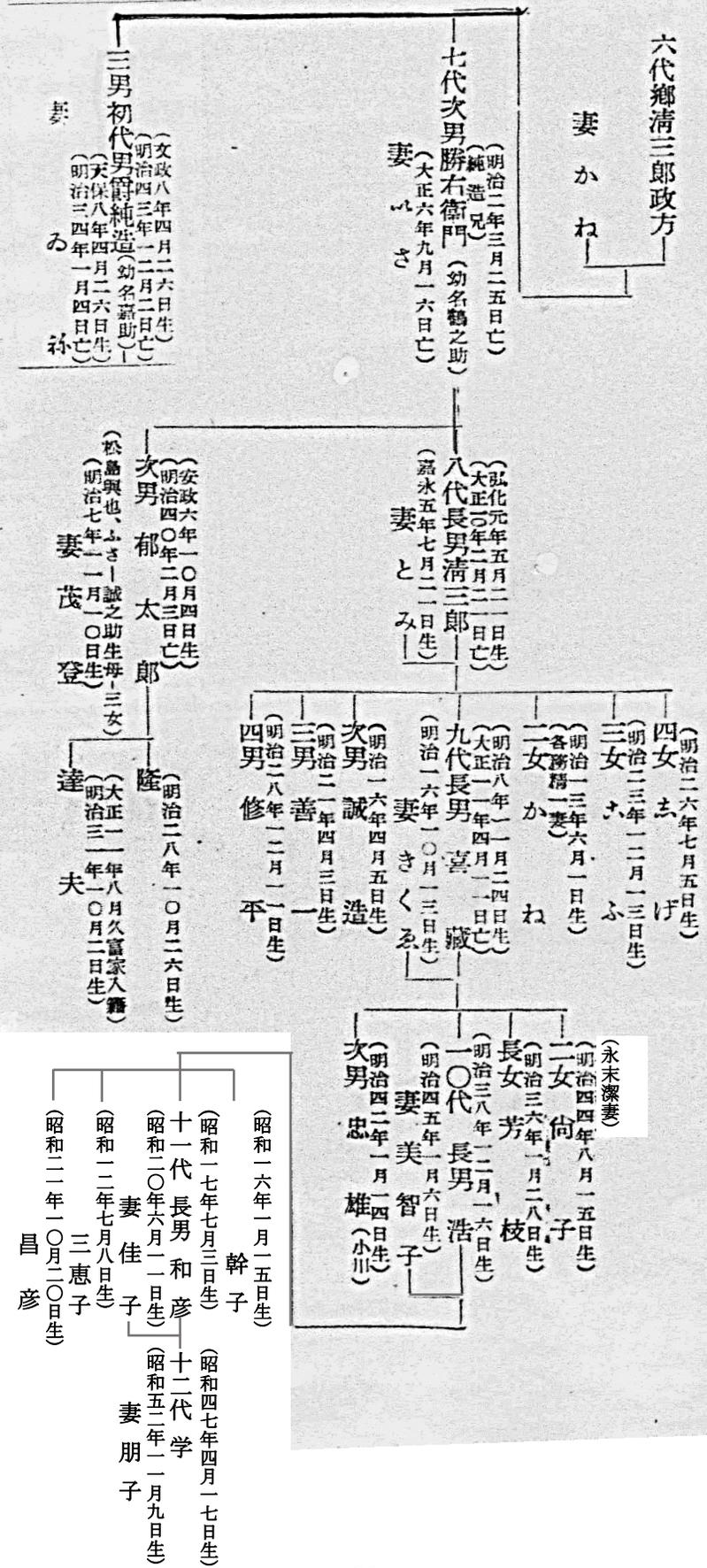
郷純造・誠之助生誕地



黒野村本家家系表

男爵 郷誠之助君傳より
但し昭和年代は追記

黒野村本家の家系表



生誕地に案内板設置

明治新政府の大蔵省で活躍

「渋沢栄一らの費用を大隈重信に薦めた男」

郷 純造



文政8年(1825)〜明治43年(1910)
黒野村の農家、大代清三郎の三男として生まれる。幼少より読み書き、算術は堪能であった。剣術は大塚藩匠藤清、下鶴岡の大野理忠女に、漢字は御所の郷金吾に学ぶ。

弘化元年(1844)20歳のとき、笠松代官になる控をもち、江戸へ出て大塚藩用人の専断取りを争う。次いで塩村牧を厚守藩輔の長崎奉行となりお供した。

嘉永4年(1851)、長崎奉行前シヨノン万次郎の取り調べを行う。翌年(1852)来航を予知。それら親書等は幕中、阿部正弘に報告。

文久元年(1861)〜慶応元年(1865)大坂町奉行所の家老となる。慶応2年、家老を辞して江戸に帰る。

鳥羽伏見の戦い直前に、幕府の株を譲り受け多額の幕臣となり、江戸城の無血開城に寄与する。

明治元年(1868)43歳、事務・財務処理能力を買われ、新政府に入り、金詰局組頭など大蔵省僚として活躍する。明治19年(1886)初代大蔵次官。明治維新後の重大な時期に一貫して我が国の財政を担当。特に幕末の全国大名諸藩の「藩債処分」に心血を注ぐ。明治21年(1888)63歳還官。

その間、旧藩臣の渋沢栄一、前鳥羽らの費用を大隈重信らに推薦した。大隈重信は「大蔵省へ人材を求めたい」と、郷純造君が流行帰りの渋沢君を推薦してきた。郷氏はなかなか人物を見る眼があった。氏の薦めで来た人物は皆良かった」と明治42年(1909)洋刊『産業の日本』で語っている。

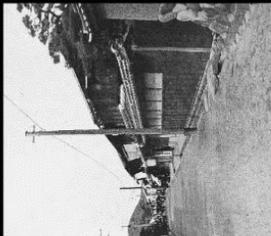
尚、純造の二男誠之助は数学家になり、四男忠作は2歳のとき三菱財閥創設者の岩崎弥太郎のたごとの願いで養子となり、岩崎彌太郎と改名、只誠之助と同様に数学家で活躍した。

また長女の孝子は東京川崎物産二代目の川崎久右衛門へ嫁ぐ。甥(妹の子)に神戶経済会の重鎮となった本郷出身の中島武市(シノガンクワイター・中島みゆきの祖父)がいる。

純造は隠居して「國意并報談話」を記す。郷里では漢字の森繁財、森村周羅子や原善三郎(阪三沢の養祖父)らと交流する。

貴族院議員 明徳、正二位、勲二等瑞雲章、85歳亡。

純造は、黒野小学校に約2千坪、黒野多賀神社、小野の正法寺、黒野墓地などに土地を寄付した。また多賀神社の拝殿、正法寺に観音堂や経樂園を寄付した。



郷純造・誠之助の生誕地(現在地) 昭和17年頃の写真

明治〜昭和初期・財界の大御所

「渋沢栄一を継いだ日本経済界の世話役」

郷 誠之助



慶応元年(1865)〜昭和17年(1942)
郷純造の二男として黒野村に生まれる。大坂町奉行の父純造のもとで育ちられる。東京鐵道に住み明治3年童蒙小学校に通う。生まれつき負けず嫌いで同輩を随分困らせた。明治10年12歳のとき仙台に赴き、仙台中学に学ぶが2年で帰京する。東京の私塾で英語・漢字を学ぶ。

明治16年(1883)、18歳のとき東京帝国大学英文専科に入学。翌年2月に伊藤博文の大蔵省へ紹介状を携えてトイツ留学のため横浜から渡欧。トイツでは哲学・経済学を学び哲学博士の学位を取得する。留学中、森岡外と出会いトイツ日記に載る。また、北里聖三郎(後の日本細菌学の父)や長井隆義(後の日本漢学の父)と交流。約8年の留学を経て明治24年(1891)帰国。

帰国後一転して実業界に身を置き、経實危機に陥った日本メリヤス・日本紡績・日活・東宝電燈・入山探炭(後の常盤炭産)や王子製紙などの整理・改革に携わる。30社に及ぶ企業、70を越す要職(東京株式取引所理事、長・日本産工会議所会頭・日本貿易振興協議会会長など)を歴任。渋沢栄一を継ぐ日本経済界世話役の大御所となった。

純造は慶の直前「自分の亡き後は郷家(誠之助)にまらしくお頼みしたら」という遺言を伝えたり、誠之助の手腕を高く評価していたことがうかがえる。

誠之助は「私利私欲を追求するだけが財界人の目的ではない。財界人は国家の利益を代表せねばならぬ」というのが口癖であった。東京国立博物館に寄贈した「郷コレクションの紙付」がある。貴族院議員 正三位勲二等、男爵。父純造と共に青山墓地に眠る。77歳亡。



入山探炭社長時代



令和3年(2021)3月21日
設置者 黒野城之加藤良業公研究会
協賛 黒野まちづくり協議会
地域の事業者様

訂正 郷誠之助 右から5行目×番長→○番町、12行目×哲学博士→○経済学博士

明治・大正・昭和初期 郷土の偉人 郷純造・誠之助生誕地に案内板設置・除幕式

2021年(令和3年)3月21日に予定していた除幕式は、雨天延期で4月4日に開催。黒野自治会連合会西垣薫会長、岐阜市市民活動交流センター堤正男所長など来賓17名と研究会員19名の参加で除幕式を開催。

今年はNHK大河ドラマ「青天を衝け」が放送中で、主人公渋沢栄一と郷純造や誠之助との関係を、この機会に地域に知っていただこうと生誕地に案内板を企画し、地域の事業者様の寄付金と黒野まちづくり協議会の支援で設置できました。当日の様子はCCNTV放送や新聞2社と情報誌の取材報道もあり、今後、黒野出身両名の知名度も認知され、郷土の歴史文化の伝承と発展に寄与できるものと思います。



郷家11代当主 郷和彦氏



引用文献

掲載順不同・敬称略

刊本

- ・東京大学出版会「大久保利通文書四」岩倉具視宛て 1870年(明治3年)
- ・筑摩書房「独逸日記/小倉日記 森鷗外全集13」1885年(明治18年)
- ・郷純造「随意荘稚集録 上・下」1889年(明治22年)
- ・実業之日本社「渋沢男爵が初めて世に出でし當時の大元氣」1909年(明治42年)
- ・岐阜県教育会「濃飛偉人伝 全」1933年(昭和8年)
- ・慶應書房「財界随想 郷誠之助」帆足計 1939年(昭和14年)
- ・今日の問題社「人間・郷誠之助」野田禮史著 1939年(昭和14年)
- ・郷男爵記念会「男爵 郷誠之助君傳」1943年(昭和18年)
- ・毎日新聞社「極道」郷誠之助の華麗な人生 小島直記著 1971年(昭和46年) 11月
- ・大阪商工会議所「五代友厚関係文書目録」1973年(昭和48年)
- ・講談社「大東京繁昌記山手篇」有馬生馬記 1976年(昭和51年)
- ・第一法規出版「郷土歴史人物事典岐阜」吉岡勲他 1980年(昭和55年)
- ・シグネチャー「日本経済のパイオニア⑫」郷誠之助 板橋守邦記 1984年(昭和59年)
- ・「黒野史誌」郷 純造 1987年(昭和62年)
- ・「黒野史誌」黒野村の歌 1987年(昭和62年)
- ・岐阜新聞・岐阜放送「ぎふの偉人たち」郷誠之助 1988年(昭和63年)
- ・岐阜市立黒野小学校「ふるさと黒野」郷誠之助1996年(平成8年)
- ・文芸春秋「東京の地霊」鈴木博之著 1998年
- ・東京大学出版会「財界の政治経済学」松浦正孝著 2002年
- ・日本郵政公社「便生録」前島密 郵便創業談 2003年(平成15年)
- ・郵政博物館「研究紀要 第11号シンポジウム特集」井上卓朗著 2020年
- ・山川出版社「史料を読み解く」4 鈴木淳著 2009年
- ・同上掲載 早稲田大学図書館蔵 大隈重信宛郷純造書簡 1877年(明治10年)
- ・「大宮の郷土史28・29号」旗本牧氏 織本重道著 2009年・2010年
- ・大洲市史写真版「東京名勝呉服橋之図」大洲市誌編纂会 1974年(昭和49年)
- ・東京堂出版「渋沢栄一を知る事典」渋沢栄一記念財団 2012年
- ・黒野小学校男子同窓会「本校沿革概要」1928年(昭和3年)
- ・文芸春秋「日本の血脈」哀しき父への鎮魂歌 中島みゆき 石井妙子著 2013年
- ・岐阜県歴史資料保存協会編「大志を抱いた人びと 岐阜県人の北海道開拓物語」1998年
- ・原三溪展実行委員会「図録 原三溪と日本美術」三溪園・岐阜市歴史博物館 2014年
- ・中山道加納宿文化保存会「中山道加納宿66号・67号」2015年・2016年
- ・「東京海上火災保険株式会社六十年史」昭和15年
- ・東京海上火災保険株式会社「各務氏の手記」と「滞英中の報告及び意見書」昭和26年
- ・拾芳会「平生鈞三郎」河合哲雄著 昭和27年
- ・財団法人 各務記念財団「各務鎌吉君を偲ぶ」昭和24年
- ・財団法人 名古屋大学出版会「平生鈞三郎自伝」1996年
- ・明治文献資料刊行会版「大蔵省編纂 明治前期財政経済史料集成」1963年
- ・東京美術倶楽部「郷男爵家御蔵品入札」藝阿弥ほか 1919年(大正8年)
- ・月刊書道情報誌「書道界」松村一徳記 2017年11月号

文献・その他

- ・神戸大学付属図書館「郷誠之助の足跡」2010年
- ・大阪商工会議所蔵「五代友厚宛郷純造書簡」
- ・郷清三郎宛郷純造葬儀案内状 1910年(明治43年)
- ・谷汲山華厳寺提供 台風で倒れたモミの木 2017年
- ・「藩債処分・・・幕末諸大名の借金顛末記」服部高信記 2020年
- ・神戸大学付属図書館「郷誠之助の足跡」2010年
- ・小野正法寺資料

新聞記事

- ・岐阜新聞「分水嶺」2012年（平成24年）
- ・日本経済新聞「各務鎌吉」2000年（平成12年）
- ・岐阜新聞「ぎふ人物伝 実業界の巨人各務と平生」2009年
- ・報知新聞「郷誠之助の足跡」神戸大学経済研究所新聞記事文庫1936年
- ・岐阜日日新聞「50年の証言23」経済会の再建に献身 郷誠之助 1975年（昭和50年）
- ・中日岐阜ホームニュース「伝説と歴史の谷間」甥が語る男爵 郷純造 1985年（昭和60年）
- ・電気新聞「士魂商才」渋沢栄一(58) 北康利 作 2020年（令和2年）
- ・中日新聞「百年百人」郷純造・誠之助父子 1988年（昭和63年）
- ・中日新聞「犬飼元首相のわび状」2012年（平成24年）
- ・岐阜新聞「渋沢栄一に恩人・明治政府官僚の郷純造」 2021年（令和3年）
- ・中日新聞「郷純造と次男誠之助の生誕地紹介」2021年（令和3年）
- ・岐阜新聞「郷純造生誕地に案内版」2021年（令和3年）
- ・中日岐阜ホームニュース「郷純造、次男誠之助の生誕地黒野に案内板設置」2021年
- ・読売新聞「一軸が三二万円」1919年（大正8年）

WEB・データベース

- ・日経ビジネス電子版 渋沢栄一一万円札
- ・フリー百科事典ウィキペディア 郷純造
- ・フリー百科事典ウィキペディア 郷誠之助
- ・フリー百科事典ウィキペディア 川崎八右衛門（二代目）
- ・WEB 日本史事典. Com
- ・国立国会図書館サーチ（郷純造・誠之助の書翰・著書）
- ・公益財団法人 渋沢栄一記念財団 デジタル版『渋沢栄一伝記資料』
- ・埼玉県立久喜図書館「レファレンス事例詳細 渋沢栄一を推薦資料」2013年
- ・埼玉県日高市ホームページ「渋沢史料館館長 井上潤 第7回講演」2019年
- ・ブログ管理者pansars 「大河ドラマを10倍面白く見る方法」渋沢栄一 2020年
- ・千代田区麹町出張所地区連合町会「麹町界限 わがまち人物館」郷誠之助 2020年
- ・WEB BIGLOBE 郷男爵家御蔵品入札

文芸・趣向

- ・郷純造の水墨画 郷和彦蔵
- ・牧志摩守義制の書 郷和彦蔵
- ・郷純造の剣術目録三巻 郷和彦蔵 1844年（天保15年）
- ・郷純造「松石山房印譜」、「松石山房印譜続集」郷和彦蔵
- ・郷純造の書 郷和彦蔵
- ・郷純造の和歌短冊 郷和彦蔵
- ・郷誠之助の和歌短冊 郷和彦蔵
- ・フリー百科事典ウィキペディア 根付
- ・東京国立博物館WEBサイト 根付郷コレクション
- ・平凡社「印籠と根付」別冊太陽 骨董をたのしむ 1995年1月

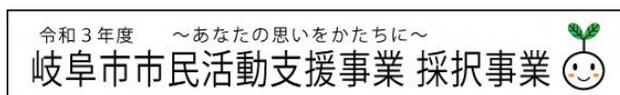
郷家写真・系図・その他

- ・郷純造翁・郷誠之助翁
- ・男爵 郷誠之助君傳
- ・国土地理院HP 昭和23年米軍撮影航空写真
- ・郷家家系表 2
- ・黒野村本家家系表
- ・生誕地設置案内板
- ・純造・誠之助生誕地案内板設置 除幕式 2021年4月

※ 寄稿・編集にご協力いただいた皆様方(敬称略・五十音順)

井上潤・織本道重・笥真里子・國島京子・郷和彦・郷孝夫・光輪寺・柴橋正直・正法寺・高井勝・富樫幸一・服部高信・名知勲・古河太麻命・山田広志

本書は令和3年度 岐阜市市民活動支援事業 採択事業の助成金及び地域の事業者様などの寄付金にて印刷製本しました。



渋沢栄一を大蔵省に推薦した郷純造
渋沢栄一を継いだ経済会世話役の郷誠之助

明治・大正・昭和の郷土黒野の偉人
郷 純造・誠之助父子資料集

初版発行日	2021年(令和3年)8月10日
発行者	黒野城と加藤貞泰公研究会
編集	会長 河口 耕三
印刷・製本	ヨツハシ株式会社
問合せ先	研究会ホームページ

黒野城と加藤貞泰公研究会

令和3年度 ～あなたの思いをかたちに～

岐阜市市民活動支援事業 採択事業

